

501  
19



始



164

納本  
有  
新

死線を越えて  
下巻

賀川豊彦著

壁の聲きく時

改造社版

大正  
13.12.4  
内交

501-19



# 死線を越えて 下巻

—壁の聲きく時—

賀川 豊彦

銀のやうな五月雨が毎日降り続いた。

妻の喜恵子は、まだ横濱の女子神學校から歸つて來ない。新見は、六月の末まで一人淋しく、貧民窟の五軒長屋の表二層を貸してゐた。青年達の炊事は、みんな喜恵子の妹の初子がしてくれた。

初子は感心な眼で朝は五時から起き、一生懸命に炊事をする。そして、青年達を工場に送り出し、一が少し遅れて六時頃に起きてくる頃には、ちやんと表の通りを掃除してお臺所を片付けてゐるのであつた。

榮一の日課は一週間定期の傳道集會の外に、神學校を教へて廻ること、奉仕的に開いた夜學校を毎晩教へることであつた。彼は神戸女子神學校、ランパス傳道女學校、大阪市外のバプチスト女子神學

靜かに壁が私に囁きます。前途を遮る障壁はいつも私には默示です。

靜かに壁が私に聲をかけてくれます——「己を見捨てないものは治てられない」と。

壁の聲をお聞きなさい！ 壁の聲を——あなたの行手を遮る障壁は無生の物ではありません。恐

慌に泣くものも、震後に悩むものも壁の聲をお聞きなさい！ 靜かに壁があなたに聲をかけま

校の三つを教へて廻つた。一つの學校で、一週四時間づゝ教へて合計四十五圓の月給を貰ふ約束になつてゐた。それでどうにか食へると思ふたから黙つて通ふことにした。

晩になると彼はイエス團に泊つて居る青年を中心として、小さい夜學校を開いた。生徒は初子を入れて僅かに五人で他の四人は、ゴム會社に通うて居る田口とプリミヤに通うて居る竹田の弟とその友人の星野と、川崎造船所の鑄物工場に行つてゐる木山であつた。それを頭腦の程度に従つて二組に別けて教へた。教科書は中學校の古い教科書を古本屋から買つて来て、それによつて教へるのであつた。

榮一はそれを楽しみにしてゐた。この夜學校は新見が渡米後一度中絶してゐたものを竹田が神戸教會の信者でグレンシヤム會社の書記をしてゐた森山一さんを引張つて来て、英語の稽古をし出したのが始まりで森山さんも續けて、英語を教へに来てくれるのであつた。

ほの暗い十六燭の電燈の下で、五人の生徒は一生懸命に勉強した。その中でも初子は頭抜けてよく出来た。然し晝の勞働に疲れて折々居睡りをしてゐる。

榮一が歸つてくるまでの、イエス團の生活は、實に慘な程簡單なものであつた。

木賃宿であつた家とその儘借り受けたのだから、その穢いことは想像以上であつた。

青年等は座つて食ふ場所さへ無かつた。お臺所と云ふのが、一間に二間の細長い炊事場に隣つた土

間で——そこには窓の一つもあるではなし、水を二町もある遠いところから汲んでくる。その水が土の上にとぼれていつもじくじくしてゐる。そのじくじくしてゐる土べたの上に貧乏な青年達は榮一が嘗て古物屋から五十錢で買つて来たテーブルを据えて、その側に立つたまま、食事をしてゐた。その有様を見て、榮一は數年前自分が川崎の權藏部屋に居たことを思ひ起した。

初子までが、青年と同じやうに、立つたきりで食事して居るのが可哀相であつた。さうかと云ふて、榮一に金が餘分にあるではなし、色々な設備をしようと思へば、どうしても二三百圓はゐるもんだから、榮一も辛抱してみんなと共同生活をしてゐた。

其頃日曜學校をしたり、長屋の子供を集めて、一緒に遊ぶ度毎に新見の氣附いたことは貧民窟に著しく失明者の増加しつゝあることであつた。それが何によつてさうなつたか彼は知らなかつた。

然しトラホームは貧民窟の住民の九割までがかゝつてゐる病氣なので、或は急性トラホームか、または麻毒性のものであるかも知れぬと考へた。

榮一は、毎日醫者が貧民窟を巡回してくれるやうになれば善いと思つた。自分が愛してゐた甚公も、虎太郎も、その弟もみな一眼を失明させてゐる。榮一は自分が質の弱い眼を持つてゐるので、眼病の人には特別に同情した。

榮一は醫者が巡回してくれなければ、點眼して廻るだけでも、どれだけ病人を助けることが出来るかも知れぬと考へたので、醫者から點眼薬を貰つて来て、長屋を巡回して子供の眼に點眼をして廻つた。不思議にもそれがよくきくのですぐ評判になつた。

二

榮一は喜恵子の歸省を迎へる爲めに、自分は一人で、臺所のじくじくした土間に坐板を張つて居た。壁の關係や、入口の關係で、土の上のすぐ横木を据え、その上に板を揃へて釘を打附けるのであつた。

いくら簡易生活に、みんなが甘んじ得るにしても、濕っぽい土間に立つた儘、三度三度の食事をすると云ふことは不衛生でもあり、享樂を失ふことでもあるから、エマーソンのお弟子の超然主義者トローの眞似をして榮一は自分一人で造作にかゝつてゐた。

使ひつけ無い鋸や鉋がどうしても云ふことをきか無い。仕舞ひには、初子が、

『兄さん、妾がやつてみます！』

と云つて鋸を取り上げた。

初子が取りあげてみたところで、男に出来ないものが處女に出来る筈が無い。鋸の齒が横木になる丸太の心に引懸つて動か無い。動かない奴を動かさうとするから鋸の身が蚯蚓のやうにうねる。

『兄さん、やつぱり切れませんわ！』

初子は頭の根元まで赤らめて降参した。然し初子が彼の爲すことに一々同情を以て助けてくれることが實に有難かつた。

『妻と云ふ女性が無いにしても、心から自分に共鳴してくれる義妹があれば一生獨身であることが出来る』と思ひもした。

榮一は手慣れぬ鋸の柄を掴んで、ギイコ／＼やつて居る間、そんなことばかり考へてゐた。手慣れない業でも、手工の仕事は面白いものである。所謂創造のよろこびが、そこにある。榮一は狭い臺所に板が、張り詰められた後のことを想像してみた。

「——板間がトリア・ホテルか、オリエンタル・ホテルのダイニング・ホールの床のやうに光る。そこへ五十錢で買ふた古机を置いて、みんなと一緒に愉快に食事をする。食事の後の世間話に興がのる。喜恵子も面白い學校生活の話を持ち出す、自分も西洋の面白い話をする——」

こんな空想の中に、榮一は丸太を切り放ち板を張つた。三枚目の板を釘で打付けた時に十二時のド

ンが鳴つた。が、書飯もそこくにして、また四枚目の板から張り出した。

初子は相變らず、熱心に手傳つてくれる。然し慣れ無い仕事だけに思つたやうに進まない。釘が真直に這入らない。少し烈しく撃つとすぐ横つこつちよに曲つて了う。オリエンタル・ホテルの板間どころか、阿波の田舎の天神さんのお宮の板間だけでも及ば無い。充分寄せて隙間無く打つけた積りなのに釘を全部打付けた後によく見ると、二分も三分も隙いてゐる。鋸の入れ方が悪い爲めに真直に断面が合はなくて、端の方で五分から一寸近くもすいて居る。それを見て、榮一も初子も大笑ひをした。

そこへ、ぼつかり、信吉が馬子の姿その儘で歸つて来た。

『何に爲よつてだんの？ 坐板張りだつたか？ お、お、……この不細工なこと！ 矢張り先生には大工の仕事は出来んなア……どれ、俺がやつてあげまつさ！ その鋸を俺に貸しなはれ！』

さう云つて、新吉は榮一の手から鋸を奪ひ取つて、五枚目の板からべたく、張つて行つた。然し新吉もあまり上手で無いとみえて、榮一の張り方に較べて更に荒つぽい。

『宇野君、駄目だぜ！ 君の分に較べると、僕の張つた方がづつと善く出来てゐる。』

新見がさう云ふと、新吉も敗けぬ氣になつて、自分と新見の仕事を見較べて嘆息する。

『先生より下手かなア？』

新見がアメリカから歸つて五日目であつた。ひよつくり、宇野信吉がイエス團に舞ひ戻つて来た。

『先生、新開地で、ひよつくり竹田さんに會ひましてな、先生の噂が出たものですから、またやつて来ました。』

宇野信吉は、これまで二三度新見榮一を慕ふてやつて来た、土木建築業に關係のある青年であつた。血統の善い家筋に産れてはゐたが、放蕩の爲めに家を飛び出し、自分の好きなことをして土方の仲間に入つて居ることがあつて身を立てようと、キリストを信じたのであつたが、どうしても身の治まりがつか無いので各地を遍歴して落付き場所を探して居るのであつた。

彼は日本全國を流浪して歩くことが好きであり、各地の名士を尋ねて道をきくことが好みであつたものだから、名士の消息にはよく通じてゐた。新見も彼にまだ純真なところの残つてゐるのを愛し、いつ來ても心よく話をした。

宇野は口癖のやうに云ふてゐた。

「先生のところに長く居らしてくれて、悪い事をするやうになつたら一々叱つてくれると、私だつて聖い生活を送るのだからア……私には誰れも叱つてくれる人が無いので、いかなのぢや……先生また来ますから、一生でもかまわんから、先生の脇に置いて貰いたいなア」

かう云ふて別れたのが 大正三年の夏であつたが、大阪でひよつくり竹田に會つて新見が歸つて居ると云ふことを聞いて尋ねて来たのだ。

彼はでつぷり肥つた、顔は和蘭人のやうに赤く、凛々しい肩が特別に眼につく立派な體格の持主であつた。

「こんな男が、悪いこと爲さうにも無い」と思へる位であつた。

然し衣服と帯は如何にも遊人の着るやうなもので、指には金の指環を四つもはめ、腕にも金の腕環を拵めて居る。最も眼につくのは門歯で、上顎の生歯四枚をわざ／＼引抜いて、金の義歯をいれてゐる。

新見は信吉の心理状態をよく知つてゐた。信吉は最近妹を失ふて煩悶してゐるのであつた。信吉と新見はもの一時間も話してゐたが、突然、信吉は泣き出した。

「こんなものなんか、みんないらんわ……」

信吉はそこに、金の指環、腕環、金時計をみな抛り出した。

「新見さん、之をみんなあなたにあげますわ、あなたは之を新川の貧乏人の藥代にでも使ふて下さ

So」

信吉は眉間の立皺を震はせて云ふた。

「祇園のお茶屋にでも行くときには、こんなものでも飾り立てなきや、もてんけど改心する段になるとこんなものは邪魔になる。成金時代もいつまでも續くものぢやあるまいし、私も今の中に改心して、妹の魂を慰めてやりたいのです……」

それから信吉は、新見の所に弟子入して、茲二三年は是非とも、貧民窟の爲めに盡したいと誓つた。一寸出て行つたかと思ふと、早や絹の着物を賣入して木賃宿の人々が着るやうな縞の筒袖の單衣に着換へて来た。

榮一は信吉の思ひ切りの善いのに驚いて了つた。

「新見さん、私もこれで氣が清々しました。これから仕事の口を探がして来ます」

信吉は日暮頃何處にか出て行つてゐたが、晩になつて歸つて来た。

「馬子の口がありましたから、明日からすぐ労働します。遊んで居てもつまらん。竹田君のやうに、僕



も儲けて来て、少し先生のお助けしますわ。」

そう云ふた唇に微笑と平安とが溢れてゐた。榮一も信吉の美しい心持を見て、感激の涙をそつと袖口でふいたのであつた。

宇野が労働に行き出して今日は一週目位であつた。宇野も労働の歡喜に溢れてゐるし新見も信吉の馬子姿を見るのがうれしいのであつた。

「君、どうや、馬子はえらいかい？」

「いや、先生大丈夫ですよ、遊んで居るより氣が樂でさア……」

彼はまた、口に喰へてゐる大きな釘を指に取つて、それを板に打付けた。

そこへ、星野が歸つて來た。信吉は鋤を一寸休めて、

「星野君、えらい早いア。」

「君もえらい早いぢやないか？」

「交代日ぢやからな、半日ぢや……君はどうしたんな？」

星野は丸顔の少し淺黒い顔色をした青年であるが疲れ切つた態度で、發音するのも面倒なと云ふ言

葉つきで答へた。

「今朝はズク鐵を十七噸も運ばされたので、尻割つて歸つて來てやつた。長いこと遊んで居たので、ズクを一々車の上に積み重ねるとどだい全くなわんよ、えらくつて……」

「宇野君！」

星野は急に元氣付いたやうな口調で呼びかけた。

「何やな、えらい改たまつて！」

星野は急に新見に向ひ――

「先生！あなた巴枝さん知つとつてだつしやる？」

「知つてゐるとも、北本町六丁目の内の筋の娘ぢやないか？」

「歸つて來て居りまつせ！」

「歸つて來てゐるつて？何處へ行つてゐたんだね！」

「先生、御存知ぢやないんですか――新川の遊廓へ女郎に賣られてゐることを？」

星野は吃驚するやうな口調で尋ねた。

宇野は蹲つた儘、鋤打つ手を休めて星野に尋ねた。

「いや、そりや初耳ぢや、あの巴枝さんが新川の遊廓に賣られた？　そう云へば、新川で巴枝さんに善く似た娘が居ると思つた。然し私の顔を見るなりすぐ隠れて了ふたので、その後竹田さんに尋ねてみようと思ふたなり忘れてゐた……新見の方に振り向いて……然し、先生、あなたがどれだけ骨を入れてもこの新川は駄目だつせ、阿爺が賭博の資本に盡きたと云つて、現在自分の可愛娘を女郎に賣るなんて、全く新川に居るものは人面獸心の奴等ばかりぢや。」

新見は何事か、考へ當ることがあつたと見えて、星野に尋ねた。

「玉枝さんも、竹田君の話によると、播州の何處かの料理屋へ仲居にやられてゐると云ふがほんとかね？」

「私は玉枝さんのことは充分知りませんが、なんでも竹田君もそんなことを云ふて居りました。」

星野の答をきいて宇野は目を見張つて云ふた。

「先生、玉枝のことなら、私が一番よく知つて居りますよ、玉枝は今九州の炭坑へ淫賣に賣られて行つて居りますわ。實はね、先生、それに就て、私は随分面白い話を持つて居るので、玉枝が室津の料理屋へ前借二百圓で賣られたと、竹田君に聞いたものですから、私はすぐ室津へ飛んで行つたんです……救ふてやらうと思ひましたのでね……いや白狀すれば、あの娘がすきでしたものですから

な、あんな可愛い娘をわやくやにして了ふのは惜しいと思つて、少々金を持つて飛んで行つたのです。ところが先生、先方はどうしても、玉枝を隠して私に會はさなかつたのです。」

新見は玉枝の話が出ると耻かしくして氣がハラ／＼することを覺えた。

初子は流し場で食器の仕末をしてゐる。

「宇野君、それは一體何年前の事だね。」

「一昨年のことです——あなたが米國へお立ちになつた翌年です——そうしたところがね、先生、私もその道にかけては黒人ですから、一週間もそこで居坐りましたよ。ところがとう／＼玉枝さんの居るところを見付けました。」

玉枝さんは室津の顔役の妾のやうになつて居ることがわかりました……顔役と云つても親分ぢやないのです。室津に波多野と云ふ博徒の親分があります、その配下で、あれが二番目か三番目位の乾煎でせう、それは仕方の無い破戸漢がありましてなア、その妾にせられて居るやうでした。」

「可哀相にね」

初子は吃驚して、茶碗を洗つてゐる手を休めて、

「兄さん、玉枝さんて、姉さんと一緒に印刷會社に行つてゐたあの玉枝さんですか？」

『そうだよ！』

新見の眼には、涙が沁み出て居た。

『それがね、先生、私が伏見で今年の春宇治川水電の工事を受負つて幅をきかせてゐる時に、尋ねて来たのです。そして、二三月私の配下として使つてやつたのですが、玉枝はどうしたと尋ねましたら、賭博に負けて金が欲しかつたから、九州の炭坑へ淫賣に賣つたと云ふて居りました。……先生、福岡縣に直方と云ふところがありますか、なんでもそこに大きな淫賣宿があるそうですな、そこは女郎屋と少しも變らないところだそうです、そこへ玉枝は賣られてゐるらしいのです。……先生の女の弟子もみな駄目ですなア、巴枝さんと云ひ、玉枝さんと云ひ、それにお隣の花枝さん……私の知つて居るだけでも三人も身賣させられてゐるぢやありませんか！』

『ほんとに、悲惨なものだね、貧民窟の娘等に貞操とか貞節とか云ふものを要求するのが間違つてゐるのだね、そんなことを八釜敷云ふて居れば飢死するか、殺される、どちらだからね。』

『先生、玉枝さんを救つておやりになる氣はありませんか？』

『救つてやりたいなア』

宇野はニタ／＼微笑を頬に浮べ乍ら、

『先生も、かなり、玉枝さんを可愛がつてゐたと云ふ評判でしたぜ……あなたが米國へお立ちになつた後で、みんなそんなに云ふてゐましたよ……』

『もう、許してくれよ、宇野君、』

興奮した時にいつもするやうに、新見は頬の下の皺をびりつかせた。

『ぢや止めておきませう。然し、少しの金で救つてやる事が出来るのだからな、直方で淫賣さすなんか可哀相ぢや、先生、救ふてやりませうや』

『どれ位金があるだらうね』

『なに二百五十圓か、三百圓あれば買ひ戻せるでせう。』

『居るところは判つてゐるかね』

『そら、室津に聞きにやれば、すぐわかると思ひます。聞いてみませうか？』

『ぢや、そうしてくれ給へ、僕も一つ考へてみるよ』

さう答へて新見はまた下手な釘打ちを始めた。

『巴枝さんは、何故、うちへ來ないんだらうね？』

新見は星野に尋ねた。

「巴枝さんも先生のお顔を一度でも善い見たいと云ふて居りますけれども、城が高くてよう這入つて来れないそうですよ……さつき合つた時も巴枝さんは「先生に叱られるから怖い」と云ふて居りました。」

「先刻合つたつて、何處で合つたの？」

「幼稚園の前で合ひました。多分風呂に入浴に来たのでせう。眞鍮の盥の中に石鹼箱や手拭を入れて持つて居りました。」

「會ひたいなア」

「尋ねておらしたらいいでせう。」

「巴枝さんの宅は昔のところかね？」

「そうです、もとのところですよ」

「では、後程、會ひに行つて来よう。」

宇野は熱心に鍮を振るつてゐる。口にくわへた釘を一本一本右手の指に受取つて、更にそれを板の上の墨で記號の出来た上に叩き付けた。

星野も、新見と宇野の二人が一生懸命に座板を張つてゐるのを見兼ねて、手傳ひ始めた。

仕事はどしどし進行した。

もう板が八分通張れたと思つた頃、淺黒い皮膚に、脂粉を濃く塗り髪を大きな烏田に結つた甘前後の女が戸口から内庭を覗いた。

「星野さん、先生、居つてか？」

と恥かしさうに、小さい聲で表から星野に尋ねた。

「おはいり！」

と星野は大きな聲で挨拶をした。

宇野は俯向いて仕事をしてゐる新見を顧みて小さい聲で囁いた。

「巴枝さんが来ましたよ！」

そう云ふて、宇野もまた大きな聲で表に立つて居る巴枝に向つて叫んだ――

「巴枝さん、おはいり、あなたに會ひたい人が此處にゐやりますよ！」

「あ？ 誰れかと思つたら、宇野さん？」

巴枝は吃驚するやうな聲で叫び乍ら這入つて來かけた。

その間、新見は黙つて表から見え無いたちで熱心に鋸を握つて板をひいてゐた。

「先生、居つてか？」

そう云つて巴枝は中庭まで、這入つて来た。その聲を聞いて急に踏くんで居た榮一は自分の張つた坐板の上に立ち上つた。そして巴枝に挨拶をせうと思つて入口の方に視線を向けた。その瞬間巴枝の視線とパツタリ合つた。

それは巴枝の豫期してゐなかつたことだつたとみえて、彼女は震ひ上つて一步後に退いた。

「あ、怖わ！」

と云つて逃げるやうにして戸口から飛んで出る。その逃げ行く態がほんとに恐怖して居る様子だつたのでみなドツと笑つた。

後を追かけて新見は表に走り出た。

「巴枝さん！ 話があるから這入つてゐらつしやい！」

と呼び止めたが、巴枝はうしろにも振向か無いで大通を南に駆け下つた。

新見は巴枝の後姿を見送つたが、巴枝が僅か二年九ヶ月の間に、完全な娼婦型に成り替へて居る事には驚くより外なかつた。風呂上りの肌濃く白粉を塗りつけ特に頸筋はM字型に白く塗り込んで、兩鬢を掃櫛で掻き上げ着物の頸筋を極端にW字型に後ろにつかせ、肥満した臀部を左右に振りなが

ら、博多帯をぐる／＼巻きにして、赤い腰巻きを裾から下に覗かせて、走つて歸る彼女が二年九ヶ月前の巴枝であるとはどうしても信じられなかつた。

榮一は自分の眼を信ずることが出来なかつた。

「——巴枝はあれで得意なんだらうか？」

と新見は心の中で考へてみた。榮一の後から飛んで出た初子も巴枝の後姿を見て驚いてゐる。

「巴枝さんも随分變りましたね……一年やそこらで、あんなに變るもんでせうかね？ 巴枝さんは子宮が悪いんだつてほんとでせうか？」

「そら、初耳だよ、誰れに聞いた？」

「私、竹田さんに聞きました、なんでも此間は鳥越病院に入院してゐたさうです。今でも毎日病院に通ふてゐるさうです、病院に行く序にあゝやつて自分の宅へ廻つてくるんだと云ふことを聞きました。」

「初子さんは、よく知つてゐるんだね。」

「だつて、此間、風呂で一緒になりました、色々聞きましたんですもの……矢張り廓勤めはえらいと云ふて居られますわ——借金が増すばかりださうです」

榮一は臺所に立戻り乍ら、初子に尋ねた。

『巴枝さんは、前借をどれ位してゐるンだね？』

『なんでも三年七百圓とか竹田さんが云ふて居られましたよ……然しそれは表面だけで、實際はいくらもお父さんの手には這入らなかつたのださうです。手数料とか、支度料とか、何とかかんとかで、四百圓位ひは途中で無くなつて了つて、なんでもお父さんが三百圓とかを手に入れられたと聞きました』

『そうかね？』

榮一はその上多く聞かうとしなかつた。それから星野と初子との會話が彼に巴枝の家庭の事情に就て詳しく教へた。巴枝の身代金は全く巴枝の父が賭博の資本となつて、一月とたゞぬ間に全部消えて了ひその上、彼女の父は毎月新川遊廓の娘のところへ小使錢をねだりに行くのだと二人で話をしてゐた。

お臺所の板間も全部張られた。宇野と星野は打揃ふて入浴に出た。初子も晩の仕度を買物に出かけた。ひとり残された榮一はあまりに巴枝が可哀相に思へてならなかつた。で、彼は巴枝に會つて彼女の數奇な運命に就て學ぼうと思つて、北本町六丁目の狭い路次を奥深く這入つて行つた。巴枝は表の三疊の鏡の前に坐つて居た。榮一の姿を見るや否や、脱いだ肌も入れないで、洗足の儘、裏口から

飛び出した。

表の三疊に坐つてゐる巴枝の母が、娘を呼び止めてゐる——

『巴枝さん、先生だつしやないか、何がそんなに怖いのか？ 切りも、刎りもしてやおまへんやないか！』

それも効がなかつた。巴枝のお母さんに當る人は、丁寧に新見に挨拶をした。

『あの娘もなし、不仕合せな娘だすよつてに、此二年間と云ふものはあの娘に、樂な日と云つたら一日やつてあらしまへんわ、あんたさんところの日曜學校へやつて貰つて戴いた時には、ほんに善い娘で御座いましたが、此頃はほんとの片輪もんになつて了ひました。病院でお腹を斷ち割つて、まだその傷が癒えませんで、務めにも出られず、今年になつて、ちつた店に出たのは二日だすと……それで借金ばかり嵩んで來て、それだけ返すのに一生かゝりますといふア……ほんとに自分の娘やと思ふと情のうなつて來ますわ……先生、助けてやつておくんははれ！』

そう云ふて、巴枝の母は長火鉢の前の長い穢い煙管を口に持つて行つた。

榮一は、戸口に立つた儘、曇り日の暮れ行く空を凝乎と見詰めた。格子戸の下に伺ふてある雛がビィ、ビィと鳴く。榮一は自分の育てた雛鳥がみな巢立して娼妓になつて行く事を考へ乍ら、軒先の

羅が何かその暗示の爲めに置かれてあるように考へた。

巴枝の宅の奥座敷をソツとのぞくと、阿爺さんと梅毒に懸つてゐる大きな息子とは病氣で奥の二疊に枕を並べて寝て居る。向隣の乞食坊主は黒い須咤袋に米を一杯乞つて歸つて來た。

『うちも乞食にならうかしらん、あんなに毎日乞ひがあるンやつたら……』

そう云ふて、巴枝のお母さんは、また煙管の皿に刻み煙草を詰めた。

榮一は沈黙の儘、向の屋根の巴瓦の彫刻を見詰めた。

羅が圍ひの中を鳴き乍ら驅け廻る。段々闇が狭い路次の屋根と屋根との間をつなぎ合せて行く。

## 三

音をたて、霖雨が降りしきる。

天は惜しげも無く、眞珠の玉や、水晶の玉を下界へ投げつける。それが五色に塗つたやうに輝いてゐる貧民窟の瓦屋根の上で碎ける。パリ／＼と音がするのは眞珠が瓦に當つて碎けた音である。パチパチと響くのは水晶の玉が破裂した音である。

普階は煤煙の爲めにコークス色に染まつて居る低い十軒長屋、五軒長屋の穢い屋根でも、雨が降

ると水の不思議な奇蹟によつて、種々の色彩に反映してみえる。たとへば龍宮に住んでるかのやうである。

長屋から立ち昇る煙が紫色に見える。それが聖堂の香の煙のやうに悠々と曲線を描いて天に昇つて行く。紫の煙を通して見た瓦屋根がまた何とも云へぬ程美しい。

こんなに毎日毎夜雨が降り續くと、水の底に住んでゐるのでは無いかと思はれる。慥かに水の底に住んでゐるのに違ひは無い。人間に鱈が生えて居らぬばかりだ。人間は水の中に游いでゐるのだ。

天から無限の水が降つてくる。こんなにも、よく水の種が有つたものだと思はれる程である。然しそう思ふのが間違ひで水中に住んでゐると思へば、美しい世界も有つたものだと思ふ。

交易風が南から吹くやうになると、南の方から風が蒸氣を北へ運んでくる。それは昔南蠻人を運んだのと同じ理由で、色々の變つたものを日本の列島に送り届ける。灰色の天地に、水晶を運び、ひからびた黒土の世界に眞珠を蒔いて行く。虹もその運ばれるものの一つである。虹が運ばれる序でにルビーやサファイアも混つてゐる。之等の贈物は凡て無代價である。

交易風はそれ等を凡て無代價で日本に残して行く。

新見榮一が、ユダの沙漠から歸つて、第一に感じたことは日本の雨の美しさであつた。一年間に二

十ミリメートルしか降らぬ處から一年間にその幾百倍も降るところに歸つてくると、雨がうるさからう筈であるにかゝわらず、灰色の天地から新緑の日本に歸つて來た彼には降雨による天地の變化がまたとなく美しく見えた。

榮一は、降り續く五月雨を享樂した。サアと降り落される水滴の一つ一つに和蘭陀で出來たギヤマンの彫刻物のやうに雨の滴にも何か彫りつけられてあるのでは無いかと思ふ位美しくそれを感じた。

時によると、それが硝子製の棒を天から投げるようにも思へるし、また時によると、ギヤマンの水簾を天から吊り下げてあるのでは無いかも考へた。

雪も美しいが、降り續く五月雨は特に美しい。一雨一雨と新緑が深くなつて行くのが見える。無色の雨が幾億兆滴か、幾億兆枚もある植物の葉に緑を塗つて行くのだと思ふと、もしや緑雨と云ふものは無いかと疑つてみる。そう思ふて雨を見ると、雨は碧色に見える。

「躑躅」が咲いて、霧島が綻び、芍薬、薔薇が紅の蕾を破ると、五月の雨は紅を天から撒いたかと思れる。そう思ふて、五月雨の空を眺めると、五月雨の空は薄桃色にほんのりと乙女の恥ぢらいを見せてゐる。

、錆たブリキ屋根の上に雨が降る。そこでは雨が鐵色に降る。紺の衣服が濡れた儘ほされてある。そこには雨が紺色に降る。紺、黄、青、紫、紅、緑、……五月の雨は奇蹟のやうに色彩に豊富である。

雨垂が樂隊をやる。樂聖ハンデルが鍛冶屋の軒端で作曲したアンヅキル・コーラスが聞こえてくる。

『雨垂れ、ぼつっさりさん、  
雨垂れ、雨垂れ、

ぼつぶり、ぼつぶり、ぼつっさりさん』

やがて少女歌劇のコーラスがそこに聞こえる。長屋のところどころで、意味をなさぬ無音の音が雨の音楽の間々に聞こえる。それが幽闇の世界から響いてくるやうに——また海の底の反響を聞いて居るやうに響く。

傘をさして路次に出ると、いつもならば穢い道が、金沙か銀砂かを蒔いたやうに輝いてゐる。水溜りが光線を反射して光る。凡てが今焼釜から出したばかりの陶器のやうに艶々してゐる。地球も大きな陶器のやうなものだたと榮一の頭に響いてくる。



地球が大きな陶器ならば、雨はたしかにその彩薬である。

自分が踏みメて行く一歩一歩が輝きの焦點である。自分は皇帝の玉座に立つてゐるより貴い所に立つてゐると云ふような気がする。天氣だと、輝きが天にのみあるが、五月雨は大地を包む光榮の彩薬である。

傘の骨から滴がぼつり／＼落ちる。それが一つ一つ玉である。玉が延び縮みをする。延び縮みをする毎に、玉の色彩が變化する。それは恰も孔雀石が見方によつて色彩を變化させるようなものである。

傘をさして外に出ると傘が蔽ふてくれてゐるので濡れはし無いが、水の中を遊いでゐるようだとともに感ずる。それが何だか神秘であるようにも考へ、また、五月雨には濡れた方が美しいのだ、雨にかゝら無いものは自然の一部分には成れ無いのだなどと考へる。そんな時には榮一はレイン・コートの儘、外に飛び出して、頭から温い五月雨を浴びる。頬を傳つて露が降ちる。それを舌で甜めると、甘露よりも甘い。

自然的生活！ 自然的生活！ 榮一が自然的生活を好愛すればするほど、雨の日は彼を樂ましめた。

雨は甚しく貧民長屋を變化させる。雨でも降ら無ければ、天をも見無い二足獸が、太陽の出る日は喧嘩ばかりしてゐるに、雨が降ると、家に引籠つて考へ込んで居る。考へ込むことは善いことである。あまりに急しく、何をしてゐるか反省の時も無い動物に、雨の日は幾日も續くことによつて、自分の迷路を冥想させてくれる。雨の月は印度でも冥想の月であつた。榮一に取つても五月雨は彼を冥想に導く。

彼は凡てに就て感謝した。そして彼は日本の雨を特別に感謝することにした。

……五月雨が降り續く。……銀の雨が毎日貧民窟の瓦屋根の上に落ちて来る。それが物靜かな夜になると、特別に善い。平生ならば宵の口に二つも三つもある喧嘩が、雨の晩に限つて一つも無い。聞こえるのはたゞ屋根をうつ雨と雨垂の音楽だけである。

貧民窟の小溝が水で一杯になる。そして傾斜の激しい新牛田川は、五月雨が凡ての汚物を瞬く間に流して行つて了う。川のほとりで雨に濡れても善いように裸になつて子供等が群をなして遊んで居る。いつも水の無い名ばかりの川も五月雨には祝福せられる。

天は惜しげも無く、寶石を天から投げ落す。光線の恵みのわからぬ心にも、投げられた寶石の恵みは善くわかる。

……

『おつさん、雨が少し長過ぎるなア』

通りがりの男が、筋向の衛生人夫に出てゐる鶴田の阿爺さんに挨拶すると

『さアもし、この雨が無いと、苗代が立ちまへんのでなア』

と鶴田の阿爺さんは空を見る。

狭い二疊の室で聞いてゐた榮一は阿波の田舎で苗代の立つ頃のことを思ひ出した。

白雨が苗代を水で一杯にたゞえてくれる。簀笠を着た男が手鋏を持って畝道を跳足で急ぐ。榮一も

そんな姿でよく男衆の後から附いて行つたことがある。赤い鋏を持った辨慶蟹が人の足音に驚いて畝

の横に作つた穴の中に駆け込む。青蛙も泥水の中に跳り込む。猫柳が細長い枝に青い細長い葉を、まば

らにつけて、淋しそうに雨に濡れてゐる。苗代には絹糸のような苗が青い毛氈のように密生してゐ

る。豊受大神のお札が竹の串に挟まれて「水口」にさゝれてゐる。お札に祀つた「あられ」と焼米が

小鳥に啄ばまれたと見えて、廣く散らばつたまゝ、雨に濡れてゐる――

その光景が、榮一の眼の前に浮んでくる。なる程、五月雨が長いと云ふて不平も云へない……と頷

づかれる。雨が無ければ稲作が出来ないのである。百姓に取つては五月雨は正に寶石以上の價値があ

る。

五月雨が降り続く。衣服も何にもベト／＼になる。皮類には黴が生える。火で焼いた瓦が水の爲めに溶けはしないかと氣遣はれる。その心配で無くとも瓦が雨の中に遊び廻る心配がある。

然し、蝶か「ひらめ」のように「瓦」が長雨の中に遊ぶことを覚えて、毎日悦んでゐる。

それが貧民窟の二疊敷御殿から覗いてゐると善く見える。平瓦が蝶なら、丸瓦は蝶蝶のようなもの

だ。人間は蝶と「ひらめ」と蝶蝶の親類だ。一種の人魚だ。

冥想の空模様は、月てを神秘に導く。榮一はその囁きに聞き入つた。そしてまた神秘的にでも考へ

なければ、五月雨に閉じこめられた貧民窟に生活することは、余程困難であつた。

四

海老名 長柳

毎日、毎日五月雨が降る。夜遅く長屋に歸つて狭い所にひとり寝ると壓え付けられるように感じて新見は幾日か睡られぬ夜が續いた。床の中で體の位置を色々と換へてみたが何の効能もなかつた。

寝て居て、天井を見上げると、六尺に九尺の狭い三疊の間に、薄穢い古板の天井が張り詰められて

ある。誰かが歩いたか泥足で歩いた足跡が模様のやうにはつきり附いてゐる。それを顔倒して見るも

のだから、高い處から見下してゐるかのやうにも考られる。天井板を支えた張りが三本通ふつてゐ

る。それには別に神秘もない。

北側の戸は、新見が数年前、新川に来てから間も無く古手屋から買ふた板戸である。所々棧が折れて下の枠と離れてゐる。煤で燻つて、反つて、値が出たやうに錆びた代物である。貧乏な街の幾人かの「九尺二間」を遍歴したものと見えて、色々なきすが附いた歴史的なものである。板戸は新見にその歴史を物語らんとしてゐるらしいが、彼にはその聲が聞こえない。

路次に面した一間の格子には障子が一枚しか這入つて居ない。それは彼がアメリカに行く前から經濟が廻らぬので、之も古手屋から半ばもの古障子を一枚だけ買ふて入れたので、それが二年九ヶ月後にも同じところに残つてゐるのであつた。障子のたつて居ないところは、幾十年間燻べたかわからないやうな恐ろしく煤けた無骨な明け閉てに困難な雨戸が這入つてゐる。

寝てゐる足元の方はすぐ入口に通じてゐるが、そこには、元日によく新聞で配る天皇陛下や皇太子殿下の御眞影入りの江戸繪が貼られた古板戸が這入つてゐる。それも古手屋から来たものであるが繪の下には萬朝報をベタ／＼と横に貼つてある。枕元は、新見が父から受け繼いだ唯一の遺産で——繪の枠で作つた幅一間に縦一間深さ四尺の重い戸棚が押込まれてある。その爲めに三疊の間が二疊になつてゐる——その金具の舊式なことから推測すると、新見の父が大幸村から新見家に婚入した時、一

緒に持つて来たものらしい。何にしても時代のものである。

覺も古手屋から来たものである。どこの肺病人がその上で死んだかわから無い。然し敷き慣れると、新しいものと少しも差別は無い。こんなに周囲の建具や家具などに就て一つ一つ考へると、貧民窟の二疊敷も如何にも賑かである。一つの品物でも長い人間の歴史を持つて居る。それは決して無機物では無い。生きた人間の記憶の結晶である。誠にそれは結晶して無生物として再現したのだ。そこに面白さがある。

然し考へて見れば、新見が直接手を下して室を直したところは、板戸や障子がはづれ無いために敷居に這入る部分に細長い「かまぼこ」の板を細く小切つてそれを釘で止めただけである。その外は自分の部屋に於ても、自分は殆んど他人である。然し他人であるからまた一層面白い。そこに、夜遅く歸つてくると室から受け取る感じが違ふ。或時は入口の板戸の新聞紙から或刺激を受け、或時には、お父さんの遺産からインスピレーションを受ける。その暗示が戀しいばかりに新見は一つの額も掲げず、一つの書箱も外に出さず、それらは凡て戸棚にしまひ込んで、室は出来るだけ簡素にし、伽藍洞にして来たが、米國から歸つてくると、かうした無裝飾の室がまたと無くなつたくも感じられる。新見はその簡素を享樂した。彼は古板戸、萬朝報、H、I、M、の肖像、父の婚入の持参品——そし

て天井の泥の足跡に充分發言權を與へた。

雨はしよぼしよぼ降る——

貧民窟の長屋のところどころで齒切りの音やいびきの聲がきこえる。あの人達のやうに睡りたいと思ふ。然しどうしても睡られない。真夜中の一時が鳴り二時が鳴る。

ひとり寝の床に、幻想が幻想を生む。彼の眼の前に、北米の天地が広がる。

——日本は何故こんな狭苦しいところだらうか？——

かう新見は考へた。

彼は、日本に歸つて來たことが、悲しく思はれて、ならなかつた。

あのユダの沙漠の廣いところで、一人呑氣に暮した六ヶ月を思ふと、日本のやうな人間のこせくしてゐるところが嫌になつた——

——あの頃は、毎日、日本人會の二階に引籠つて、小數の日本人を對手にして事務を取つた後、小ざ

さい、こぢんまりしたカーネギー圖書館の書棚に、自然科學の書物を探し廻つたものだ。

孤獨の彼も、北米の大自然に抱かれて心ゆくばかり慰められた。

凡てが悠然して居る。ユダ州の平原でも、ネヴァダ州の沙漠でも、悠然して居る。

馬がところどころで立つたまま、居睡をして居る。ポブラがひよこんと氣狂ひのやうに野中に立つて居る。

畑と云ふのが一筆一哩四方もある。その端の方に小さいキャンプがある。多くはバラツク建の丸太小屋である。

空はいつでも、徹底的に澄んで居て、ロツキーの西の端の小山脈が、大鹽湖の東岸を走り、それに千古の地層が露出して、地球それ自身が物語るらしく見える。

——大鹽湖の四圍の山々に印刻せられた三段の線に神秘の言葉を聞く。眞直に、算盤の桁のやうに——洪水の後の引水が、石垣に残す塵埃の附着によつて、後までよく水面の所在を知らせるやうに、明瞭に大鹽湖の水面を印刻して潮が三時期を劃して干た跡がある。

凡てが悠然してゐる。

雪の降り方までが悠然して居る。いつ降るとは知らない中に三尺も四尺も積んで居る。

その雪の中を地面を彫刻したやうになつて居るベヤリリアの流域に沿ふて幾十哩も橋をひかせて馬を走らせた——

その生活が、日本に歸つて來た今どんなに戀しいか知れない。田舎と云ふ田舎は全部人家で建て詰

つて居て、日本アルプスまでが箱庭のやうに見えるこの狭い日本に、どうして人間が住まねばならぬのであらうかと思ふ。

人間が多過ぎる……日本には、人間が多過ぎる！

汽車で、野原を通つてみても、そこはまるで、アメリカならば、町の續きである。殊に貧民窟に歸ると、子どものように、人間が、ぐよく／＼して居る。

日本には、人間が多過ぎる！

少し、踏切りが、長く閉ぢられて居ると、すぐ、人間が溜まる。

學校へ行つても、芝居へ行つても、活動寫眞に行つても、寄席に行つても、どこにでも人間が一杯詰まつて居る。

ベース・ボールを見に行つても、飛行機を見に行つても、人間がぐちよく／＼して居る。

人間が多いものだから、つい人間を粗末にする、人殺し、殺傷、喧嘩、強姦の多いこと、身賣り、

身受けの多いこと！

人間が安いものだから、人肉市が立つのである。

人間が安いから頭數で工場主は儲けて居る。豆糟を絞るやうに、人肉市から十三人一噸の安い人間

を買つて来て、脂を絞る。それに血も肉も混つて落ちる。

人間と人間が喰ひ合ひをする。それで日本では、人間同志が互に武装をする。

新聞紙はその噛み合ひの報告ばかりをして居る。日本では凡てが殺氣立つて居る。

貧民窟は満員である。空家などは一軒も無い。木賃宿は一月も前から申込まなければ泊れ無いと云ふ仕末である。それで一軒の家に三家族も四家族も住んで居る。

田舎から、人間がいくらでも集つてくる。そして、みな貧民窟の周圍にマッチ箱のやうな家を借りて住んで居る。

地球が産んだ畸形兒は、ダイノサウルばかりではない。貧民窟は確かに地球の畸形兒であるに違ひない。多くの梅毒患者、多くの酒亂、多くの狂人——それ等はダイノサウル以上に變形した畸形兒である。

それを對手にして、また毎日その日の生活を繰返さなければならぬとが悲しい。幻想は幻想を産む。新見は猶も續けて考へた。外には五月雨が激しく降る。

新見はアメリカの文化に少しも感心しなかつた。それは計算機械の文明である。然しユダの砂漠に入つて初めて、地球が彼に赤裸々に物語つたことを感謝した。

彼はそこで大自然の寵兒として、モルモン教徒の如く神の愛を直接に感じた。

彼が美しく大きな北米のライン河だと云はれるコロンビア河に沿ふてロッキーマウンテンの麓から出て来た時に、山から出て来たゾロアスターの如く超人の誇を彼は胸底に秘めてゐた。

大自然が、彼に直接に物語つた。地球がその秘密を凡て、彼に打明けた。

そんな氣で、彼は太平洋を西に渡つたのであつた。

然し、横濱に着いて見ると、日本は陸地で無いやうな氣がしてならなかつた。日本は大きな浮洲である。そこへ四方から漂流民が流れ附いて寄合ひ世帯をしてゐるのだ。

日本はあまりに、よく開け過ぎて居る。箸の先にまで繪を畫いてそれを金で彩る國である。ユタの大砂漠で足腰を延ばして寝て居た時のやうにぼつとして呑氣にして居れない。

あまりに淳化した、あまりに型に這入つた——あまりに變質した人間の寄り合ひ世帯である。

新見は、地殻の物語りが、も一度聞きたかつた。然し日本ではそれが出来そうにもない。日本人は地球の上には住んでゐない。

日本人は下駄の上に住んで居る。否日本人は大地より二寸五分隔つた下駄の上に住んで居る。幻想からさめて耳をそばだて、聞いてみると、雨が貧民窟を押し流す位降つてゐる。

——雨が貧民窟を押し流してくれと善いかなアと思ふ。

五

「——祇園の一方の雑妓に彌生と云ふのがありましてなア、そいつを抱いて、今年の春は全く、春の香に酔ふてゐましたが、然し、それは眞實の生活では無かつたのですなア——」

信吉はお茶を一口啜り乍らまた彼の遊蕩時代の回顧をつづけた。

外には一ヶ月以上も晴れない五月雨が音をたて、居た。出て行きたくも傘のない淋しい貧民窟の夕べ、十六燭光のほの暗い電燈の下で、新見と宇野とは食後の雑談を續けるのであつた。そこは新見が宇野や星野に手傳つて貰つて、座板を新しく張つた狭い食堂であつた。

宇野は自分が今迄して来た長い色々な經歷を述べた後、彼がいつも性慾で失敗して来たことを露骨に描寫し、彼の女の慾しくなる時の心理を詳しく説明するのであつた。

「——「だらり」を結んだ女は、蝶々のやうに美しい姿をして、自分の愚かしい腕に抱きめられて、白鼠のやうにすくんで居ましたがそれは、眞實の生活では無かつたのですな。」

彼は陶酔者のやうな眼附をして息もつかないで語りつづける。

「伏見の親分の金を掘み出して、思ひ存分遊んでやろうと、一週間あつて、一千圓の金をずつた後で一週間目の朝、夢から醒めたやうに、祇園を出た時には、矢張り、良心の痛みに、堪え切れなくて、丸山公園の櫻の木の下で泣きましたよ——」

「一人しか無い妹が、自分があまり無茶をするものですから、産んでまだ百日にもならない愛児を抱いて、大阪の築港の棧橋から、身を投げて死んで了つたのでせう。その悔やしさに自分は良心の苛責を脱れる爲めに、自分より十も若い雛妓の胸に救を求めて行つたのでした。然しそれも全く自分を偽つて居たのです。」

自分は少しも、その妓を愛してゐるのではなかつたのです。たゞ、獸慾の爲めに、獸慾を擅にしにしか過ぎなかつたのです。その證據には、自分は、松島に行けば、松島の女が慾しくなり、飛田に行けば、飛田の女が慾しいのでした。

結局、自分は、自分の手に收拾の出来ない破戸漢であると云ふことがはつきりわかつて、世から忌みきらわれて此世を終らねばならぬかと思つた時は、自分ながら愛憎がつきたのでした。

「そうかと云ふて、自分は、そんなに悪人でも無い。そりや、女には弱い然し、凡ての女が、自分に惚れてくれることを見ると、自分も何か善い處があるのだと自惚もしてゐました。自分は親切

だ。自分は自分より弱いものを見ると、わが身を引裂いてもやりたいような氣がする。それで、自分はどうなことがあつても、絶對の悪人にはなれないと思ふのです。然しそれかと云ふて善人であるかと云へば、それには、あまり意志が弱は過ぎる。自分は、十日と女に接觸しないでは居れないのです。それも若い女……十五六の女……がたゞ抱いてみたくて仕方がないので。別に酒が呑みたくいでもなければ、賭博が好きなのでも無い。たゞ若い女が好きなのです。……若い女を弄びたいと思ひ出すと、親類兄弟にどんな迷惑をかけようと、妹がその爲めに自殺しようと、その爲めにどんなことが起らうと、全くわからなくなつて了つて、たゞ目的を果すまでは人殺しでも仕兼ねまじい勢で盲目的に進むのですな。その時は發狂してゐるのです。」

然しそれも、素人の小娘を犯したいと云ふようなけしからぬことは少しも考へ無いのですが、ただ雛藝者とか、酌婦に出て居る女とか、または娼妓に出て居る小娘とか、そんなものであればたゞもう關係してみたいのですな。

「然し、之はもう凡て、過去のことです。自分は今、自分を見出した積りで居ます。自分は、新川の貧民窟で先生に身も魂をもおまかせして、新しい生涯に這入る決心をしてゐます。——」

榮一は電燈の傘を靜かに見詰めて更生せんとする字野の決心を靜かに聞いてゐた。それは何とも云

へぬ美しい藝術である気がした。

「——俺が新川に再びくすぶるのは全く無用なことでは無い。こんな魂が幾十か幾百か此處に惱んでゐるのだ、その人達に幾分でも光明を與へ、相談相手になり得るなら、自分の使命はつきてゐる。自分は靜かに之等の人々の魂の膿を吸ひ取る工夫を考へやう、それが私の生れて來た使命であるかも知れぬ——」

傘を凝視して居た榮一はこんなことも考へた。

宇野の言葉が了つた後、新見は猶も沈黙して凝視をつゞけてゐた。白色の電氣の傘が珠のやうに光る。新見は大理石のやうに固くなつて瞬きもしないで、それを凝視した。話の了つた宇野も黙つて光の方を見詰める。暗い臺所が急に明るくなつたやうに感ぜられる。煤で燻ぼつてゐる天井が物語を始めるのぢやないかと思ふほど神秘的な空氣が漂ふた。外には相も變らず雨垂の音樂が聞える。

六

港は益々景氣が善かつた。海上保険の専務をしてゐる篠田の鼻息が益々荒いと人から聞いた。貧民窟に居つても港の景氣の善いことがよくわかる。仲仕連中は一日に五圓、七圓と儲けて來るの

竹野の時代  
へんげの時代

で、家の中に柱時計が懸つたり、箆筒が据つたり、長火鉢が置かれたり、段々家具家財が殖えて行く。こんな時ほど學校の教師とか教會の牧師ほどみぢめなものはない。近頃ウンと神學生志望の學生が減つたと云ふことも聞かされるのであつた。

然し榮一は甘じてその聖貧の悦びを味ふ覺悟でゐた。貧民窟と成金との間に益々あらさが出來た。然し誰一人神戸の貧民窟を救ふてやると云ふ人が出て來なかつた。それで榮一は先づ篠田に訴へてみることにした。

訴へるに就て、榮一は迷ふた。自治工場の資本を貰ふか？それとも、無料診療所の資本金を寄附して貰ふか？自治工場には莫大な資本金がある。然し先に行つて元金の拂へる望みがある。無料診療所は毎日僅かな金で濟むが永續的でなければならぬ。而もそれが段々大きくなるにつれて困難になる恐れがある。

もし、自治工場で幾分か儲けて、その利益で貧しい人達に藥を買つてあげることが出來るなら、どれだけ幸福であるか知れない。自分は少しも儲けたくは無い。然し、イエス團の青年達も「失業者を救済するかたわら、貧しい人々を世話したい」と云ふてゐるのだから、自治工場の資金が貰へるならどれだけ仕合せであるか知れない。こんな考で、新見は篠田が専務をしてゐる神戸海上保險會社の方



に足を向けた。

いつも、貧民窟と閑静な山手の神學校を往復してゐる榮一は、神戸の海岸通のやうに殷盛なところに出ると、何だか別世界に來たやうで氣持が違つたやうに思はれるのであつた。

何だか自分一人が世界の進歩に遅れたか、或はまた地球の自轉に順應しない爲めに、地球から蹴ね飛ばされたのかと思ふやうなことがあつた。

道幅が廣くなる。建築物が大きくなる。自動車が増え走る。荷物を満載した荷馬車が急ぐ。二人引きの車で、ブローカーのやうな男が店から、店へ車をつけて行く。銀行に出入するものが急がしい。初夏の曇りびよりが何だと云つた調子で、凡ての光景が生々しくしてゐる。

榮一は海上保険の入口まで行つたが、何だか、そのピカ／＼磨いた眞鍮の看板と、押戸の横棒と、水晶のやうに光つて居る硝子戸を見たゞけで、氣遅れがして幾度か躊躇した。實際榮一は篠田のやうに澤山な餘剩價値を集めてゐるものから、金を取り上げて、貧しい人々に配け與えることは正しいことだと考へた。然し自分がそれを貰ひに行く段になると、何だか自分が乞食のやうに思へて氣恥しいのであつた。

遂に決心して美しく光つてゐる入口の重い硝子戸を押して這入つた。詰襟の洋服を着てゐるボーイ

に専務の篠田さんが居るか尋ねた。ボーイはすぐに電話で専務室に面會者がある旨を通じた。

篠田は心よく、榮一を自分の室に通すやうに命じた。

新見はボーイに導かれて、階段を上つて行つた。階段にはリノリュームを敷いてそれを黄金色に磨いた眞鍮の棒で止めてある。それは虹の架橋のやうに見える。何だか動悸が苦しくつて、自分が如何にも不甲斐ない男であるかの如く感ぜられた。

殊に、二階の突き當りに据えられた帽子掛けの中央に飾めてある細長い姿見に、チラと自分の姿の映つた時には、自分の胸の底まで見透かされたやうに思はれた。

姿見に映つた新見榮一は、青ざめた、ヒョロ高い、足懸け四年も夏冬同じ紺サーチの洋服を着た、神經質の男であつた。それはもう昔のシヤンの姿は見ると影もなかつた。この男が戀とか、愛とか云ふ柄の男では勿論ないと思はれた。どうしても西洋乞食としか見え無いと自分できめた。そして實際榮一はそれであつたのだ。

幸にも篠田は榮一を乞食としては取扱はなかつた。彼を恩人扱にした。それで榮一も一安心をした。榮一は云ふた……港は殷盛であるに反して貧民窟にはまだ困つてゐるものが澤山ある。職業によつては戦争の爲めに反つて一部には不景氣風が吹いて失業の憂き目を見てゐる者も相當にあり、その

爲めに彼は自分の周囲に居る青年達を救済する爲めに自治工場を計劃してゐる——その工場で少し儲かるなら醫者を一人雇ふて無料診療所を開設したい——など詳しく篠田に説明した。そして自治工場の資本を貸してくれと頼んだ。

篠田は大きな脇掛椅子に倚つて葉巻煙草を煙らせ乍ら答へた。

『新見君、それは駄目だぜ、それは君、ユートピアだぜ！ 君の力でおえへんわ！ 僕は君がそれをよした方が善いと思ふが、君のする事ぢやけん、三千圓や四千圓の金はいつでも云ふてくれたら出すがな——いや、寧ろ、君の爲めに、毎日醫者さんを一人寄附した方が賢いなア君、——それで君、——一體なんぼ入るんや？ 君、僕は、君のやうな男に金を貸したりする事は嫌ひやで、君が入るだけ遣るわ。なんぼでも云ふてくれ、そら一萬、二萬となると一寸困るがな、間々に、千や二千の金であつたら、いつでも用立てるわ、僕は之で昔は君の處へ金を借りに行つたこともあるんだから、金を借りることのいやな事は知つて居るよ。』

そう云ふて、篠田は黒檀で造つた大きな西洋机の角に附いてゐるベルを押した。そして再び新見の方を振向いて云ふた。

『君、今日は三千圓で堪忍しといてくれ、それだけは、君の小遣に寄附するわ。何に使つても善いん

だよ。君が本を買ひたければそれで本を買ひ給へ、それで醫者を雇ひたければ醫者を雇ひ給へ、工場の資金にしたければ、それも善い。兎に角、僕は君を信用するから、それを何に費つてくれても善いよ。』

ベルに答へて、會計の葉山が出て來た。四十恰好の色の淺黒い人の善さ相な男である。

『葉山君、君、紹介するわ、——新見君を。新川の貧民窟に這入つて長いこと奮闘してくれて居る僕の最も尊敬する友人だ！』

新見君、——葉山です、うちの會計をして居る方です。此間も葉山君と僕と二人で君のことを話して居たのです。君のやうな男のやつて居る仕事を助けなければ日本にも早晚ロシヤのやうな革命がくるかも知れないつて。』

かう紹介されたので、新見は葉山に叮嚀な挨拶をした。

『葉山君、君すまないがね、僕の分から三千圓だけ、新見君にチエツキを書いて呉れんか？』

葉山は急いで會計の室に退いて三千圓のチエツキを書いて來た。新見はそれを受取つて、思案に、暮れ乍ら、貧民窟に歸つて來た。

梅雨の晴れ渡つた六月の第四の聖日の早天禮拜の後に、竹田と、浅田と、高井の三人は大阪へ齒刷子の製造の練習に出掛けた。

戦時景氣で神戸の船會社などでは突拍子に調子づいてゐるけれども反つて他の仕事は逆も話にならぬほど不景氣であつた。

竹田は、法郎質の鍋や杓子を製造してゐた。然し鐵が戦争前の五倍六倍の値で賣れて行くので、鍋や、杓子に製造すると反つて損をした。法郎を塗ると鐵屑の値だけでも出ない。板を買ふて別に加工しないでヂツと持つて居る方が遙かに儲けが多いと云ふ珍現象を呈して居た。

貧民窟の人々は、みな鐵屑を拾ひに溝や海岸に出掛けて行つた。その爲めに一日、三圓五圓と儲けた。貧民窟の不良少年は釘の泥棒に出かけた。人の家の板塀から、垣根から盗めるだけの釘を盗んで歸つて來た。

貧民窟の近所にも屑鐵成金が澤山出來た。一膳めしや天國屋の主人公であつた谷本の髯さんは潜水夫を雇ふて、海中に落ち込んで居る錨や、鎖を拾ひ上げる許可を警察で受けて、暫くの間に借家の五軒も六軒も持つ身の上となつた。

然し、一生懸命に働いて居る竹田は反つて仕事にあぶれて、外の仕事を尋ねなければならぬこと

になつたのである。

新見は、竹田にイエス團の事業として、労働者の自治工場を作らうでは無いかと云ひ出した。

新見と、竹田は齒刷子事業の有利なことに氣が附いた。で、その研究に二人で大阪に出掛けることにした。

二人は天王寺から鶴橋の方面にかけて、大きい工場、小さい工場を幾つとなく見て廻つた。

たゞ、面白半分に見て廻るとか労働問題の研究とか工場設備の視察などと違つて、新見は色々なことに氣を配らなければならなかつた。

小さい工場は、資本金がどれ位で出來て、設備はどんなものが入用であるか、材料はどこで仕入れて、賣捌きはどの方面に向き、仲買人はどんな役目を爲し、揚子の毛植えは、何處の方面に出し職人はどの方面から集めてくるか……などとそれは實に面倒な注意が入るのであつた。

之はたゞ設備とか、資金とか、賣上とかに就てであるが、工場の衛生から、労働の問題になると、すぐ工場が成立しさうにも見えなかつた。

新見は竹田に連れられて、鶴橋に行つた。鶴橋は既に戦時景氣で七十軒からの齒刷子工場が出來てゐた。まだ天王寺、上本町方面だけでも、四百八十軒の個人的製造家があると聞かされて驚いたこと

であつた。

なる程、大きな部類では會社組織のローヤル・ブラシユから帝國ブラシユ、關西ブラシユの三大株式會社を始めとして、小さいところになると、上本町の裏長屋に親子兄弟が手細工で刷子の製造をしてゐるのを見るのであつた。

鶴橋あたりの「バフ」(牛骨を回轉する砥石にかけて磨く仕事)の掛かつて居る工場に行くと、骨粉が室内に一杯になつて居て、逆も奥に居る人々の姿が見え無い。深い霧の中で勞働して居るやうなものであつた。

新見は、竹田を顧みたら。

『これぢや困るね、煽風器をつけて、この骨粉を吸ひ取る工夫をしなければ、衛生に害があるね、そんな工夫は無いものかね?』

實際「バフ」の工場は降り積む雪の中で、仕事をして居るよりまだ非道いものであつた。

彼は、之まで貧民窟に居る關係上澤山の工場を知つて居るが、これ程、塵埃の立つ工場を見たことが無かつた。門司のセメント工場、神戸の製粉工場、紡績會社のカーチング、瓦斯焼き——これ等の塵埃と、空氣の悪いところを凡て頭の中に浮べてみたが、齒刷子楊子のバフ工場位、不潔なものを

見たことがなかつた。

その日は悲觀して、神戸に歸つて來た。

『竹田君、齒刷子は駄目だぜ、あんな穢い、非衛生的な作業場を作らなければ、ならないのであれば、イエス團の恥になるよ。』

かう、新見は、竹田に云ふた。然し、竹田は決して悲觀して居ら無い。

『然し先生、先生の方で資金の融通さへつけて下さるなら、衛生の方は、どうにか、私の方で工夫を致します。そこは煽風器にモートルをつけて、塵埃を取るなり、臭氣抜きを作るなり、出来るだけの注意を致します。』

何と申しましても、淺田君は、もうかれこれ三年も遊んで居るやうな仕末ですし、山中君も、ゴム會社に行つて、あの通り頭痛を病んでまる一年も遊んで居るのですし、何か仕事を見付けてやらなければなりませんから、私達だけで、小さいながらにでも、上本町式に手細工でやつても善いのです。

それには、どうしても、少し熟練せなければなりませんから、練習に行つて來ます。ものの二三ヶ月も練習すれば、すぐ出來ると私は思つて居るのです——

イエス團には、今の處、遊んで居る青年も六七人ありますから、みな手別けをして、専門的に研究

して來ます。そして、秋まで勉強すれば、小さい工場を建てる事が出来ると思ひます。その段取りで御盡力して下さいませんか」

竹田はこんなに云ふて、ブラシユ工場を建てる計畫を進めた。そして、浅田に『穴あけ』の研究をさせ、山中には『堅穴』を、竹田は仕上げの研究に行くことになつたのであつた。

凡ては、信仰と愛によつて考えられた企てられた。

総の拾を着た竹田と、浅田と山中の三人は大阪に出發した。そして、イエス團はまた淋しいものとなつた。

梅雨の過ぎた七月初旬、神戸葺合新川の貧民窟を毎朝日課のやうに小さい眞鍮のバケツに眼薬を入れて、兒供達の眼を洗つて廻る、みなのこ薩張りした婦人があつた。

眼の悪い兒供を見ると一々洗淨した上に點眼薬をさし路次から路次に巡回して二千軒あまりの長屋の立詰つたところを、大雨の日でも怠らず見舞つてゐた。その婦人は新見榮一の妻喜恵子であつた。

さみだれの降り頻る夏の夕暮に、喜恵子は横濱の女子神學校を卒業して歸つて來た。二年近くも別れてゐたものの夫妻の間には何の變つたこともなかつた。それは濁るにはあまりに澄んだ大洋のや

うなものであつた。アメリカから歸つて來た新見がその晩から貧民窟で寝たやうに、喜恵子も、素直に貧民窟の二疊敷に寝た。そして、翌日から直に巡回看護婦となつて、貧民窟の路次を廻ることをその日課とした。

新見の奥さんの藥がよくきくと云ふて、新見の家にまで點眼して貰ひに來るものは毎日十四五人あつた。その中には子供ばかりでなく、大人もあつた。喜恵子はその一人びとりに洗淨薬と點眼薬とをさしてあげた。

## 八

『お隣りの先生も、よつほど物好きな先生やぜ……癩病人まで、世話せんかつて、善かりさうなものやになア……』

新見の借りて居る葺合新川北本町六丁目二二〇の西隣、袖野なつと云ふお婆さんが、路次を隔て、筋向への鶴田のお婆さんと大きな聲で話をしてゐる。

袖野のお婆さんは、一風、風變りのお婆さんで、もとはどこかの藝者であつたと云ふが、勝之助が引越した後へ腦膜炎で片輪になつた女兒と十三になるその姉嬢と最近一緒になつたと云ふお婆さんよ

り年の若い亭主と四人で引越して来た。氣の強い面白い女である。髪が抜けて残つてゐる毛では逆も結べないので貧相な頭をしてゐる。

毎晩のやうに夫婦喧嘩するので、隣の二疊に寝てゐる榮一夫妻は、十二時一時頃まで寝られなくて困ることが再々あつた。

その筋向は榮一がいつも世話になる鶴田のお婆さんが、今も苦勞しながら、十年一日の如く燐寸貼りをしてゐる。

おなつさんは薄口錢の麻糸つなぎをしてゐる。あまり退屈なものだから、路次を挟んで浮世話をしつてゐるのである。

「然し、出来んこつちやなア、わたしも先生のやうな氣に一日でもなつてみたいわ」

「ほんとになア、先生のやうに、錢金のことを離れて生きて行けたら結構なことやろなア」

じめじめした路次の濕つた空氣を通して、格子の上ですぐ反古を貼つた家が並ぶ。そこから御互に姿をみないで、おかみさん同志が話をしてゐる。

二人の話題に昇つてゐることは、新見夫妻が一人の癩病人を世話して居ることに就てゐる。

新見が癩病人を世話するやうになつたのは喜恵子が六月に横濱の神學校を卒業して歸つて来てから

間もないことであつた。四宮嘉吉と云ふ神戸市内下山手通二丁目に居住する塗物問屋の主人が、彼の兄にあたる今年三十七才になる癩病患者を貧民窟で世話してくれと、新見に手紙を出したのがひつかりで、新見は貧民窟ではとても不潔でもあり、他に傳染すると危険であるから、他の癩病院に相談してくれと答へたのであつたが、すぐ、四宮は覆面したその兄と同道してやつて来て、「是非、お願いしたい。無料で這入れるところは全部満員だし、無料で無いところは入院料が高くて這入れないし、さうかと云ふて、自分の宅には世話するものもないから、是非世話してくれ」と云ふのであつた。新見はそれを聞いて、断るわけには行かなかつた。それで、仕方なしに、新見夫婦がいつも寝てゐる北本町六丁目の家の隣の一室を提供することにした。覆面の四宮さんはその日から直に新見と一緒に住むことになつた。

それが近所の話題に昇つてゐるのである。

ちどれ毛のおなつさんは猶續けた。

「——お隣の新見さんのやうな人こそ極樂へ行くんやな」

「ほんとやでえ、おばん、先生のやうな人こそ極樂へ行くのや」

そこを通りかゝつた屑買ひのおみさと云ふのおなつが格子戸の前に立ち止つた。

「何を大きな聲で話しとるんや、おばん！」

おみさは肩に大きな竹籠を擔ひ、着物の裾をひつからげ、天秤棒を片手に持つて、頭に置手拭をしたあばたの女である。

「いやなア、おみささん、うちのお隣の先生のやうな心になれば、うちも極樂に行けると云ふてゐるのや」

おみさは、それに對して少しの間黙つてゐたが、細い聲でこんなことを云ふた。

「おばん、新見さんはえらいお金持やさうなな？ ほんとか？」

「そら、お金持やろかいな、あんなに手廣く人の世話しとつてやさかい」

「……なんでも、ロシヤからたんと送つてくるのやさうやな？」

「そこのところは、うち知らんで……」

「なんでも十萬圓とか二十萬圓とか、ロシヤから取つとるんやさうな……そして、日本の國をロシヤの一部分にしてうもくろみを持つて、あんなに貧乏人を世話して、人心を取り入れてゐるのやさうな」

おなつは、おみさが妙なことを云ひ出すものだから、怒つた口振りで答へた。――

「わしは、あの人が米國へ行つとつたと云ふことを知つとるけんども、ロシヤへ行つとつたと云ふことをあんまり聞かんで……」

おなつの聲があまり大きいので、向の鶴田の婆さんも聲を張りあげておみさに辨駁を加へた。

「わしはあんまり知らんけど、あの新見先生のやうな、善い方が、この國をロシヤの一部分にするなにか……そんな量見のあるお方とは思へんがなア。」

おみさは、裕子戸を両手で攔み、紙の破れ目から、おはるの顔をのぞき込んで、微かな聲でまた云ふた。

「わしもあまり知らんけんども、越前さんが、そんなこと云ひよつたから、ほんとやと思ふがなア」  
おみさは多少侮蔑の句調で、

「フム、あの越前が、何を知るもんかい、ありや、犬ぢやないかい、ありや、この邊のことを警察に、嘘八百並べたて、月十五圓か、二十圓か貰つて食ふとりや、それで善い人間ぢやないかい……」

「さうぢやけどなア、警察ではなア、新見はロシヤの廻し者ぢやと云ふてゐるさうな」

「もう、往んでくれ、往んでくれ、うちの耳が穢れるわ……そんなこと聞いたら……わしやな、お隣

の先生が、ロシヤの廻し者であつたら、この白毛首でも、おまへにやるわ……嘘を布れて廻つて居つたらきかんど……』

おなつはとう／＼怒り出した。それでもおみさは平氣なものである。

『おまへのやうに云ふたら、話が出来んがい……おなつさん、新見さんの嫁さんは會社の女工ぢやて？』

『それが、なんぢやいな……當世の男が女工に惚れようと、娼妓に惚れようと勝手やないか？』

『わしや、たと知らんけんどなア、なんでも、耶穌教は日本の國を取りに来て居るので、下々のものをなつけて置いて、そして、しまるに、日本の國を亡ぼして了ふんぢやさうぢやぜ』

おはるは、麻糸を繋ぐ手を休めて、破れ目からのぞき込むおみさの眼だけを見乍ら訓すやうに答へた。

『おみさはん、今時、そんなこと云ふとつたらあかんで、新見さんだけが耶穌ぢやあるまいし、耶穌の教會所は山手にたんとあるやないか？ みなえいし（富豪）が行つとるやないか！ わしら這入れる宗旨やないのや、みな善いところの坊々や、嬢ぢやんが行くところなのや、新見さんはな、そんなところからお金を集めて來ては、新川のやうな難澁してゐる處に、蒔き散らして、先の世の功德の爲

めに難行苦行をしてゐらしやる弘法大師さんのやうなお方や……わかつたか、おみささん……わからな、まだ教へてやろか？』

『わしや、耶穌が大嫌ひや……神棚も、佛壇も焼き捨て、了へなど云ふ宗旨はわしやよう這入らん……』

『何にも、嫌ひな、宗旨に這入らんかて善いやないか！ わしも、こんなにお隣の善いこと云ふけど、耶穌宗と違ふで、……うちらたまで、あんなむづかしい戒律はよう守らんがな……煙草喫うな、酒呑むな、姦通するな、女郎買するな、それに、慾徳離れて、貧乏人を可愛がれ……うちな、おみささん、耶穌教に惚れてゐるところもあるねえ……それはなア、『強きを挫き、弱きを助けよ』と云ふところなのや、あまへもちツと、新見さんとこの若いものが道傍で辻説教してゐるところ聞んかい……ありやほんとに俠客のすることぢやなア……』

おはるは口早やに極力新見を辨護した。おみさは啞氣に取られてぼんやりしてゐた。そこへ、鶴田のおぢさんが埃曳きから歸つて來た。手に熊手としよれんを提げて、『神戸市役所』と印の大きく這入つた汚物によこれた張皮を着てゐる。頭の形が少なからず曲んだ、酒で赤く焼けた、鼻先に水噴垂らして見るからに、『變人』と云つた恰好である。



鶴田のお婆さんはすぐ、亭主におみさの云ふた事を小さい聲で繰返した。一旦戸口の内側に這入つた阿爺さんはまた出て来た。そしておみさの方を一寸睨みすぐまた視線を伏せて、どくれて居る様子をして菟弱色した日本手拭をすき乍ら大きな銅羅聲を張り上げて怒鳴つた――

「嘘八百並べたてゝ向の先生をくさして廻る奴は、どいつでも、こいつでも！ 殺して了つてやるんぢや！ 啞呆めが！ 奴畜生！」

あまり阿爺さんの権幕が荒いもんだからおみさはこそくと路次を西に逃げて行つて了つた。喧嘩かと思つて、近所の兒供等が集つて来た。阿爺さんは足を洗ひに裏の井戸側に出て行く。雲り日のたるい午後にお日様が一寸天から路次を覗く。貧民窟は静かである。

覆面の四宮さんが路次の西からお蔬菜を買ふて歸つてくる。

## 九

貧民窟に長く燻ぼつて居ると、氣がくすむ。榮一は急に阿波の田舎に墓參かしたくなつた。先になつてまた急しくなるので、今の中にと急いで出掛けた。

彼は島上町の停留所を降りて靜かに海岸の方に歩いて行つた。電車道の明るい割合に、停留所から濱へ下る道は心もとないほど暗い。

兩側の倉庫は三十年前も同じことである。榮一には幼年時代の回想が一度に甦る。なつかしみ親しみ、それに出来るならもう一度島上町に歸つて住みたいと云ふ懐古の心が起る。顧みるとはなしに、自分の産れた家を振り返つて見る。そこには一つの光も見えない。棧橋には撫養(阿波)行きの汽船が早や着いて居る。右舷に出て居る赤の點燈が高く棧橋の屋根の上に見える。人がドヤ／＼と棧橋の方へ押掛けて居る。

榮一は慌しく切符を求めて、棧橋に出た。満潮で濱の通路は潮に漬つてゐた。その水の上にアークライトの青い光がキラ／＼して、それは美しく見える。

棧橋の上に行く瞬間に、榮一の胸には色々な聯想が浮んだ。小さい時にこの浮棧橋の下で海ほいづきを取つたこと、店の若いものに連れられて真夜中に釣に來たこと――それから父の死後運送店を経営してゐた關係で、或時は不安な心持で、或時は幸福な心持で此處に立つたこと――それらが今、甘き回想となつて彼の胸の中に泡立つ。

ランチが闇の海を赤い光や、青い光を現して滑かな海面を渡るやうに走る。大きな舢舨の櫓に吊した橙色の點燈が上下に揺れる。暗い港内に影繪のやうな幾つかの汽船の黒い影が彫り取つたやう

に、透かして見える。戦争の影響と見えて、その影の数が頗る多い。或處は影と影とが引附いて陸地が打續いた氣のきいた生垣のやうに見える。それをよく闇を凝視してゐると、遠近に相隔つてゐる大きな幾隻かの汽船である。

兵庫港が始まつてから、こんなに澤山の汽船の碇泊して居ることを見たことが無かつた。三百噸足らずの勝浦丸は午後八時半の出帆時間を規則通りに守つた。船が港内を行く間、新見は甲板の上に立つた。船は川崎の鼻まで真直に出て九十度の角度で和田の岬に向つて進む。迎へる汽船、送る汽船の影の形の變化、それが如何にも美しく面白い。黒い堀に沿ふて進んでゐるかと思ふと、急に堀が途切れる。途切れたかと思つたのは實は汽船を縦に見た瞬間で、堀に見えたのは横から見てゐた瞬間であつた。

歐洲航路の船であらう、沖の方を規則正しく配列した幾百の光を載せて入港してくる。その汽笛の勢の善いこと！ 榮一は海上の城のやうだと思ふた。

川崎の鼻を廻ると神戸の燈が見える。神戸の山手に幾萬となく光が見える。まるで龍宮のやうである。港内の入口を示す燈が海の中で週期的に三秒目五秒目に明滅する。和田の岬の燈臺も明滅する。その光は帯のやうに長く海面遠くにまで延びる。

和田岬を廻ると、夜の景色は急に淋しくなる。聞こゆるものはたゞ船の舳先が波を切る音と、エンヂンが機關室で鳴る響だけである。

榮一は海岸線を須磨行電車の電燈の光に沿ふて、遠く明石の方までたどつてみたが、あまり單調なのでそれとすぐ飽き、船室に這入つて睡た。

眼が醒めた時は翌朝の四時一寸過ぎであつた。汽船は既に小鳴門にさしかゝつてゐた。「よくもこんなところに船が通れるものだな」と案じるほど、海峡は狭い。兩岸は小松の生え繁つた丘である。明け易い初夏の曙に緑が滴るやうだ。切り取つたやうに直立する斷崖には片麻岩層の巖が露出して、地殻が素裸に飛び出して居る。

潮は藍にコバルトを混ぜたやうな色を持つて流れる。小さい汽船は小鳴門の退潮に吸ひ込まれるやうに南へ南へ下つて行く。屈曲の多い海峡は、或處は淀める湖沼のやうに或所は激流に吸込まれるやうである。高島の北部に出ると、夢のやうに美しい桃源のやうなところもある。

幼い時、小学校の先生がこの北高島の村長さんの養子で有つたことを思ひ出す。尋常四年の時、大鳴門を見物に来る途中其家に立ち寄つたことなど、深く記憶に印象せられて居る。汽船が撫養近くなると汽笛を續けて吹く。齋田の鹽田が打連なつてゐる。豆腐を大きく切つて野原に据えたやうだ。土

佐泊に汽船が這入つたが、船がまだ来ない。陸地の人々はまだ睡つてゐるらしい。やつこのことで船が来た。岸は砂地のところまで細長い提灯に火をとぼして車夫が客を出迎へに來てゐる。

大津村段關の原口家まで此處から僅か一里半である。新見の足では一時間である。今から歩いて行つても早や過ぎるので、濱に面した旅館で少し休むことにした。睡られもし無いのに八時すぎまで蚊帳の中で、あちらに引繰返り、こちらに引繰返りして安眠を取らうと努力したが、とうとうその効も無く、一睡も出来ないで起き上つた。思ひ出の多い妙見山の下から、車にのり木津の金比羅山の金の鳥居の前を過ぎ大代の橋を渡つたのが九時頃であつた。

米國の廣い世界から日本のギツシリ詰つた田舎に歸つてくると、息が詰るやうに感じる。過去の記憶が眼に映る景色の一幕に甦るけれども一つとして輝かしいものは無い。木津の金比羅の前を通ると義母お久の母——榮一の義祖母——の火葬に來た時のことがむら／＼と頭の中に湧いて來る——朽ち果てた火葬場の柱や、賤しめられてゐる隠亡の顔が、今も猶生き／＼と眼前に甦つてくる。

「何故、田舎はこんなに淋しいのであらう？……日本の農村には愛の組織が無い！」と榮一は考へてみた。

縣道から離れて、村道に這入ると、車の走るとは危険である。稻田に水をひく爲めに所々道を掘つて水を通すやうにしてある。それに打衝かると車が飛び上る。そんな道に人力車を乗り入れることは誠に珍らしいと見えて、田の草を取つて居る男女が、急に脊延びして、車の方を見る。新見は何だか恥しいやうな氣持になつた。

原口家の裏門に車がついた時に、榮一の氣の附いたことは、そこが二十五年前と少しも變つて居ないことであつた。昔、安右衛門さんと一緒に鹽船に乗つて菱の實を取つた堀は、今年も相變らず澤山の菱の葉が浮かんでゐる。高い裏口の石段も昔と少しも變つて居ない。木戸口の傾いたところ、昔と草が瓦屋根に生えたところ、幼いころの事を一々思ひ出させる。

榮一がアメリカに行つてゐる留守中、義母はこの家に世話になる爲めに來たのであつたが、彼が太平洋を渡ると間もなく、赤痢病で倒れた。その墓參と、原口家への御禮の意味で、久方振りに阿波の田舎に新見は歸つて來た。若主人の安右衛門さんは撫養の銀行の事務員をして居るとかで留守であつた。然し安右衛門さんのお母さんが榮一を迎へてくれた。六十恰好の色の白い、眼のバツチリとした上品なそして伶俐相な女である。

「ほんとお母さんもお氣の毒なこと御座りました。あなたのお歸りなされるのを、どれほどお樂し

みにして居られたか知れまへんのでよ」さう云ふて「よしえ」さんは榮一に挨拶した。

暗い臺所は廂が廣い爲めに、話して居る人の顔が明瞭と見え無い。榮一と原口の家には何の血縁きも無いが、死んだお久は原口家と深い關係があつた。お久の異母弟がよしえさんのところに養子に來たことになつて居るとか云ふ。然しよしえさんの主人は精神病の爲めに變死を遂げて、安右衛門さんが後を繼いで、黒崎から嫁を貰ふて平和に暮して居るのであつた。

榮一はくれぐれも義母の逝去の際に世話になつたことを感謝した。今度突然訪れたのはそのお墓参りであることを述べた。

よしえさんは、色々新見家のことを心配してくれて居た。田舎の人は用事が無いからそんなことばかり心配してゐるのだらうと思はれるが、田舎の豪家の御察人様はこんなことでも心配するより外に仕事が無いのにもよるであらう。

「益則さんはお達者なんかいな？」

「はア、無事なんで御座いませう。まだ歸つて來てから會ひませんが？」

「近頃は景氣が善うて大分お儲けになるさうで御座りますなア」

「少し羽振りが善過ぎるのやうで御座ります」

「安井の親類の吉田の御養子になられると云ふのは、ほんとだんで？」

「私は少しも存じませんが……」

「實は宅の安右衛門の育てゝ居ります、兄の娘が、今年十三になりますのを、益則さんに貰つてもらひませうと思ひまして、さうお願したので御座りますけれど、吉田さんの方で、えらい益則さんの技術に惚れて居らつしやるとかで、縁談はもうお纏りになつたと聞いて居りますが、ほんとで御座りますか？」

「いゝえ、私はちつともその事に就ては存じません。」

實際、榮一は安井に預けた兄弟のことに就ては全く今日迄顧る暇もなかつたし、心配してやることも出来なかつた。

益則は、今年に既に數へ年二十二歳の立派な青年であつた。父の死後榮一は弟二人を大阪の金持の親族安井に預けたのであつたが、兄の益則は安井の親族で的場と云ふ關西で一、二と云はれる大きな肥料商へ丁稚にやられ、その弟の義敬は東京神田の米穀問屋で上松平兵衛と云ふ宮内省にお米を納める大きな店に丁稚にやられた。然し金持の親類など云ふものは存外頼りにならぬもので、榮一が偶々尋ねて行つても座敷に「上れ」とも云はず追拂ふので、榮一は安井家に尋ねて行く氣がしなかつ

た。それで弟がどうならうと、全く神に委せて居た。然し二人とも達者で成長し、益則などは的場の店で無くてならぬ人物と成つたと云ふことだけは噂に聞いてゐた。そのまた弟の義敬と云ふ奴が元氣な男で、番頭が陸軍から歸つて来て威張つて仕方が無いから、自分もその男に負けたくないと思ふので海軍に志願して、呉の海兵團に入隊したと云ふことを知つて居た。

然し、どうしたわけか、益則の方はすぐ近くの大坂に住んで居る癖に、神戸の兄を尋ねてくることが無かつた。で、よしえさんに聞かれても何にも知らないのであつた。

安井の親類の吉田は大きな家督持ちであつた。大阪朝日新聞の發行した長者番附にも載る程度の大金持であつた。なんでも大阪の南に一萬五千坪とか二萬五千坪とかの廣大な地所を持ち、借家の百五十軒も持つてゐる家であつた。

吉田の家は所謂「しもたや」で、何の仕事もして居なかつた。たゞ家賃と地代のあがり、金貨の利息で食つてゐた。つまり、完全無缺な、搾取階級を代表するものであつた。それで榮一は吉田の家をあまり善い家とは思はなかつた。たとひ、弟の益則が、養子に迎えられるにしても、要するに金を産む誰として、迎えられることにきまつてゐるのだから、理解のある結婚だとは思へ無いのであつた。

そんなに考へたものだから、榮一はよしえさんの云ふことも、あまり氣にも止めなかつた。長い沈黙の續いた後、榮一は口を開いて云ふた。

「——金持は何をするやらわかりません、益則も若いものですから、吉田の養子にしてくれると云へば嬉しいでせう。」

「それでは、榮一さんは御縁組には御賛成ぢや無いのですか？」

「私は男女関係の問題だけは、みな自由にさせて居ります……もう新見の家では女の問題で懲りくして居りますから……」

よしえさんの、會話の範圍も限られてゐた。たゞ自分の關係のある周囲の人々の様子を話さへすればそれで新聞も讀まない田舎の御寮人様には満足が行くのであつた。

納屋に臼を踏む音がする。藪の方から煙が舞ひ込む。押入の板戸も、襖も、天井板も、疊も室にあるあらゆるものが煤けて黒くなつてゐる。

鶏が裏庭で鳴いて居る。馬が表の厩で嘶く。田の草を取つて居る娘の歌であらう拍高い歌が西の方

に聞こえる。「宅も安右衛門門が相場で損をしましてない、此家倉全部、みな抵當に這入つて居るんだんでよ」

さう前後に連絡もなく云ひ出したよしえさんは訴へるやうに聲を震はせた。

「當世は、なんでも金の世の中だすよつてに金の無いものは一生頭上りは御座りまへんわ……」

さうまたよしえさんは附け足した。榮一はそれに對して何の答もしなかつた。たゞよしえさんの髪に著しく白髪が増し加はつて居るのを凝視してゐた。

よしえさんは、それから近村の金持の噂をした。そして、原口の家だけが衰へて行くのだと云ふやうなことを云ふた。大きな家に日傭人の一人の外誰れも居らず、安右衛門さんの兄の子供二人と自分三人で安右衛門さんが日暮に撫養から歸つてくるまで留守してゐるので寂しいことは想像するに難くはなかつた。

「世の中は景氣が善いと云ふ噂ですが、田地持ちは少しも儲かりませんわ……今年から、宅も他所並に一割だけ年貢を引上げましたわ……それでも大きなもんだんでよ、四十俵も違ひますよつてになあ。」

榮一はそれに對して唯「さうですか」と答へるのみであつた。

白壁の部分的に落ちた衣装庫の前に大きな青い蔦の葉が一面に生えて居る。それに止つてゐる蠅を四五匹の母鶏が競争して食ふて居る。

白が納屋に鳴る。

東馬詰の鎮守の森の側にある新見家の墓地は、村で最も大きなものである。十七代前に新見庄左衛門が藩主に促されて監の栽培の爲めに、和歌山から引越して來たのだと譜系には成つて居るが墓は四代前よりしか見當らない。義母の骨は父喜一の墓と一緒に葬られてある。

益則は少し金が廻つたとみえて、墓地を全部コンクリートで草の生え無いやうに固めてある。周囲の杉の生垣も整然と手入れが出來てゐて、見るからに心地が善い。これなら貧民窟で喰ひはぐれると、墓地に來て住んでも善ささうにも思へる。

周囲の景色は昔と少しも變らない。稲田も山路の森も、大麻山も、土手も昔の儘である。たゞ著しく變つて居るのは、城のやうに堆りあげられて有つた新見家の屋敷跡が周囲の水田と同じ水準にまで掘り下げられてあることであつた。

田宮の西の新宅から手桶を借りて墓場に水を運び、父夫妻の墓を洗ひ榮一はその墓の前に蹲つて黙禱した。黙禱して居る中に色々な感想が浮ぶ。そして第一に感へることは、榮一が親不孝もので有つたと云ふことである。

さうした冥想に耽つて居る中に、市から来た洋服を着た人が珍らしいと見えて、榮一が顔覚えの無い、汚ない襤褸を着てゐる貧民窟の子供と、あまり變りの無い四五人の男の兒が、墓場の入口に立つてゐる。

『やい、此處に蟻螂が居るぞー』

と一人が叫ぶ。

『どれ、何處に？』

と二、三の子供が叫ぶ。

榮一の冥想はそれによつてもう破られた。榮一はもう魂の扉を閉して居ることは出来なかつた。廣く扉を外側に打開いて、美しい故郷の大自然の出来事に注意しなくなつた。

幼い時の自然の友を尋ねようと、墓場の裏の堀を覗くと、榮一の友達はみなそこに居つた。田螺——目だか——蛭——源五郎虫——それらの小動物は葦の落葉の朽ちた堀の底の澄み切つた水の中で、愉快さうに遊んでゐた。榮一はそこへ這入つて、一瞬間でも善い蛭の精になりたかつた。そこは淫賣婦も居らず、破戸漢も騒が無い、善い世界であらうと想像した。畝の細道の西側には「おばこ」が生えて居る。幼い時に「おばこ」の糸で紐を織つたことを思ひ出す。自然を遠く離れて生活してゐ

ると自然がどれだけ懐かしく慕しいものかを考へる。

誰にも愛せられなくとも善い、この物靜かな古馴染みの自然と幾日か一緒に遊ぶことが出来るならと思ふ。

榮一は嘗て自分の屋敷であつた地所の裏に廻つた。よく登つた「すだち」の木も、高さが五六十尺も有つた遊柿の木も今は遺蹟も無い。たゞ夏の暑い時によく水踏みに出て來た堀の曲り角の灣入した所だけがその儘残つてゐる。その所に立つて彼は色々過去のことを考へてみた。そして田舎で育つたことの幸福をしみじみと思ふた。聽て彼は道側の草の上に腰をおろして、そのあたりの植物、動物、土の色、山路の景色——茅の生え具合、田の枕に植えてある畝豆の葉の形、堀側に植えられてある樺の枝ぶりなどに餘念なく見入つてゐた。

そこへ山路から幼な友達の誠治さんが歸つて來た。彼は今、村役場の書記をしてゐるのであつた。誠治さんも道の側に踞むできつい阿波訛りで話出した。

『……市は景氣が善いちうな、然し、田舎はあかんでわ、かう米が安うては百姓は立つて行きまへんわ、たゞ去年は豊年でしたからな、少し百姓も息をつきました、こんなことでは我々は飢え死にするより外に仕方がおまへん。』

田宮の新宅も困つたことぢやな、年中兄弟喧嘩でわ、段關の原口とは喧嘩するし、主人公はいつも賭博ばかり打つてゐるし……田宮の本家が潰れる、新見が潰れる、村の有力者と云へばあしこだけでないで、それにあしこがしつかりせんので、村も衰微する一方であらう。——なんでも、新見の少し残つた地所も……かう云ふとおかしいが、妙なことになつて居ると云ふことですか。……御存知ないんだんで……お宅にはまだ七反何畝とか残つて居る筈なんですよ——』

それは新見には初耳であつた。然し村役場の書記の云ふことには間違はない。

『川の中の新田に四反何畝と、中馬詰に二ヶ所と、墓地と、それにどこやらと合計七反何畝か残つて居る筈です。村税も四圓何十銭か毎年懸つて来て、段關が拂ふて居るか、田宮で拂ふて居るか、兎に角、納つて居りますわ。あゝさうそ、小坊さん（益則のこと）が此年はお濟ませになりました。然し、あの田地も今の中に判然處分おつけになつておかんと先に行つてわからなくなりました。』

『——村の青年會にでも寄附しますわ。』

『そんなことが、勿體ない！ 今年なぞ、馬詰の上田で九百圓から千四百圓まで値が出て居りますわ、七反からあると、たいした金目ですわ。』

『——それでも茅野の中の芋畑が四反からあれば、さうたいしたことは無いぢやありませんか。』

『それでも一反百五十圓か、二百圓は致します。まだお久さんの名義で捨てゝあると思ひます。どなたか新見の御本家を相続する方は無いのですか、惜しいものですか、十七代も續いた舊家を倒すと云ふのは實に惜しいことです。』

先日板野郡史を編むと云ふので、史料編輯委員が、新見の家は歴代の大名主であつたから、史料が残つて居らぬかと、大阪の益則さんのところにお尋ねしたところが、お家が潰れた時に、長持に五杯もあつた記録を、反古の値段で賣拂はれたと云ふことが判りまして、惜しいことをしたもんぢやと役場で申したことでした。』

長い會話の後、榮一は村の氣風が日一日と衰へて行くことを誠治の口から聞かされた。美しい自然の環境に包まれてゐても、元氣の無い農民の群は賭博と、酒と、投機と、放蕩に倫落して行くことふことも學び得た。そして、淋しい田舎にも家と家との間に反目があつた。それで一晩位は、村に泊つて行きたいとを知つた。それを聞くと彼は田舎に住む氣もしなかつた。それで一晩位は、村に泊つて行きたいと思つたが、何人も歓迎してくれない田舎に居たつて詰らぬと思つたから、また田宮の渡しを越えて、徳島市に出た。

それはもう暮に近く、茅野の中の芋畑には誰も人が居らなかつた。



徳島市まで二里半の道を彼は一人冥想し乍ら歩いて行つた。長い監獄の塗り堀に沿ふて堀側を歩み、寺島の町へかゝつたが、彼の知つてゐる人には誰れにも會はなかつた。宣教師を尋ねたが留守であつた。通町の牧師を尋ねたが、その人も地方に傳道に出てゐた。牧師の子供は彼を誰れと思つたか、石を拾つて打つけた。

追はるゝやうな思ひで彼はステーションに行き、その晩十時に小松島出帆神戸行に間に合ふやうに聯絡切符を買ふた。

## 十

その後、間もないことであつた。兵庫縣救済協會から、會長の岩下知事が新見に會ひたいと云ふて來た。それは勿論救済事業のことに就てであつた。

岩下知事は歐米にも長くゐたことのある人だけあつて、相當新見の事業に敬意を拂つてゐた。新見は兵庫縣廳の知事の事務室で岩下氏に會つた。

知事は脊の低い人で年恰好五十二三の仲々頭の鋭さうな人であつた。云ふことがなかくしつかりして居る。四方山の話のあつた末知事はこんなことを云ふた。

「時に新見君、君も既に氣が附いていらしやると思ふが、我國の現状を見ると實に寒心すべきものがあるのですなア……君も最近外國から歸られたから御承知の通り、ロシアがあゝの通り革命をやると云ふ騒ぎですから、我國にも早晚さう云つた思想が傳播しないとも限らぬ。就ては、新見君、君が現在住んで居られるやうな地方は徹底的に改造せねばいかぬと思ふが、幸ひ、縣の有志諸君も我々共と感をお同じうせられて、兵庫縣救済協會といふものが出來たのです。つい先頃まで園川吉郎君と云ふ——君の御承知の方だと思ふが、園川君は君をよく知つてゐると云ふてゐたやうだつた——その人が盡力せられて居たのですが、今度新しく、今村文學士に御盡力を願ふ序に、君にも色々御忠言なり、お氣附の點を承つて、大に社會政策を實行したいと思つて君に來て頂いたわけなんです。どうぞ、まアよろしく。色々細かいことに就ては、今村君と相談せられて、縣下に於ける社會政策に就ては勿論のこと、我國全體の問題に就ても私に教へて戴きたいのです。……君を危険人物のやうに云ふが、現在今日君に會ふと云ふことでも警察部長などは反對したやうであつたが、私は、信ずることは大に遣ると云ふ方針だから、その積りでどしどし君の感じたことは云ふてくれ給へ。」

知事の態度は實に立派なものであつた。それで、新見は知事に先づ第一に労働組合の必要を力説した。新見は云ふた。

「——労働組合の問題は必ず我國にも大きな問題となると思ひます。今の中に基本的の調査と、基本の方針を建て、置かねば必ず我國の大きな患となると思ひます。私は所謂社會政策の小策を弄してゐても駄目だと思ひます。」

「さア、そこなんです新見君、私などもその點に氣が附いて居て、遅かれ早かれ我國を動かすのは労働黨だと思ふので、健實なる労働組合なるものを發達せしめなければならぬと思ふて居るが、君どうも、常路の大官と云ふ人の中にも存外頭の古い人が居るからね、あの相愛會——君は既に御承知のことと思ふが、あの微温的な勞資協調を主眼とするものですら警保局あたりでは、餘程危険視して居るのだから、まだ君の考へらるゝ如き労働組合とか勞働調査とか云ふことは當局は危険視してならないから、そこは極く表立た無いで研究の歩を進めて行けば善いと思ふのです。」

私の前任地は福岡縣であつたのですが、あしこには八幡の製鐵所がある。それに百六十幾つかの大きな炭坑がある。それは實に物凄い程労働者の群がる縣ですが、私はどうしてもあしこに一大爆發が起ると想像して居るが……新見君は、福岡縣をよく御存知ですか？」

「あまり知りません……」

「知ら無い——知らなければ是非二つ視察して貰ひたいものですな。普通の人が行つてもどこも坑内

など見せてくれないが、そこは、僕等の紹介で行くと充分視察が出来るから、一つ至急視察して貰ひたいのですね。實に非慘なものです。若い女が素裸のまま腰の周圍に手拭のやうなもの一寸巻いてゐるだけで、坑内に下つて行くのだが、爆發があると、亭主も妻君も、子供を連れて居る場合にはその子供までが落盤の爲めに地下に葬り去られてしまふと云ふことは、あしこでは屢々聞くことです。それは新見君一面から云へば、新川の貧民窟以上だと云へませうよ……その住宅と云へば……今でも『納屋』と云ふて居るが、全く人間の住むところでは無く、文字通りに物品を入れる納屋だね。それは非、福岡縣を視察して貰ひたいものだね。今井君、早速、新見君に、福岡縣を見て頂いて、我等にその視察せられたところを學術的に發表して頂かうぢやありませんか……兵庫縣救濟協會と云ふても、何れも兵庫縣に止る事は無いのだから、廣く天下のことを研究してそれを學術的に發表して行くなら、國家を益するところも實に大きいのだから……」

知事の言葉は、實に叮嚀であり、また親切であつた。新見は日本の知事の中にもこんなに物の判つた男もあるのかと感心した。

なる程、日本の進歩するのも、こんな行政官も居るからだ。

と彼はひとり合點した。

兵庫縣の救済協會が調査を囑託した翌日、大阪府救済協會からも機關紙の編輯を囑託して來た。新見は漸く自分の今日まで研究して來たことが社會に役立つやうになつたことを自ら悦んだ。

七八

十一

夏の最も暑い盛りに、新見は竹田等の自治工場の組織に苦心してゐた。

勿論篠田から貰つた三千圓の金でやれる望みはなかつた。機械だけに五千圓は必要であつた。その上に、工場の買収費が二千圓、運轉資金が三千圓、合計壹萬圓はどうしても手に入れなければならなかつた。

新見はその金を神に祈つた。そして不思議なところからその金が湧いて出た。それは外でもない。新見の導いた新川イエス團の信者の『髯のおちさん』の谷本が凡てそれを取り纏めてくれることになつたのである。

『なにわけありません。』

さう云ふて、髯のおちさんは株の勧誘に近所を廻つてくれた。

髯のおちさんの谷本と云ふのは、新見が最初、新川に來た時に世話をした數名の中の一人で簡易食

堂の天國屋をさせたり、耳かきをけづらせたりして世話をした僧侶出身の男であつたが、その後鐵の備が出ると共に、潜水夫を使ふて海中から鐵を拾ひ上げ、數千圓の貯蓄をするやうになつた。新見の世話したものの中では、物質の上にて最も成功したもの一人だ。

「髯さん」は新川の家主仲間にも信用があるので、新川の家主を一軒一軒訪問してくれた。その口上が餘程振つてゐる。

『今度なア、うちの先生がなア、この景氣の善いのになア新川で若い者がまだ大分遊んでゐるでなア、それをたすけてやらうと仰有つて、ブラッシュ工場を建て、ちツと株を持つてか？ 損をかけるやうなことはしないから、一株でも持つてや——』

彼の訪問した家で、直に賛成してくれたのは畑野と云ふ癩病やみの高利貸と、按摩から出世して、家主となり、金貸となつた細木、煙草屋で、新川での顔役の一人である地本の三人であつた。この三人に髯さん自身を加へて二十株は出來ると云ふことであつた。

然しまだ四五千圓はどうしても足らない。

不思議なことには、新川から程經てた中村と云ふ貧民窟の家主で姓も同じく中村と云ふそのあたりの大地主が、誰から聞いたか、新見さんとなら事業を一緒にしたいと云ふて來た。新見は驚いて、大

阪の竹田を呼び返し中村と云ふ人の動機をよく取調べて貰つた。すると、如何にも立派な動機に新見も驚いた。中村さんが事業に加はると云ふ動機は別に何にもないので、全く新見に共鳴してゐると云ふだけであつた。新見は神は最徹者をも捨て給はないと云ふことを感謝して、直に匿名組合を成立せしめた。愈々振込と云ふことになつて、新見は初めて、中村さんとイエス團の事務所の二階で會つた。

四十恰好の、硬骨な、人の善ささうな人であつた。新見は一々先方の持ち出す條件を聞いてみたが、氣味の悪い程、何にも云はない早たゞ先生と一緒に事業させて頂けばそれで結構なんでして、損は勿論覺悟の上であります」と云ふ。

新見はたゞ／＼恐縮して了つた、「こんな親切な人もあるものか」と悦んだ次第であつた。

それと共に新見は一層責任の重くなり行くことを感じた。たゞ三千圓だけの篠田に貰つて来た金だけであれば誰れに損もかけなくても済むが、七千圓からの人の金を全部損をかけるやうなことになるば、人の前に顔出しも出来ない、我ながら妙なことになつたと思ふた。

然し、之が成功すれば、新川と中村の二つの貧民窟を救ふことが出来るのだと楽しみにしてゐた。

中村さんは十萬圓ほど持つてゐる地主で、新見が入用ならば二三萬圓であれば、何時でも用立てる

と云ふてくれた。新見はさう云ふてくれることをどれだけ有難いことかと思ふて感謝した。

彼はあちらこちらと、新川附近の適當な貸工場を探がした。然し、いざと云ふては無いもので、適當な工場はどこにも見當らなかつた。

七月の末、焦げつくやうな暑い眞盛に、氷賣が「かち割り一錢から一錢から」と云ふて通ると、その後から道路の蒸せ暑い埃混りの熱風が、サツと身體にまくわつてくる。そんな時に、新見は一生涯懸命に工場を尋ねて廻つてゐた。

丁度、新見の事務所から一町山手に上つて、二町西に行つた日暮通六丁目に四十二坪の工場が明いたのを見附けた。それはもと／＼屑繩の納屋であつたものを、現在の借主がメリヤス工場に直したものであつた。然し、幸にも権利金が馬鹿に安い。僅か七百圓だと云ふ。早速それを買ひ取る約束をして、機械の買収にかゝつた。

八月の太陽は容赦なく照りつけた。どちらの風も封ぜられて、烟筒はみな眞上に立ち昇つてゐる。こんな日に限つて大阪は怖ろしく蒸せ暑いのである。

屋根の瓦と云ふ瓦は皆煤煙の爲めに褐色に變じ、街路の土も石も皆焼けて、道行く人は熱氣で、

ゆだるやうである。それでも大阪は戦争の影響を受けて、途行く人は神戸以上に急がしさうである。丸刈りにした竹田は仕事着のまま、新見を機械店の多い立賣堀に案内した。

岡崎橋停留所からおりて、白鬚橋に出るまで立賣堀一帯の凡ては機械屋であつた。この店は紡績機械専門、其向ひは水上ポンプ専門、あちらは織機、こちらは印刷機械、あすこはボルト専門、此處はシャフト、此處は瓦斯エンジン、其隣はベルト専門と、さすがは大大阪だけあつて、専門、専門で生きて行けることは驚く程であつた。

新見はあすこ、こゝとブラシユ製造機械を當つてみた。みな高いことばかり云ふ。それで彼はすぐ約束して買ひとるとやう云はなかつた。

竹田は、野田に古いものがあるからシャフトだけは新しいものにして他はみな古いものを使ふではないかと彼にすゝめた。彼は竹田の意見に従ふた。

然しその日の見學は彼に取つて、實に大きな発見であつた。歸り道に竹田は大阪の商店の分布を話した。藥屋は道修町、肥料屋は靱、米問屋は堂島、古洋服は御靈裏、古道具は伏見町、履物は御堂筋、染料は堀江、玩具は松屋町、青物は天満、綿糸は久太郎町、綿布は安土町、本町、金物屋は立賣堀、雜貨は心齋橋筋……と大阪は區域によつて商品を賣るところがきまつてゐる。工業の方面も同様で區域

によつて製造するところがきまつてゐるのだと彼に話した。

聞かされてみれば、大阪は恐ろしい市である。

## 十二

毎朝貧民窟をまはる喜恵子の周圍に群がり来る子供の中には頗る多數の重患があつたので、榮一は度々消毒を嚴重にするやうにと注意したが、八月に這入つて喜恵子の眼はもうあかなくなつた。榮一も、眼には苦い經驗を持つて居るので直に眼科醫者に送つた。

二三日しても善くなりさうはなかつた。それで、彼は自身に診断してみた。そして驚いたことは、パンヌスが早や廻つてゐて、血管が無數に黒玉に這入つてゐる。彼は驚いて、自ら附添ふて縣立病院の眼科まで喜恵子を送り届けた。縣立病院の手術は比較的有効であつた。三週間の後には少し眼が開くようになつた。

然し、右眼は思つたやうに快方に向はなかつた。それで彼女は毎朝、縣立病院へ通ひつめた。

喜恵子の父は四年以上も病床の人であつた。病氣は腰部の神經痛と持病の喘息であつた。色々手を盡したけれども善くならなかつた。幸に、彼が務めてゐた印刷工場の社長は彼の妹の婚であつた

爲めに病床にあつた四年間も、何不自由なく、會社から生活費だけは送つて來た。然しさうなると大きな家にも住めないものだから六疊二間の小さい家に引越した。

それやこれやで、刺戟せられた榮一は是非、貧しい病人の爲めに無料診療所を建てたいと思ふた。

然し工場に一萬圓以上入用ことになつたので、新見は篠田に融通して貰つた三千圓で足らなくなつた。他に持ち金とてなし、始めたいと思つてゐた貧民窟の無料診療もその爲めに全く望の無いものになつて了つた。で、また篠田にねだることにした。

篠田の宅は須磨の月見山にある西洋館で、——離宮の裏に登ると、西側に松林があるそのすぐ手前の赤瓦のバンガローがそれであつた。彼は凡てが西洋好みで、室内の裝飾も全西洋式の立派なものであつた。

新見は篠田が未だオフキースに出ない前に彼に會ふと思ふて、須磨に出掛けた。須磨は貧民窟とは違ふ。離宮のあたりになると、瀬戸内海の見晴らしも善く、源氏物語の昔がしのばれるのであつた。

篠田の宅は幽邃な所に立つてゐるので、新見は有閑階級と無産階級の差はその住宅に於て最も著しいと思ふた。

篠田は趣味の低い男と見えて、應接室にはピアノもあれば、オルガンも据えてあるが、壁に掲げて

ある額などには金のかゝつてゐる割合に少しも感心するものはなかつた。

篠田はまだ寝てゐた。妻君が出て來た。それは脊の低い瘠せこけた、氣の毒なほど青白い顔色をしたヒステリー性の女性であつた。年恰好は三十四五かと思はれた。大きな模様の附いたモスの浴衣に縹子に縮緬を合せた夏帯を、言葉數も少なく、たゞ時候の挨拶をしたゞけで引込んで了つた。

「あれでは篠田の遊ぶのも無理は無い——」など考へてゐるところへ、篠田が這入つて來た。

新見は工場の設立に着手したことから、猶無料診療の爲めに金が要るから、毎月定額で善いから寄附してくれと頼んでみた。

篠田は昨夜遅くまで起きてゐたとみえて、上瞼を脹らせてゐる。彼は目をこすり乍ら、濃い茶褐色をした金口の附いたハバナの葉巻煙草にマッチで火を付け乍ら、新見に尋ねた。

「君、醫者さんは、此頃一體月給いくら位出したら來るんや？」

「百圓か、百二十圓出せば善いと思ふがね——」

ハバナ煙草の煙が輪を畫いて立ち登る。強い匂ひが室内に充ちる。

「そんな事、君、安いこつちや無いか！ 僕等が一晩遊ぶのを仕末したら善いんぢやないか！ よし、君、僕は、その金を出してやる！ 君等に費つて貰はなくちや、俺達の金はみな死に金ぢやからない

「不景氣が来て、もとの歩に返るか知れないんだから、今の中に寄附するものだけは寄附して置くわ」  
 かう云ふて篠田は心よく、毎月百圓の寄附を無料診察所の爲めに承諾してくれた。そして兵子帯の  
 中に巻き込んでゐた一束の百圓札の中から一枚引抜いて新見に渡した。  
 新見はその無難な態度に驚いて了つた。

「あるところには金が喰ふ程あり、無いところにはどれだけ飢え死してゐる人があつても無いのだ。  
 金こそは不思議な曲者だ」と考へ乍ら彼はその百圓札を取り上げた。

篠田は善いことをした時の快感を話題を變へて示した。

「なア、新見君、實際、この間も、ヨーロッパから歸つて来た男に聴くとなア、日本などはしつかり  
 せねば、駄目だと思ふよ……お恥しい話だが、僕らもこんなところに家を持つて贅澤して居れんこと  
 は知つて居るんやでエ、それで居て、つい累を巻くことを怠ると、贅澤になつて了うんだね。」

篠田は大きな股掛椅子によりかゝつた儘、葉巻煙草の輪を作つて語り續ける。

新見は黙つて聞いてゐる。

「……然し、日本が墮落するのはあたりまへだね。日本開關以來、今日のやうな好景氣と云ふもの  
 は有つたことがないんだからね。……然し、考へてみりや、馬鹿氣な話さね、ヨーロッパが用つてゐ

るから、我等が儲けてゐるやうなものさ、不人情な話さ……こんなと思ふと、新見君、僕は經濟組織  
 の根本から疑ひたくなるね、儲けてゐると云つたところで、實際、外國行の船舶に關係するものが儲  
 けてゐるので、その他のもので、儲けてゐると云へば、多くは輸出に關係あるものが儲けてゐるので、  
 いかにも君が話してゐたやうに、反つて不景氣で困つてゐるものもあるのぢやからなア、サア、あれ  
 で、神戸で儲けてゐると云ふのは十四五軒だらうなア、川崎や、三菱のやうな造船所は別として、船  
 舶に關係のある、勝田、内田、河内なども入れないで純粹の商賈人の中で儲けてゐるのは、まア、花  
 木が筆頭で、三井、三菱商事、古河、久原、阿部幸、増田、茂木、園池、大倉、淺野物産、岩井、位  
 のものかなア、つまり好景氣、好景氣云ふても、多くはこの十二三軒に儲けられて了つてゐるやうな  
 もんだねえ。

實際、さうだぜ、世の中と云ふのは不公平なものだ。」

篠田は歎息し乍らさう云ふた。窓越しに離宮の裏山のなだらかな曲線を持つた緑の深い松林が見え  
 る。

「——新見君こゝに假りにフランス行のチャーター船があるとせうかい。その船腹が今八千噸あると  
 するね、その半分を誰れが取るかと云へば、君、三井と花木が先へちやんと取つて了ふのぢや、その

残りの半分を岩井が取つて、残りの半分を小さな会社が競争してゐるんぢやねえ。だからさ、船腹を百噸なら、百噸取つたと云へば、それが賣買せられることになるんぢやないか！と云ふのがね、アメリカ航路などでも、百噸で八千圓や、一萬圓位儲けることは何でもないだらう。商事會社では、船腹を百噸取つたと云へば、早やそれで、積込まない先ものを取引して居るぢやないか！

それで大きな會社の事務員をみて見たまへ、みんな墮落してゐるから、ポツと出の高商出身が出たその日から二百圓、三百圓で雇はれて行くのぢやから、墮落するのはあたりまへぢやないか！

——新見君、僕などはまだ之で善い方だぜ、それらの事務員はどいつもこいつも賭博うつか、相場に手を出すか、先物に手をつけるか、まるで、今日では商賣がまるで賭博と同じになつて了つてゐるのだよ——

例へばあのガニ袋なア、新見君——あの南京米の這人つてくる麻袋のことよ、あいつがなア、日本では出来ないのぢや、みな印度あたりから来るのだが、神戸の海岸通りの商館の連中はあの「ガニ袋」で賭博やつてゐない奴が何人あるか？

毎日、あのガニ袋の市が立つのだよ、……それが現品の無いものでだぜ……」  
新見は顔を擧げて聞き返した。

「無いものを取りする？」

「全く無いものを取りするのぢやから、面白いのぢや、君、……たとへば僕が五百萬枚賣りに出たとせうか……品物は無いんだぜ、……ところが、港の景氣模様によつて、一枚四十七錢してゐるものが、一錢上つたとしようか、すると五萬圓の差が出てくるだらう。それで相場が立つんぢや、君……それを四五十人のブローカー連中があつてなア、商館から商館に持ち廻つて、賭博のやうなことをやつて居るのや……今日はガニで二千圓儲けたとか、三千圓損したとか、みな云ふて居るワ、あれにも弱つたものやなア……然し考へて見りや、みなガニ袋の先物をやつてゐるやうなものやなア、みんな商賣が地について居らへんわ、みな賭博うつてゐるやうなものや、さう考へると人生も淋しくなつてくるなア。こんなところは、つまり間違ひの上に間違ひを重ねるやうなものやから僕らは儲けても少しもうれしくないし、損をしたかつて少しも悲觀はしないよ。要するところ、何をして居るんだか知らないので藻掻くだけ藻掻いてゐるんだねえ……だから新見君……僕ら、善人でもないかわりに悪人でもないよ、……つまり人並と云ふところだね、之で君の眼から見ちや地獄におちてるかも知れないが、落ちたところで仕方がないぢやないか！」

さう云ふて、篠田はまた例の豪傑笑ひをした。そこへ店から篠田へ電話がかゝる。新見は蒼皇そこ



を辭し去つた。

愈々簡易な無料診療所が出来ることになった。

彼は午後半日だけでも貧民窟に診察に来てくれる特志な醫師を探ねて廻つた。西の宮に住んで居る上山と云ふ信者の醫師がはやらなくて困つてゐて、生活費だけくれさへすれば、午後半日だけ働くと云ふて居るのを聞き込んだ。で、人を以て當つてみた。話は直に纏つた。看護婦の必要があつた。それも長州山口の牧師の妻君の姉で、看護婦免状を持つてゐる人が来てくれることになった。彼女は一旦嫁いたが離婚になつて里に歸つてゐた。何處かに住み込むところが無いかと探してゐると聞いたので、早速来て貰ふことにしたのであつた。

新見の事業は愈々始まつた。新見は希望を以つて、その凡てを神に感謝した。

十三

随分長い病床の生活に、喜恵子の父は何の訴ふるところもなかつた。それは殆ど哲人のやうに謹厳であり、また不平がなかつた。喜恵子の母も夫に對するに實に親切であつて、貧乏の中に脇目から見

て居て美しいほどよく盡した。樋口のお父さんも最初はキリスト教に反對であつたけれども、喜恵子がキリストに行き、その次に初子が、そして最後には妻かよまでが教會に出入するやうになつたら、少しも反對しなくなつた。そののみならず、折々は自らも聖書を取つて見るやうになつた。

彼の健康は五月雨の間持つつか否かゝ問題であつた。然し、看護が行届いてゐる爲めか、不思議によく持つた。今度は夏の間持つつか否かゝ頗る問題であつた。

喜恵子が横濱から歸つて來た。然し別に喜ぶこともなかつた。

段々衰弱は加はつて、八月の二十九日に遂に永眠した。彼は何の不平を訴へず、誠に哲人の如く眠つた。あまり沈黙勝ちであつたから底氣味が悪い位であつた。

喜恵子は右眼に眼帯をかけた儘、葬列に加はつた。遺言によつてお葬式は極端に簡單にした。その爲めにすつくりで十六圓しかゝらなかつた。それは、棺と輿と神二本と人夫八人の代金であつた。

新見は喜恵子の父のあまり靜かなる死に感じて、墓標に次の如く書いた。

「彼は哲人の如く寝れり」

新見は春日野の墓地に一坪の土地を持つてゐた。之は幾年前に多くの哀れな貰ひ子殺しの犠牲者を世話して居た時に一坪だけ買ふて置いた新見に取つては唯一の財産であつた。

お葬式の有つた翌日、彼は喜恵子と二人で春日野の火葬場に遺骨を拾ひに行つた。そして靜かに喜恵子の父の頭蓋骨と頸骨と俗にお舍利さんと云はれてゐるものを箱に收めて、すぐ下の新見の墓地に埋めた。

## 十四

貧民窟の大通りに薄暗がかゝり車輦の音が消え酒屋の群衆も一人減り、二人減り、酒屋の前で賣つて居る關東煮のおでんやの汁が煮つまる頃まで、新見は大阪行の二人が歸るのを待つてゐた。

辻の淫賣婦の群のあばづれた行爲がひとしきりすんだ後、隠亡が屍を拾ひ集めるやうに、お茶びきのお貞はまだ吾妻通五丁目の角に立つてゐた。日課のやうにいつも酔つ拂つては屋根に登り瓦を街路に投げつける悪い癖の通稱「失敬」さんの内輪喧嘩もすんだ「旦那々々」を繰返して道を通る誰れによらず凡ての人を困らかす、通稱「旦那」の辻芝居もすんだ。

幼稚園の土塀によつて夜泣きうどんの臺車がつくねんと一つ寂しく立つてゐる。行燈の繪のお多福が闇に浮き出して特別によく見える。木賃宿の行燈も段々消えて行く、通りの人も段々すくなくなる、秋もたけると、貧民窟も裏筋は早くから靜かになる。

新見は、大阪に電動機を取りに行つた青年がもう歸つてくるか、もう歸つてくるかと待つてゐた。

それでイエス團の戸口を栗鼠のやうに出たり這入つたりして外を窺つた。淺田と高井は朝五時から大阪にモートルを取りに行つたのであつた。

新見は一生に一度でも善い、電動機を自分手に廻してみたく思つた。そして機械的生産と云ふものをしてみたかつた。

電動機がブーンと唸りを立てる！ベルトが滑かに廻る。精巧な機械が圓滑に運轉する。そこから巧妙な生産品が仕上つて出てくる。凡て營利を離れたさうした工場を榮一は夢みてゐた。「機械を使ふ！」「自然を征服する！」人々が機械文明を呪ふのは工場に互助愛が無いからだ。互助さへあれば機械工場は呪の的では無くして、恵みのパラダイスである可き筈だ。十人でも二十人でも善い。新見の周圍に居る愛すべき青年が失業の憂き目を逃れ、金持ちにならなくとも善い生活の安定を得て、大きくなくとも、獨逸モラヴァキアのヘルンフットの共産村のやうに……労働と祈禱の一致する善き工場を造りたいと云ふ幻を新見は十數年前から見えてゐた。

今……、それが今、實現の緒に就きつゝあるのである。

彼は長く、紙屑のやうな教義の中に埋れてゐた。そして、今彼は新しき世界が彼に與へる最大の獻

示——電氣モートルを手に入れんとしてゐる。何と云ふ幸福者であらうか？ 彼はもう墓場のやうな教義の世界から抜け出て、電氣の世界に甦りつゝあるのだ。

九四

明日から、工場にモートルが喰る。

赤い電燈がつく。電力の通ずるスイッチをはねると、妖魔のやうな力を持つモートルが廻る。

それは凡て自分——自分等のものである。妖魔の力が何處から出て居るか、宇宙の謎が何處に潜んでゐるか、それを調べる爲めに、私は、五馬力のモートルをバラ／＼に解剖する権力を持つて居る。モートル、機械も、二吋のシャフトも、烟筒も、工場の板間も、白く塗つた壁もそれは凡て私達のものである。——工場も、電氣も、機械も、企業も、引力も、法則も、凡て、私の玩具である。私は新しい玩具を持つ、それは過去の暗い懺悔の代償として表現と發展を保證する近代科學である——

こんなに考へた新見は、モートルの手に這入ることをどんなに待つたことであらう。今日迄の彼の福音は、電氣モートルと何の交渉もなかつたのである。それが、今日初めて、中世紀から、最近代に連絡すると云ふのだから、彼が電動機を待つたのも道理である。彼は戀人を持つやうに、大阪から送つてくる黒崎電動機製造所の五馬力のモートルを待つた。

晩の五時に歸るか、六時に歸るか、八時に歸るか、十時に歸るか、待ちに待つた。大阪の野田か

ら、神戸のとつつきまで十里ある。どんなに遅くとも、晩の五時にはつくと思つてゐたものが、五時になつても、まだ歸つて來ない。或は同志の一人が途中で病氣になつたのではなからうか？ それとも、不用意で行つたものだから、荷車から電動機がこぼれて落ちて、それを打毀したのぢやあるまいか？ もし、そんなことがあれば、彼の理想は全く水泡と化するのみならず、自治工場を理想とした青年達の失望もどれだけ深いかわからない。或はあまり荷が重くて、途中で弱つて了ひ、工場を造らない中から、「こんな非道い役目を俺達に命するなら、俺達は反逆するのだ」と謀反を起して、居坐つてゐるのぢやないか……など、それから、それへと新見はモートルの着くことの遅い事を心配した。

新見はいらだしい心を感と鎮める爲めに狭い臺所に這入つて書物を讀んでゐた。然し少しも頭に這入らない。たゞ、彼が機械と信仰と、労働と祈禱と、生活難と自治工場と、生活と福音を漸く解決し得る機會に出會したやうに思へることが、何となしにうれしくて想像が想像を産んでゐた。

——トラピスト修道院のやうなことは、誰れでもする。地面と、資本と、隠逃的氣分を持ちさへすれば誰れにでも出来る。凡ての百姓は強ひられたる修道僧である。新しい産業革命に對して、營利を離れ、生活苦を離れ、精進の心を以つて自治工場を作ることが困難なことである。市井に隠れて猶、修道僧の心持を忘れざること、それが大切なのである。大工業文明に對する眞正の解決は機械的生産を

如何にして、愛と光明によつて包容するかと云ふことである。それには唯一つヘルンフットの精神——労働と祈禱の一致を機械工場に於て發見するより外に途は無い。……そして今歐洲のキリスト教が解き得ない謎を、我等の一團が解きつゝめる……こんなにか考へてゐる中に新見はうとくとしつてゐた。

その時ガラリと入口の硝子戸が開いてどや／＼と數人のものが這入つて來た。其の響きに新見は眼が醒めた。見れば淺田と高井の二人である。二人は物もよう云はない位に疲れてゐる。

『えらい遅かつたね——どうしたの？』  
と新見が尋ねると、

『古い車を借りて行つたもんやから、魚崎まで歸つて來た時に轍の鐵輪がはづれて了つてどうにもかうにもならないので、繩屑を拾つてそれを縛つたのは善いが十間程行くと、またそれがはち切れる。また繩屑を拾つては縛りつけて曳く、その中に日は暮れて了う。もう燒灰になつて、鐵輪の脱けた儘引張つて來たもんですから、こんなに遅くなりました。』

淺田も高井も、泥々に塵埃にまみれ、疲労の爲めに顔色が青ざめてゐる。

『モートルは此處へ引張つて來たの？』

『いや、もう工場の方へ、すぐ入れときました。中古やけど、えらい善い具合やさうな。新とあまり、變れしまへんわ』

新見は二人に感謝した。二人は新見に元氣附けられて洗湯に急いだ。

新見は出て行く二人の後姿を見守つて、自治工場を出發する旺盛なる精神を見て喜んだ。大阪から神戸まで汽車便で運べば、こんな苦勞をしなくとも善いのだが、彼等は算盤を置いて見て、野田から梅田までの仲仕賃と、梅田から神戸驛までの運賃と、神戸驛から、日暮通の工場までの仲仕賃を計算して、どう考へてみても五圓以上かゝるし、日數に於ては全く幾日かゝるか計算がたゝないのみならず、近頃のやうに好景氣なときには、モートル一つ位は運送屋も面倒臭がるから、失業してこちらは遊んで居る身なり、五圓も儲かるなら荷車を借りて西野田まで歩いて引張つて來ようと二人が云ふものだから、無理だとは考へたが、行つて貰つたのであつた。

新見は今時の青年には珍らしい、有難い心を持つ人々だと思つたので、感謝して、彼等を送つたのであつた。

今彼等が、道の悪い阪神街道を鐵輪の無い車で十里の道をモートル一つ附けて歸つたと聞いてその意氣に感激せざるを得なかつた。

新見はすぐ、北本町の二疊敷に歸つて床に這入つたが、工場の將來、青年達の持場などに就て考へると、暫くの間ねむることが出来なかつた。

## 十五

その後喜恵子の眼は一層悪くなつた。夜はうづいて睡られなかつた。  
『どうなつてゐるか見て下さい』

と喜恵子が云ふものだから、榮一は右の臉を開いて見た。それは全く驚きの種であつた。そこには白玉も黒玉もなし、血管が一面に膨れ上つて、石塊を眼窩の中に詰めてあるやうなものに變つてゐた。

「あの美しい眼球の持主が——今こんな癌種のやうな眼の持主にならうとは思はなかつた」と、今更ながら彼が悔んだところで仕方がなかつた。

或部分は眼球から血管が飛び出して、房の形をして實に醜いものであつた。

榮一は喜恵子の爲めにも、そして自分の爲めにも悲しんだ。喜恵子は神の爲めにその美しき一眼を捧げたとは云へ、それは喜恵子に取つては悲しむ可きことであるに違ひないのだ。

恰度その日は彼が大阪の女子神學校に教へに行く日であつたので、彼は喜恵子を大阪醫科大學に伴つて行くことにした。そして二人で一緒に貧民窟を出た。無口な喜恵子は彼女の父と同じやうに苦痛に就いて少しも訴へなかつた。その上、大學の診断を受けるにも一人で行くと言張した。阪神電車の出入橋で別れて喜恵子はひとりで大學病院に行き、榮一は梅田から寶塚電車に乗換えて、十三の神學校に教へに行つた。

その晩、彼女は歸つて來なかつた。そして、端書に走り書きで、「直に入院いたしました。四五日経過を見て、宮下博士が手術して下さるさうです、御安心下さい」と云ふて來た。彼は翌朝無い金を工夫して、喜恵子のところに持つて行つた。

中ノ島の堂島川に面して、大まな病院が建つてゐる。それは實に廣いもので彼は喜恵子の室を探すに幾人かの看護婦に聞かねばならなかつた。喜恵子の室は四五十人も一緒に寝て居る雜居房であつた。多くは重病患者で、喜恵子のやうに坐つて居れるものは、まだ善い方であつた。

喜恵子は周囲の患者の様子を一々彼に物語つた。それは新見の同情をひくものばかりであつた。

『——私ばかりが貧乏かと思つてゐると、此處に居るひとは、みな、私より貧乏な人ばかりですの、大抵は大學の研究材料になつて無料で入院させて貰つてゐるひとが多いのです、無理は云へません

わ

新見はそれに對して答へる言葉さへ知らなかつた。貧乏に嫁いで来た喜恵子だから、それ位の覺悟はあるにしても、今日が日まで、一つの樂しみさへも與へ得ないで、榮一の爲めに犧牲となつて、その一眼を失つても、病院の温き寢床さへ與へ得ない、彼自らの不甲斐なさをつくづく思ふた。その上、彼は喜恵子が手術を受ける前の日から岡山縣の巡回傳道を約束してゐるのであつた。それに就て喜恵子は心細さうにも云ふた。然し、中止してくれとは云はなかつた。

新見が岡山の田舎傳道に廻つてゐる中に、喜恵子は大阪から電報を打つて来た。

「ケイクワヨシアスマタシユヂツスル」

彼は凡てを神に委ねた。一週間目に神戸に歸ると、喜恵子も歸つて来てゐた。そして奇蹟的にその眼が美しく開いてゐた。たゞよくみると、瞳孔の上が擦ガラスのやうによつてゐた。然し、他は少しも元と變らなかつた。

二人は手を握つて喜び且感謝した。

## 十六

榮一のすぐの弟の益則がいよく吉田家に養子に貰はれて總領娘と結婚すると大阪から云ふて来たのは、喜恵子の父の葬式があつて間もないことであつた。

「親元には阿波の林の叔父さんにお談して、あなたは單に親戚として御出席下さい」とえらい妙な挨拶があつた。

「婚禮は年の中に、吉日を撰んで致したいと思ひます」とも云ふて来た。

「どうせブルジョアのする仕事だ、貧乏傳道師の構つておれる仕事ではない」と榮一は思つたものだから、黙つて捨てゝ置いた。

晩秋の月が、どす黒い貧民窟の屋根を照らすやうになつて、大阪に行つてゐたブラシユ見習の一行は歸つて来た。それでまたイエス團は賑かになつた。今は昔と異つて汚水の流である生田川の川下、その名も悲しい日暮橋を渡ると、そこいら一面は貧民長屋で埋つてゐる。その真中に新見の新しい自治工場が設けられてある。それでも大通は數十軒の古物屋で埋つてゐるので比較的整ふてゐる。橋から二丁程東に行つて、左側にライオン薬局といふ小さな藥屋がある。その路次を山手に這入ると、二軒目の家が新見の夢みてゐた工場である。

彼はメリヤス屋さんからその権利を買収すると共に土臺から修理し直し、家を起し、腐つた柱を取り換え内側の壁を白く外側を黒く塗り、窓を大きく明けたので、ぼろ／＼の納屋が工場らしくなつた。富山から助けに来てくれた保田泰治君は濱松のオルガン會社で長く「年期」に居つた關係で色々機械のことに詳しく、機械の据付や電氣の取付の世話を焼いてくれた。新見は室の配置、衛生設備、便所の装置、食堂の具合などに氣を揉んだ。元來が工場の爲めに出来て居らぬものだから甘いこと行かない。

然し、塵埃の多い室は密閉して、動力仕掛で烟筒を通じて外側に塵埃を排除する工夫にした。

保田は實に奇用な男で色々新しい機械などに就て考究してくれた。然し電氣をひくと云ふ段になつてなか／＼市の電氣局が應じてくれない。電力が足りないから應じられないとも云ふし、景氣が善いので、メートルがみな出て了つて、貸出のメートルが無いから電力を供給するわけに行かぬとも云ふ。

これには追がの新見も弱つて了つた。それで大阪から歸つて來た連中と保田と内のものと加へて十一名が困難を切り開いてくれと一晚祈り會を開いた。

不思議にも翌日市役所から電氣工が外線の取り付けに來てくれた。それには淺田が全く感心して

了つた。

「賄路をやつても、なか／＼附けてくれないメートルを、祈り會を開くと、ちやんと附けに來ると云

ふのぢやから、うちの先生には神様が附いとるとみえるなア——」

みんな勇み立つて各方面の準備をした。

引割は堅鋸の経験のある保田が受持つこととなつた、淺田は堅穴を、高井は横穴を、本山は一番のバフをそして竹田は總監督となり、仕上のバフが足らぬ時にはその方を手傳ふことになつた。

然し、それだけで職工がまだ足りない。塵埃の最も多い「型すり」の場所にどうしても三人と、はつりの場所が少なくも二人足らなかつた。「型」と「はつり」の部分は最も熟練を要する部分であるから、大阪から職人をつれてくることにした。引割りの部分も熟練職工でなくちやならぬと云ふのであつたが、職工の拂底で誰一人來てやらうと云ふものがなかつた。それで已むを得ず保田に依頼するこ

とになつた。

ブラシユ工場のモートルが、實際に廻り出したのは、大正六年十一月十五日からであつた。然しその日に運轉した機械は、堅鋸と二臺の型すり機械とだけであつた。淺田の堅穴はそれより二日遅れた。匆りの官崎が來たのは、その一週間後であつた。

二階の毛植工場には若い娘も十四五人練習に來た。練習の間でも日給をつけたものだから、仕事は綺麗であるし、先に見込があると云ふので、喜んでくる娘達もあつた。

新見はその當時漸く筆を探つても相當の収入があるやうになつたので、毎週三日間教へて廻る暇に急がしく執筆した。書齋と云ふものがない彼は、酒屋の向側の喧しいイエス團の二階で、朝早く、夕遅く執筆をした。そして晝の間は工場のことと騙け廻つた。

一つの工場の組織と云ふものは、そんなに簡單に出来るものではなかつた。機械場が揃ふたかと思つと、刃りが揃はず、刃りが揃へば毛植えが揃はず、毛植えの手順が出来たかと思へば、引割の熟練工がないと云ふ。引割の熟練工があると云へば仕上げる職人が無い。一つの齒磨揚子一本を作るに、引割りから、刃りに行き、そこから型の方に廻り鑿穴から、横穴に廻り、バブにかゝりそれが済むと毛植に出し、毛植から歸つてくると、撰別があり刻印に行き再びバブにかゝり仕上に廻り、製品として倉庫に行くのであるが、その間に十八九ヶ所の手を運すのである。

もし一ヶ所に失敗があると、殆ど全部の失敗になり、一ヶ所が休むと、次の仕事に差障を來すのである。

竹田の最初の見當では六ヶ月も練習すれば大抵穴明けも出来、引割りも熟練することが出来ると思ふ。

ふのであつたけれども、愈々かゝつて見ると、なか／＼そんな簡單なわけにゆかぬことを發見した。

引割りの如き、少なくとも三年間位の熟練を要し、鑿穴の如きも少なくて二年の訓練が必要であると云ふことであつた。然し、そんなことをしてゐては、とても青年達の生活難を救ふことは出来ないのみならず、会社の資本金の利子を支拂つてゐるだけで打倒れて了はねばならない。それに善く聞いて見ると、ブラシユ界の景氣の善いのは、全くロンドンの製造家が製作を中止してゐるからで、戦争が休止して、再びロンドンの市場が開かれるやうなことがあれば、日本のブラシユ界はどうなることかわからないと云ふことであつた。

榮一が最初ブラシユ製造にかゝる時には日用必需品でもあり、永久性を帯びた仕事だからと云ふので始めたのであつたが、その方面の調査をすると共に、何百軒とある大阪の製造家の中で、眞に永久性のある製造家と云ふのは極く少數であると云ふことを發見した。と云ふのは、その多くは輸出向きものを製造してゐるのであつて、全く戦時景氣に吊られて動いてゐるのだと云ふことを知つた。内地向きの齒ブラシユの多くは東京で製造せられてゐて、大阪では「ローヤル」とか「帝國」とか「關西」とか云ふ二三の大きな工場のみが少しばかり内地向きのものを製造してゐると云ふことであつた。その中でも、ローヤルはイギリス人の直營で、インビリアルと云ふのも西洋人の直營だと云ふ



ことを聞いた。

ブラシユを製造する事になつて、商品と云ふものが、世界的のものであることをつくづく思ふのであつた。

ブラシユの材料になる牛骨は殆んど凡てが濠州産であつた。また、毛はシベリアと支那の豚の毛であつた。凡て外國の材料を神戸に輸入して、それを更に大阪に輸送しそこで分割つて、それに加工して、出来上つた製品をロンドンに送るのであつた。だから、日本はたゞ勞力と技能を提供するに止るのであつて、爲替の相場や、材料の高低で利益にも非常に變動があつた。

新見は材料を買ふ爲めに初めて、神戸の第二突堤に山の如く積み上げられた牛骨を驗べに行つた。そして、嘗て彼がプリンストン大學の古生物學の教室でドクトル・ファから習つた「骨格學」の智識が今頃になつて役立つことを覺えた。裂けた袋から二つ三つの大股骨を拾ひ上げて見ると、濠州産のものは、内地産の骨と較べて大きくあれば部も厚い。そして骨の凹みが内地産のやうに甚しくなくすつきりしてゐる。

それから新見は土地が動物に及ぼす影響などまでも考へてみた。日本の製品が外國の商品に劣るのは必しも日本人が悪いばかりでなく、日本に在る各種の原料にもよると彼は考へた。

一々外國から原料を仕入れて、それに加工して、更に逆輸出すると云ふのは如何にも景氣の善いやうに聞こえるけれども、英國と違つて、自國の殖民地から輸入するのと違つて、みな他國から輸入するのだから、いざと云ふ場合には全く絶望的なものであると云ふことは、なんば、素人の新見でもすぐ氣が附いた。

新見は或時は屠物商から、荷上げの時に海へ落ちた鹽漬けの牛骨を買ふた。或時は大きな商店から百斤十二圓の牛骨を千二百圓分も買ひ取つたこともあつた。然し原料を仕入れる度毎に運轉資金の缺乏を憂慮した。

毛植に使ふ豚毛にも困つた。運轉資金が足らないのでわざ／＼大阪の南區西濱の鈴鹿商店まで隔日に買ひに行くのであつたが、僅か二貫三貫が何百圓とするものだから、とても粗骨にすることが出来なかつた。毛植に出すにしても、こんな高價なものであるから、三本四本と少しづつ盗まれても、賃銀以上の損害を受ける。

で、慌て、工場を二階を廣くし、毛植女工を養成しようとして云ふ段取りとなつた。廣告を出すと、すぐ三十五六人の娘やおかみさん達が集つて來た。然しその割に貧民窟の長屋の人

達は少なかつた。多くは貧民窟外の労働者の家庭の主婦や娘達であつた。

愈々毛植えを教授する段になつても、貧民窟の娘達は成績が悪く、仕事が粗雑であつた。それに反し、外側の娘達は覚えも早く、仕事も立派であつた。

持つて歸つて仕事をさせてくると、貧民窟の長屋の娘達はブラシユの毛を眞黒にしてつて、一度洗濯し消毒し直さなければならぬ程穢して來た。

つまり、貧民窟の人達に向く内職はブラシユの毛植のやうな叮嚀で、清潔な仕事は向かないと云ふことがわかつた。そこにまた新見の目論見がはづれてゐた。

實際、新川から來た見習生の多くは一週間とは續かなかつた。

「こんな心氣臭い仕事、うちには出來ん」と云ふて歸つて行つて了つた。

毛植は内職としては最も利益の多いものであつた。熟練したものは一日二圓三圓と取るものも少なくなかつた。それで新見はそれを新川のおかみさんたちに熟練させようとしたが、それが全く此地に向かないと云ふことを發見して失望した。

新川の人にはどんな内職が向くかと調べてみた。

状態貼りが向くかと思つて當つてみた。然し状態貼りの問屋は、

「新川なら御免蒙ります。あしこに出しますと白い紙が鼠色になつて歸つてきますし、鼠色の紙を出すすとくちやぐになつて歸つて來ますから、原料と工賃と二重の損になります。あしこには状態貼は向きませぬ」

と云ふて居る。

羽織の紐の問屋も同じことを云ふ。經木眞田も同じことを云ふ。たゞ麻糸つなぎと、燐寸箱貼りは黙つて居る。

新川はいよく救はれなう。

七

工場經營の第一ヶ月は四百圓の缺損であつた。

榮一はその缺損を凡て自分の責任として、原稿料と給料を全部捧げた。然しまだそれでも足らなかつた。設備費に一萬一千圓から入れて了つたものだからどうしても甘いこと行く道理がなかつた。彼は月給と原稿料で賃銀の支拂は濟ませたが、電力代や、その他の諸拂ひに榮一は困つて了つてまた島上町時代の二の舞を演じ始めた。

彼は裏の畑野さんに頼んで二百圓借りて来た。顔は癩病で全くくづれて了つてゐる乞食上りの高利貸に彼は十数回お辭儀して月百圓に付四圓の高利で二百圓借りた。それでも新見は地獄の門を通り抜けたより猶感謝して畑野の潜り戸を出た。

十二月は猶會計が苦しかつた。十五日の勘定も、三十一日の勘定も容易ぢやなかつた。遂に彼は株主の池本の紹介で、吾妻通六丁目の米屋から同じく月四朱で四百圓借りて、無事に支拂ひをすませた。損失の最大原因はその不熟練にあつた。第一保田に堅銀を持たせたのが間違ひであつた。何千圓と値打のあるものを、彼は屑物にして了つた。そして淺田の堅穴も高井の横穴も全くものになつて居なかつた。「大正ブラシユ」は賃銀拂ひで倒れねばならぬ運命に願してゐた。

## 十八

最初は出席しないでおかうと思つただけけれども、弟の爲めには何の世話もして居らない不甲斐ない兄だから、せめて結婚式の祝儀だけでも述べてやらなければと可哀相に思ふたので、出席することにきめた。

出席するに就て先方は色々八巻敷い條件を持ち出して来た。やれ着物は羽二重の五つ紋に仙臺平の袴で来て欲しいとか、結納として三十圓だけ包んで持つて来てくれとか、うるさいことを云ふて来た。

吉田家では益則を養子に貰つてくれることを新見家に恩をさせた積りで居るらしい。然し榮一は何にも吉田家に世話にならなくともやつて行けると思ふてゐるものだから、先方から持ち出して来る條件の二々が癩にさわるものばかりであつた。

榮一には少しもわからない贈り物が色々「江戸堀」の吉田家から届いて来た。癩にさわり乍らも表象的な贈物に榮一は一々感心してゐた。紙の中に昆布を包んだり、金蒔繪の重箱の中に小豆が一升這入つてゐたり、贈り物の色の配合や、貧民窟に無い自然色、さては漆器の輝きなどが、榮一には非常に氣に入つた。

「あづき」一升で、嫁婚のやりとりの表現になるなら、之もたしかに美しい習慣だと考へた。然し貧民窟だとこの習慣は意味をなさない。うんと贅澤な生活をしてゐるものが、金蒔繪の重箱の底にあづき一升入れてくるので價值があるのだとも考へてみた。

「何にしても、ブルジョアは暇だ、あづき一升贈り物するのに七十五錢の電車賃を拂つて大阪から神戸まで持つて来る」——

こんなにも考へた。

結婚式の當日——それは丁度十二月十四日の晩であつた——新見は西洋で給仕に出てゐた時のイヴニング・ドレススを持つて歸つてゐたのでそれを着て行くことにした。こいつはニューヨークの貧民窟で四弗で買ふて來たもので、新見にはスツキリ合はないものであつた。然しあまり儀式張つた結婚式にちよつと變則なものも善いと思つたから、それを着込んで出席した。喜恵子は串形の新見家の紋の附いた黒モスの着物で出席した。

結婚式と云ふても、實に淋しいもので、親類と云ふても四五軒しか呼ばないので、出席したものは八疊の間二つ突通して、段通を敷詰めた式場の隅ツこに、ばらつとしか無かつた。先方は當主とその妻りよ、外に娘三人と息子二人、こちらは親方に當る林の老人とその息子の五郎さん、それに榮一夫妻、先方の親族が二軒、明石と云ふ仲介者合計十四五人のものが兩側に居並んだ。

正雄さん（吉田の當主）は林の老人が金持ちであることを非常に氣にしてゐて、持つて居る道具の凡てをそこに展覧した氣味がある。周圍の壁には金屏風を引廻し、茶器から、燭臺から、三々九度の盃に到るまで、吉田家としては善美を盡した積りで居るのである。そして實際、それが金のかゝつ

た善いものであるに違ひはない。

吉田家は古い系統の家では無い。新見家と同じく阿波の吉野川の流域から出た一族で、三代前の主人は新見家から出て居るので、益則が養子になるのも決して縁の無いわけでもなかつた。

然し、正雄さんは大阪商人の水準以上に出無いたゞ金さへ握つて、遊んで居りたいと云ふ流儀の人である。それが新見には氣に入らなかつた。

娘や息子の教育にしても、たゞ家附娘として、籠の鳥のやうに育てゝある。だからどの子も、どの子もみんな青瓢箪のやうな顔をして、頸の淋巴線を脹れ上らせてゐる。殊に益則と縁組の成立したと云ふ娘は、去年高等女學校を卒業したばかりの小娘で、可哀相なほど瘦せた骨格の持ち主である。既に肺先カタルの宣告を醫者から受けてゐるのであつた。

益則としては、吉田の養子になりたかつたことは神戸の兄哥の宅を訪れる度に得意になつてそのことを話してゐたことを以つても知ることが出来る。實際、無一文の丁稚を百萬長者の婿にすると云ふことは吉田家としては大奮發であつたに違ひない。また益則にしちや、家柄では吉田に較べて劣つてゐないにしても、昨日まで丁稚してゐたものが今日は江戸堀切つての大富豪の若旦那と呼ばれることはさう氣持の悪いことでもなからう。

益則は小學校でも善く出来た方であつた。いつも級が一番か二番を争ふてゐた。そして、大阪に来て丁稚に出てゐる暇にも補習學校に出て、一生懸命に勉強したので、頭も相當に出来、取引にかけては人並以上に優れてゐたので、今日までに幼いながら貯金が一萬圓以上に達したと云はれてゐた。吉田家の見込んだのはこの一萬圓であつた。

「二十二歳にして一萬圓も貯める能力を持つてゐるものなら、死ぬまでには幾千萬圓にするかも知れない。一つこいつをうちに貰ふ」と云ふのが吉田家が益則を養子にする動機であつた。

そんなことをよく知つてゐる榮一としてはこの婚禮を進んで祝福するわけにはならなかつた。それは彼が喜恵子と婚禮した時のやうなあつさりしたものぢやなかつた。慾も這入つて居れば、因襲もかみ附いてゐるのであつた。然し新見はそれに反對する元氣は持たなかつた。それは益則の方であまり進み過ぎてゐたからである。

娘さんのお美代さんが出て来た。あまり澤山着てゐるので坐ることが出来ない。女中が椅子を持つて来た。細目に心持すけ口のさう美しい嫁さんでも無い。然し人形としては少し賢過ぎる顔をしてゐる。角隠しの下から見える銀の簪の短冊形の飾りがヒラ／＼揺れる。着物も帯も何百圓とかけたものだらうが、僅か十四五人の内輪の者だけに見せるには惜しいやうな氣がする。唇の紅が濃過ぎ

る。帯の幅が廣過ぎる。花嫁を早く儀式から解放してやりたいと新見は思ふた。

三々九度が始まつた。嫁さんは椅子からおりて坐つた。何處から雇ふて来たか雇女藝者がお酌をする。そしてお酌が一順すむと、襖の陰で、謡の調子よろしく

「高砂や」

この浦船に

帆をあげて

波もろともに

出で潮の……」

が始まる。黒地に唐草模様を畫いた燭臺の灯が靜かに揺れる。

嫁さんは伏目勝ちでその周圍に何が起つてゐるかわからないらしい。

式はあつさりした氣持ちの善いものであつた。その變り別に感激もなければ、下品でもなかつた。榮一は洋服の儘坐つてゐるので膝から下がしびれてもじ／＼した。益則は馬鹿に眞面目な顔をしてゐるし、お嫁さんは「結婚は進まない」と云ふやうな顔をしてゐる。

榮一は二人の仲がうまいこと行けば善いがと案じた。

式後魚新の新座敷で饗應があつた。それは榮一が生れて初めて見る日本式の御馳走であつた。あちり澤山御馳走が並べられたので何がなにやらわからなかつた。貧乏人は、その日の米代にも困つてゐるのに有るところには有り餘るほどあるのだ」と榮一は心の中で云ふてみた。然し此處でも餘興は道化芝居で、藝者の這入らない實にあつさりしたものであつた。それだけは正雄さんも趣味の高い人だと感心して、その晩は早く神戸に歸つた。

## 十九

大正七年の正月、神戸の貧民窟では今迄に無い好景氣の正月を迎へた。途の兩側にはハツタリ賭博の臺が七八十ズラリと並んだ。一群に四五十人づゝ蠅がたかるやうにして夜の明けぬ中からうち始め

る。新見がいつもするやうに、更改と新生の讚美歌を唱つて、貧民窟の路次から路次を廻つた時に、博徒の連中は蔭口をきいた。

「また、うるさい奴が來やがつた——」

「アーメン、ソーメン、ヒヤゾーメン！」

「南無大師遍照金剛——どうぞ賭博に勝つやうに！」

或者は大きな聲で

「サア、はつた！ はつた！」と突鳴つた。

角々の酒屋も、まだ元日氣分にはならないで、盛んに賣出しをしてゐた。裏の路次には茶碗の飛ぶ音や、膳をなげつける音がきこえた。木賃宿の入口には、酔拂ひがあしこにもごろ／＼こちらにもごろ／＼倒れてゐた。

新見が北木町六丁目の角に來た時に、まだ暗いにもかゝわらず、二三百人のものが黒山のやうになつて立つてゐた。彼はそつと何事が起つたかと、群衆の一人に聞いた。その答は簡單であつた「人殺しがあつたんですよ」

「何處ですか？」

「あしこのゑびす屋です、今朝の五時にあつたのです」と

さう云つて、その男は行つて了つた。

その側に新見の知つてゐる池田のおかみさんが立つてゐたので、彼は聞いてみた。

「どうしたんですか？」

「サアもし、少しおみきが過ぎたんださうです、なんでも、兄弟同志が御酒を呑んでゐる中にいさかひを始めたんだつしやろかいな……あれ見なはれ、途の上が血で一杯になつてゐまつしやろ！」

さう云ふて、おかみさんは、路上の凹みに溢れてゐる多量の血を指した。

「またか？」

と榮一は常例のやうになつてゐる新年の殺人を悲しんだ。

そして靜かに祈りつゝ引上げた。歸る途中吾妻通五丁目の四辻にくると、二三百人の人が早やお祭りのやうに大騒ぎをしてハツタリ賭博をしてゐた。その中でも、「若」と云ふ青白い顔をした十六七歳にしかならぬ青年の聲が最も相高いので、榮一は淋しい心持ちになつて、家に歸つた。歸る途中首をあげて北山を見ると、六甲の峻峰が神戸の街を監視するやうに如何にも、うらゝかな姿で立つてゐる。山に魂があるなら、この貧民窟の墮落を何と見るであらう」と、つくづく考へ乍らイエス團に歸り、みんなと一緒に雑煮を食ふた。

それから、慣例のやうになつてゐる湊川公園の路傍説教にみんなで一緒に行つた。

夕方、貧民窟に歸つてくると、街上の賭博は朝方より一層盛んである。幾千人か數へられないほどの人ばかりで、まるで廣東の公設賭場に行つたやうな光景であつた。かう澤山出ると三人や五人の警官

では何とも整理出来ないものと見えて、私服巡査が一ヶ所の「盆」を襲ふても、他の「盆」は平氣の平左でやつてゐる。騎馬巡査が通る。幾千人のものがその馬を追つ立てる。馬が逃げるやうに駆け出すと、數千人のものが聲を立て、

「萬歳！」

と叫ぶ。

側に見て居た新見は「國民の士氣が廢頽すると云ふのはこんなことを云ふのだな、これなら、天使がソドム、ゴモラに来ててもその天使を虐待したと云ふことはあたりまへだ」と考へた。

新見は新川の天使組として、賭博してゐるものに對して説教することに決心した。

彼は晝の疲れた喉を絞つて、讚美歌を唱つた。彼の立つてゐるところは阪神國道と南北の大通の結ぶ四辻であつた。そこに最も人だかりが多かつた。それで彼は、電信柱を背にして、狂人のやうに歌ひ出した。群衆はドツと新見のグルリに集つて来る。

辻の「盆」は空になつた。凡ての群衆がそこを去つた。盆を守つてゐる男はブツ／＼云ひ出した。わざと新見に聞こゑよがしに

「商賣にならんがいな——」

「正月に儲けさして貰はな、一年中に儲ける時が無いがな——」

彼等は平素多少でも新見に世話になつてゐるので、敢て反抗はしなかつた。それは寧ろ新見に取つては意外であつた。彼は最初から彼等が擲つてくると思ふたのであつた。然し、擲られても彼等の良心に響くまで叫ばうと云ふのが彼の本意であつた。群衆が賭場を捨てたのは痛快であつた。

一つの盆の群衆が賭博場を捨てると、その次の群衆もそこを捨てた。第三の群衆もそこを捨てた。第四のものは半分位になつた。「盆」の胴元はみな聯合してこぼし始めた。

「アーメン！ソーメン！」

を連呼するものがある。群衆が哄笑した。然し新見は平氣で歌つた。歌の力の強いことを新見は今更の如く感じた。

次から次と、新見は歌つた。十五分間もつゞけて歌つたと思つたが、その時に群衆の中へ裸馬を追ひ込んで来たものがあつた。それには新見も驚いて了つた。然し彼は馬鹿のやうになつて、歌ひつゞけた。馬がぐる／＼廻る。新見は調子を狂はさないで歌つた——

われは誇らん たゞ十字架を

あまついこひに 入る時まで

群衆は、馬が怖いので四散した。然し、この次に何が起るかと思つてヂツと立つて見てゐる。その混雑が他の盆にまで波及して、十二三の盆にたかつてゐた群衆が一度に新見を中心に集つて了つた。博徒の連中でも、比較的やさしい男が出て来た。馬を群衆の中に追ひ廻つてゐる男を捕へた。

「よせよ、危ないから、おまへがそんなにするので他の組までやめになつたぢやないか！ よせよ、よせよ！」

さう云はれて、馬を追ふてゐた男が呆氣た顔をして、馬と共に濱に下つて行つた。

その時衆一は十數秒の演説をした。

「賭博をやめなさい！ 好景氣の酒に酔ふて魂のたがをはづすことは、神の罰を招く近道です。」そこまで近い者に云ひ、また遠い「盆」にまで聞こえるやうに號令をかけるやうな口調で、

「賭博をやめ！ 支那人のやうに國が亡びるぞ！」

そして直にまた歌ひ出した。その時、彼につか／＼と近づいて、彼の胸倉を取つたものがある。群衆は喧嘩だと思つたか、すぐ近寄つて来た。胸倉を取られながら、彼は歌ひ續けた。

われは誇らん たゞ十字架を

あまついこひに 入るときまで



破戸漢は大きな聲で、

「歌をよせッて！ 歌を！」

榮一は強情にも平氣で續けた。

「八釜敷うて、商買にならんが！」

あまり榮一が平氣で歌ふので、ゴロツキは榮一の口に手をあてた。群衆はそれを見てドツと笑つた。榮一はその手をもぎ放して、猶ひ續けんと藻掻いてゐた。

そこへ、宇野、竹田、淺田、高井の連中がどや／＼と群衆を押のけて這入つて來た。そして、圓陣を作つて。歌ひ出した。

われは誇らん たゞ十字架を

あまついこひに 入るときまで

ゴロツキは宇野の顔を見て、榮一の胸倉を掴へてゐた手を放した。

「この油蟲にかゝつたら、かなわんワ」

さう云つてこそ／＼と立ち去つた。

群衆はその男が圓陣を立ち去る後姿を見てまたドツと哄笑した。

群衆が靜まると共に、榮一は土べたに跪いて、新川の爲めに祈つた。  
日はとつぷり暮れて、街の電燈は明々／＼とついてゐる。祈から立ち上つて、彼等がイエス團に引きあがる時には七八十の盆にはもう殆んど人は居らなかつた。

二十

「おまへ、わしの嫁さんになつてくれんか？ な、郁ちゃん」

さう云ふて岡部は、田中郁子と云ふ今年十六の小娘の頸に抱き附いて行つた。

「しなはん、岡部さん、しなはん、よ、よ、」

郁子は齒ブラシの毛植の糸を左手に持つた儘、右手で岡部の腕を撈ぎ取つた。

「困つたなア、わしや嫁さんがひとり欲しゆうて困つとるんや、誰れかわしの嫁さんになつてくれんか  
なア——おまへなつてくれるか——さう云ふて岡部は郁子の右側に坐つてゐたおきみさんを

おきみさんは今年十三になる身體の小さい可愛らしい娘である。

岡部は大阪から「劔り」に雇れて來てゐる、工場では最年長者で、放蕩の爲めに身を持ちぐづし大

阪から神戸に流れて来た男である。彼が這入ることに就ては新見もあまりすまなかつたが、竹田の云ふ儘に工場に入れたのであつた。岡部も一週間位は憤しんでゐた。然しすぐ地金が出て、十日も立たぬ中に色々女工と問題を起し始めた。

おきみさんを抱いた儘、岡部は懐の財布から、札を出して、娘等に見せつけた。

『それみせて！』

年増のお政が手を出して、岡部の手からそれを奪ひ取つた。

『うちいやよ、岡部さん、はなしてんかいな』

おきみは泣くやうに頼んだ。

そこに居た十三人の女工はお政を中心にして、その中に覗き込んだ。お政は「これうちにおくれよ！」と云ふて懐の中に入れて了つた。

「まだあるね、みせてやろか？」

岡部はもう一枚の懐から出した、それをお政はひつたくつた。大勢の者がまた集つて来た。

『これも貰つておくぜ！』

さう云ふて、お政はまたそれを懐に捻ぢ込んだ。

『それ取られてたまるもんか？』

おきみを投げ出すやうにして、岡部はお政に飛び付いて行つた。お政は皮むけた綺量の善い年増女である。岡部はお政の懐中に鐵棒のやうな腕を突き込んだ。お政は奪つたものを取返されまいと俯伏に倒れる。岡部はそれを馬乗になつて、もぎ取らうとする。大勢のものが笑ふ。下のものがどやどやと上つてくる。竹田が岡部に注意する。岡部はその儘下において、殊勝に刎り臺の前に座る。

二階のお政はまた懐から、おきみを取り出して、大勢の娘等とそれを見てゐる。娘等の中の一人は「そんな一枚欲しいわ」と云ふてゐるものも有つた。

竹田は再び二階に上つて、みんなに云ふて聞かせた。みんな黙つてそれを聞いた。

後に新見が竹田からこの話を聞かされた時に社會の改造が如何に困難であるかを新見はつくづく考へたのであつた。

祇園の下には薄霧がかゝり、街は塵の一筋だに落ちて居ないほどに掃き潔められてゐた。凡ての家

が申合せたやうに打水をしてをる。道に敷かれた礫の膚がうたれた水で美しく洗はれその一つ一つが配石盤の磨き石のやうに光つて見える。水は腰板までに打たれてゐるが、そこは船板の幾百年か前に海から引上げられたかと思はれるほど錆びたもので處々牡蛎が喰付いたりなどしてゐる。或家の入口に小笹と青銅の手洗鉢と金屏風を美しく案配し、或處では檜と楓と南天を美しく柴の折戸と調和させてある。これらの美しい調和は祇園ならではと思はれるものが澤山ある。

こんな處に限つて、狭くとも、みな敷奇を凝らし、一坪位の地面を掛軸のやうに飾り立ててある。不思議にもその一坪の地積が檜を植え竹を持つて來、梧桐を配置し杉苔を運び、手洗鉢に地衣を喰付けなどしてあると、そこが大森林の一劃であるかのやうに感ぜさせられる。その小さい庭の、その大森林の一劃のやうに感ぜられるところに坐つてゐると、何となしに、人生の寂莫と哀愁と人なつかしさと、二人ではとても居れないやうな感じが起る。これが日本の庭造りの精神か知らないが、日本の庭の幽邃と云ふものの多くは自然から四疊半に追ひ込むやうに出來てゐる。それで火鍵で見るとは丁度善い。そして祇園は最も多分にこの魅力を持つてゐる。

京の祇園の赤い樓門の下には、世界戦争の好景氣をうけて、幾百かの美妓が集められた。そして神戸大阪の成金が此處に關係しないものは稀であつた。別荘造りも面白味が少なく、骨董いぢりもあま

り感心しないと云ふ連中がみなこゝを中心として大亂痴癡を演じた。

る豪傑があると新聞に報ぜられたのも此處の出來事であつた。

『旦那、あの娘はどうでした？』

さう、おとめさんは朝餐の席についた客に尋ねた。おとめさんは顔の青白くて頸の細長い女で米澤に襦子の丸太帯を、丸髷に結つた綺量の善いこの女主人公である。客と云ふのは船成金の「神戸海上」の篠田専務である。

『さうだなア、中位やなア』さう篠田は答へた。

篠田は神戸で遊ぶとわかるものだから、京の祇園の「竹の家」を中心にして、毎週定めて遊びに來て居るのであつた。おとめと云ふのはもと、神戸の中檢の藝者で、篠田とも多少關係のある中であつた古武者である。篠田が京都で遊び出して、殆んど、篠田一人の外、誰れも入れないで、篠田の好きな女を取り持つことを専門にしてゐるのであつた。

篠田は大の初つもの喰ひで、一人の妾に集中しないで、變つた女と關係することが好きで有つた。それをおとめはよく呑み込んでゐた。篠田が土曜の晩から、月曜の晩まで、毎週遊びに來る時には、いつも變つた妓を集めて置くのであつた。その爲めに篠田が浪費してゐた金は毎月三千圓を下らな

つた。京都だけでも、毎月百圓づゝ與へてある妾同様の藝妓が七人あると云ふことだけでも他を推知  
することが出来る。

篠田の遊びは極く下品なもので、猥褻行爲のドン底まで行かなければ氣のすまぬ男で有つた。篠田  
とおとめの會話は恥しいものであつた。

篠田が朝食から立上る頃に二人の若い舞妓が前後して寢床から起きこ來た。それはもう十一時二十  
分も過ぎてゐた。

空は雪模様で、比叡は雲に包まれ東山には霧が薄くかゝつてゐた。

「あんた、いややわ！」

甘へるやうな句調でさう丸顔の舞妓が篠田の顔をみるなり云ふた。

「なんやな？」

篠田はげんな顔をして舞妓の瞳を見詰めた。

「わたしまだ痛いよ——」さう云ふて女將を顧み乍ら云ふた。

「篠田さんてば、昨夜私のお臀をしにゐる位爪りなさるもんやさかい、今朝まだ痛うおまんね、歩かれ  
しまへんがな……」

篠田は葉巻煙草に火をつけながら、

「そら、えらうすまへんなア、そんなにがいにしたつもりやなかつたんやけんどなア」

女將は篠田にお茶をすゝめ、丸顔の舞妓を顧みて、

「昨夜の芝居は面白かつた？」

「旦那が面白くないから歸らう、歸らうつておせきになるもんやさかい、チツとして見て居られまへ  
んでしたわ」

女將は臺所に立ち乍ら

「彌生さん、今日は一日いいのでせう、旦那と一緒に火燵で「トランプ」か「八八」でもしませう  
や、」

そこへ、桃奴と云はれて居る細顔の利口さうな顔をした舞妓が女將と入れ變りに這入つて來た。そ  
して丁寧に、襖のところで兩手をついて篠田にお辭儀をした。

「善く寝られたか？」

「妾はグツスリ寝込んで了つて、今の先まで何も知らないでよく睡らせて頂きました。」

「篠田さん、ねえ、あれ、返して頂戴よ、」

彌生は拗ねるやうに云ふた。

臺所から歸つて来たおとめは長烟管を取り上げて一ふく吸ふた後、

『えらい、今日は御機嫌がお悪いのね』

と云へば床柱に依りかゝつた篠田は味方を得たとばかり、

『なんぢやいな、わしちつとも知らんがいなア』と逆らふ。

彌生は篠田のところにすり寄つて、膝の上に半分體をのしかけ、すぐ懐に手を入れた。

『なにをしよるのや！』

篠田は彌生の右手をしかと握つた。

『痛いわ、篠田はん……わたしいやよ、あれ、私の大事なんだつしやないか！』

『そらどうもすまん！……然しわし知らんぜ！』

篠田が手を放すと、彌生は赤縮緬の長襦袢の袖にくるまつた美しく白い腕を彼の懐から出した。その手には皮製の財布が握られてゐた。

『調べてやる！』

さう云ふて、彌生は篠田の財布を調べ始めた。そこには百圓札が三四十枚折り重ねて入れてある外

に、昨夜、彌生から篠田が懲發した戯畫が這入つてゐた。

『矢張り這入つてゐたわ——妾、もどしてもらひますよ——』

さう云つて、彌生は懐中から錦にもみの赤裏をつけた女持ちの財布を取り出して、叮嚀にそれを入れてゐた。その瞬間、おとめは、ツト頭をつき出して、それを見た。

『それを一寸見せて頂戴！』

さう云ふて、女將は手を延ばして、それを取つた。女將は瞬きもせずに見てゐたが、

『こりや善く出来て居るほんとに……』

さうひとりごとのやうに云ふて、篠田をみて云ふた。

『旦那、うちには素敵なのがあるんですよ、おみせしませうか？』

さう云ふて、おとめは床の間の袋棚から古い浮世繪本を五六冊取り出した。そして叮嚀にそれを篠田の前に置いた。篠田は一目それを見て

『こら、驚いたなア、よく集めたもんだなア』

と驚いてゐる。

彌生は篠田の財布をもとくに曇み、また彼の懐に持つて行く。

『あんまり澤山這入つてゐるので劍呑ですわ……これだけあれば、私は一生樂が出来るんですわね……わたしほんとにお金が欲しいわ』

訴へるやうに自然と出たその聲はほんとに哀調を帯びてゐた。

『そんなに欲しければやるか？』

さう云ふて、篠田はぼんと財布をまた投げ出した。

『こんなにみな貰ふたら、巡査に手を後ろに廻される！ あの百圓札一枚で善いわ……ねえ桃ちゃん！』

彌生は桃奴の顔をみてさう云ふた。

『妾ら、一日宴會に行つても、百圓札の十分の一もくれてやらないは……』

『そんなに欲しいか？』

『ねえ、女将さん、お金の欲しうないひとは誰れもありませんねえ、お金の爲めならこそ、妾ら、こんなところに身を沈ませてゐるのですわねえ……妾ら、篠田さんのやうに、お金持ちで有つたら、祇園のお茶屋のおやまをみな受出してやりますわ……わたしら、金があるにまかせて、女をもつちやそびにする人大嫌ひや……篠田の旦那など、ほんに善い人やけど、あの虎大盡の大將と來たら、そら大變

や、な、桃奴さん、成金を鼻にかけて、随分非道のねえ、

『どうして、知つてゐるのや』

『あなた聞いとつてだつしやろ、あの新聞に出た、虎大盡が

あの時、私は行つとりましたやないか！』

女将は長い烟管の灰皿に刻み煙草を詰めてゐる。

『さうそ、この妓達も、あの晩、出ていたのやな……』

『そら、阿呆らしいなんて、一晚、百圓やるから、裸で踊れて云ふんだつしやろ 妾ら、百圓が欲しいばかりに、踊りましたよ……』

持つて來て居ると云ふことを知つてゐるもんですから、なんでも云ふこと聞きますわ。……そして、あくる日起ると、馬鹿みたやうなものです。わたしらお金の爲めに、ほんとに苦勞しますわ！』

女将のおとめは妙な顔をする。

篠田は一人に百兩づゝ與へた。二人は叮嚀に篠田の前でお辭儀をした。そして直に、竹の家を立ち去つて了つた。出て行く姿をみて、篠田は女将に云ふた。

『肉の塊だと思へばあの美しい妓らも骸骨のやうに見えるなア、おとめさん！ さう云ふて御互に

たッて！

内塊にしか過ぎないんぢやがなア」

午後半日はまた再び彌生や桃奴を呼んで「八八」で送つた。篠田は弱目であつた。晩の五時頃までにはおとめに二百圓以上も巻き上げられてゐた。そこへ、新見榮一がひよつくりと篠田夫人に頼まれて、篠田を訪れてやつて来た。

篠田は平氣であつた。新見も別に變つた氣配もみせなかつた。色々話をした末、新見は、篠田に云つた。

「——兎に角、夫人が心配して、一度一寸歸つて貰はんと困ると云ふことだから、その由を君に傳へておかう」

「ありがたう、僕もかう長く居る積りぢやなかつたんぢやがなア、正月ではあるしなア、暮は少々急がし過ぎたしなア、ちつと保養にと思つてなア、長滞留し過ぎたのや……まア勘忍しておくれ、どうせ僕のやうな俗人は、君のやうな聖人の眞似は出来へんさかい、大目に見てくれ……これでも成金の部類ぢや善い方で、君、こゝいらに遊びに来てゐる連中は、そら、君、非道い輩が居るのぢやぜ、君、活動寫眞にまで妙な寫眞をかけて喜んでゐる連中があるんぢやから仕末に了へんのぢや、君、僕も、明日の朝は歸るわ……おとめを顧みて……今日は何日やつたなア……此處へ來ると氣がくづろい

で新聞さへ見んもんやさかい、日まで忘れて了ふた！」

『十一日です』

おとめは五月蠅奴が來たと云つた調子で少しも新見の顔を見ない。彌生と桃奴は手持不沙汰で臺所にすつこんで了つた。

『新見君、これでもなア、働くときには働くから、許してくれ給へ。』

座が白け渡つたのでおとめは氣をきかして立つて了つた。カルタ札も、お金代用の碁石もそこに散らばつた儘捨てられてある。外は雪がチラ／＼する。

『君は僕をどう思ふか知らんがなア、僕はかう思ふてゐるのや、僕の意見に誤つたところがあれば教へてくれ給へ……それはなア君、世の中に善人と云ふものも無いかわりに、悪人と云ふものは一人もないと云ふことを、僕は特別にそれを感じてゐるのや……』

此の篠田のいゝわけは苦しかつた。

宵から降り出した雪に東山は全く白くなつてゐた。

新見と竹田と浅田の三人はブラッシュ工場の入口に立つて話をしてゐた――

『もう、一萬圓ありますとなア』竹田がさう云ふた。

『どうも融通資金が足りないものだから、安い品物を作りたくとも原料の買入が高いものだから、儲けがどうしても少ないやうです』

細目の浅田が訴へるやうに云つた。

『そんなに云つたつて、僕は金庫ぢやあるまいし、あんまり金、金、云はないで、みんなその日その日が安らかに暮らして行けるならそれで善いことにせうぢやないかね、僕は金儲けの爲めに工場を経営してゐるのではなくて、君等の爲めに始めたのだから、どうにかかうにか切り抜けて行れるなら、それで間に合せやうぢやないかね。』

『ところが間に合せでやつて行けんから困るんですなア、どうしても一つの工場となると、原料も入れば貸銀の支拂もせねばならぬ。そして、品物が相當に寝ることになりますから、融通資金が無くては仕事、出来ませんなア』

浅田は出入口の柱に身を寄せかけながら呟いた。工場は晝の休みで、みな吾妻通のイエス圓まで食事をして行つた。後にまだ岡部だけがひとり残つて、匆つて居る。浅田と竹田が新見に金融を要求し

てゐる聲を聞いて、岡部も、黒の厚司に兵古帯をメぬ、骨粉で瞼毛から眉毛まで眞白にして、工場の奥から出て來た。

『竹田さん、もう、おまへんでー！』

『困つたなア』

さう云ふて、岡部はつうと三人の前を通り抜けて路次の方に消えた。

竹田は浅田の方を見て、

『あの男と宇田川さんとの問題はどうかつたのや？ あの男も氣の多い男やなア、ほんとに』

『さア？――なんでも宇田川さんの方が豪い熱心やつて云ふが、困つたもんやなア』

新見は浅田の方を振り向いて

『さうかね、宇田川さんがそんなに熱心かね、僕は寧ろ、あの男が宇田川さんを誘惑したんかと思ふた。』

『いや、さうではないやうですよ。宇田川さんも随分熱心らしいですよ。あなたは事の起りを御存知ですか？』

『さア、』



「君、知つてるか？ 浅田君」

「あの岡部が宇田川さんの病氣してゐた時に一晩夜寝ずに看護してあげたことか？」

「ウム、それぢや、先生は御存知ですか？」

「いゝえ、」

浅田は竹田に云ふた。

「宇田川さんは結婚すると云ふて居るさうだね」

「もう親元に結婚しても善いか、聞き合せの手紙を書いたとか云ふてゐたぜ……然し結婚しても二人の仲はうまいこと行くまいなア」

「僕もさう思ふがなア……あの男はあれで随分むら氣ぢやからなア、お政の宅にも出入するし、おしげさんのところにも出入はするし勘定々々に女郎買ひに行くし、それで居て、看護婦さんとは一緒にならうと云ふんぢやから、女たらしのやうな事をする男じやとわしは思ふが、竹田君、君はどう思ふて居る？」

「今迄が、今迄ぢやからなアあれで妻君が三遍變つたとわしに云ふて居つたから、浮氣な男であるには相違ない人じや、子供も三人とかあつて、みんな親元に預けてあるとか云ふて居つたが、——それ

にしても助平には違ひないやうだなア……然し浅田君、牛骨が無いと云ふとるが、どんなにする。」

「さア？ また、高分の利子でも借りて、少しでも、ニゴ屋で買ふておくか？……さうしておこや！

それから竹田さん、あのこと先生の耳に入れておかないかんでえ」

「さうやな……」

新見を見て云ひにくさうに竹田は云ふた。

「先生、保田さんですな、どうも酒をのんでは遅く歸つて来る、この近所の香屋で借金の無いところはないと云ふ有様で、折々うちの工場から牛骨を一袋、二袋と夕方に擔ぎ出してはニゴ屋に賣ると云ふ噂ですが、困つたものですか？」

正月の太陽はカン／＼眞上から照らし、南北の路次はまともに光を受けて、誠に温い。心持しめりけのある土べたにはほこりを立てないでよく踏みつけられる爲めに塗つたやうに滑かであつた。工場の向側の多くは古道具屋さんとか工場に出る職丁の住宅である爲めに晝はほんとに静かである。

今しがた、晝飯すませて、歸つて来た職丁連中はこの狭い路次の中で、ベースボールの球投げを始めた。ボールが空気を切つて飛ぶ音がする。球を取り逃がしたものを追かけて走る足音がする。静かな路次が急に騒がしくなつた。

で、三人はみんなと交代にイエス團の狭い食堂の方に出かけて行つた。

工場の経営には不思議な手が加はつてゐると見えて、原料買入の融通資金は不思議なところから出来ることとなつた。それはウキリアムス博士の知人で濠洲のブラッシュ商人が自分が出さうと云ふてくれたことであつた。

その人は若い青年であつたが、ウキリアムス博士と、正月の休みに貧民窟を訪問に来て、新見の仕事と自分の仕事と同じことをしてゐるのを知つたので、一萬圓位の原料を直に送つてくれることとなつた。豚毛も、その人から直接に供給を受けることとなつた。

猶、善いことは、製品の一切をその人が引受けてくれると云ふ約束が出来たことであつた。それは新見に取つても、工場の凡てのものに取つても大きな福音であつた。

二十三

一月も二月も工場はどうにか、かうにか運轉した。保田が折々酔拂つて夜中に工場の窓から忍び込むことや、岡部が宇田川に惚込んで居ることや、大阪から来た職工連は、あまり金廻りが善いので、

朔日と十六日——朔定日の翌日は女郎屋に居續けで、仕事がとかく遅れ勝ちだと云ふことを聞かされたが、不思議に會計も廻つた。勿論、新見は自分の収入を竹田にも誰れにも云はないで、凡て工場の爲めに捧げ高利貸から借りた利子に廻して居た。

然し、みんな悦んで働いてゐた。その證據には小さい工場ながら、ベース・ボールのチームが出来て、喜恵子がもと努めてゐた福音印刷のチームと競技をやるんだと云つて力むで練習してゐることで知れる。

かうしたなかに、イエス團の青年の群の中で、ひとり可愛相なのは山内勝之助であつた。彼はお母さんの勧めに従つて妻を娶つて早く家を持つたものだから、みんなと一緒に大阪に練習に行くことも出来ないで毎日葬禮の花持ちに行つてゐた。然し、それも多くはあぶれ勝ちで、長く葬儀屋に出てゐる定連にいつも株を奪れてゐた。さうかと云ふて、今頃から鐵工所の徒弟に這入る事も出来なかつた。で、母と妻を養ふだけの収入はなく、仲仕するには力が足らず、もと働いて居た燐寸工場などでは何處も「勝」を社会主義者だと云ふて怖がつて使つてくれず、その群十一の時から十何年間と云ふ長い間燐寸の外、仕事についたことはなし。勝之助は他の人々が「好景氣だ〜」と云ふてゐる中に、ひとり淋しく飢饉に出るのであつた。

『チン、カン、チンカン〜』

勝之助は東西屋が持つて居るやうな鐘を繁く鳴らして、裏通を撰つて歩いた。

最初の日はあまり馬鹿らしくて、自分に笑へて來たり、悲しくなつたりして仕方が無かつた。一圓五十錢の堅飴を臺の附いた盥の中に入れ、蓋に鉤を打付けそれを肩にのせて、子供の居るやうなところを目がけて賣つて廻るのである。彼は今迄、子供など云ふものにあまり趣味がなかつたが、飴賣りを始めると子供と云ふものが存外澤山世界に産れて居ることに氣がついたのである。賣つて廻るにしても、新川の外の飴賣りのやうに、善い聲で――

いとさん ぼんさん

一寸と おいで

深い話が あるわいな

私の あめん棒

買うてんか

五厘のお錢が ないかいな

こんな面白いおかしな歌を唱つて賣ることは勿論出來ないし、豊年屋の眞似はどんなことがあつても出來ない。

いつもポケットには、アカギ叢書が一冊這入つて居て、肩から荷をおろす時には、イブセンの『人形の家』が出てくるか『奈良朝文化の研究』が出てくるか、何かしら研究的なものが出て來ないことは無い。路傍の石の上に、腰をかけては、奈良朝文化を溝側の小石の中に畫いてみたり、北歐の義人の夢をみたりするのである。

これではとても飴が賣れる道理は無い。だが、遊んだ日が長く續いたので質屋に持つて行くだけのものは、質屋に持つて行き、借りられるところだけは借り、もう食ひ詰つて、たゞ荷と一圓五十錢の飴を買ふだけは、兵古帯を質に入れて漸く作つたのであつた。

あまり歩くので、足が棒のやうになり、肩が凝つて身體が自然『く』の字形になる。頭からはじりじりお日様が照り附ける。ラムネの一本も買ふて呑みたいが、朝からまだ二十四錢して儲けて居らぬと思ふと、何だか一本六錢のラムネが飲む氣にはならない。水道の水でもと思ふて、歩いて行く中に共同活栓のあるところを見出さうとするが、そんな時に限つて水道が見付からない。燒氣氣味になつ

て、荷も何にもかも、溝の中へ叩き込み、大きな泥棒になつてやらうかとも思ふ。

米は段々上る。お米が一升五十三錢だと云ふて居る。仕舞ひには、貧棒人はどんなになることだらうかと考へる。

「めざしか干鰯のやうに、干し殺されて了ふのかも知れぬ。その辯成金共は、一日に幾萬圓儲けたとか、幾千圓儲けたとか、毎日新聞に書いて居るが、自分等には少しもそんな運が向いて来ない。」

「俺は、小さい時から、覺えたマツチ會社の仕事の外は、何にも知らないし、マツチ會社では、何處も使つてくれ無いし、外に孰練工になつて行ける口はなし、鐵工所に行つても、少し年期には大き過ぎると云ふし、この好景氣に自分だけが落武者とされて、親子三人が貧に泣かねばならぬと云ふのは、あまりに、不甲斐ない話だが、親と妹を見捨てるなら、何處かで善い口も探し出すが、母親を見捨てるわけにも行か無いし、葬式人夫になつて了ふだけの勇氣はなし——それでも、一ヶ月に五遍や六遍は「花」を昇いで、春日野の墓地まで行くが、まだどうもそこまで落ちぶれて了ふ勇氣がな

「人形の家」を讀んで居ても、こんなことが頭に浮んで来て、仕方が無い。

餘は賣らなければならぬ。然し勝の風體があまりに貧相である爲めか、子供は彼に寄付して來な

い。外の爺さんや、婆さんの方にはばかり寄りつく。子供もよく知つて居る。彼を何かうさんなものとして居るのだ。

最初の日は五十六錢賣つた。二日目は雨降りで二十八錢しか賣らなかつた。一圓五十錢の賣が五日も六日も賣れなくて残つてゐる。そして一週間目には元も利も凡てを食ふて了ふと云ふ始末である。

然し遊んで居れば、一文にもならないからと思ふので勝之助はくたびれ儲けとは知り乍らも、一日二十八錢か、三十錢位しか儲らなくとも、また一日葬禮人足となり、一圓五十錢儲けてそれで餘を仕入れ、またそれを昇いで路次から、路次を廻るのである。

彼はそれが如何にも不甲斐無いと云ふことを知つて居る。然しその外に彼としては爲ることが無いから仕方が無かつた。

「——自分はまるで、地面にわいた蛹のやうなものだ、社會に生きて居て何の効能もない——土地はなし、資本はなし、工場はなし、機械はなし、教育はなし、傳はなし、友達はなし、信用はなし、孰練はなし、機會はなし——あるものは、系類と、借金と、質札と、貧乏と、肝癩玉ばかりだ——

——いつかはこの怨みを何處かではらしてやる！」

徒勞な努力をして、貧民窟に歸る夕べ毎にいつもこんな考を勝之助は持つてゐた。

## 二十四

大講堂の柱の下を急ぎ乍ら、佐藤主事は新見に云ふた。

『廣告が足らなかつたのでせうかね？ 少しも來ませんね——私は之から大江橋の畔でピラを播いて來ます。』

佐藤主事の姿は表の方に消えた。

治安警察法第十七條撤廢の大演説會が春の櫻の眞盛時に新しく出來た大阪一の大講堂中ノ島公會堂で開かれた。講堂は株式問屋の岩本榮之助氏が全盛時代に寄附したものでその壯麗は言葉で云ひ盡すことの出來ない。開會は正午十二時と云ふ廣告を出してあつたのだが、十二時はとくに過ぎてもまだ誰れも來ない。満員の時には七千人から這入ると云ふところ來たものはたゞ二人きり——主催者側の佐藤主事と新見榮一だけであつた。

程なく佐藤主事は表から歸つて來た。そして新見に告げた。

『澤山來てゐますよ、地下室に一杯ですよ——』新見は佐藤の云ふた意味がわからなかつた。それで

問ひ返してみた。そして、漸く巡査が地下室に一杯になつてゐると云ふことがわかつた。

新見は佐藤主事に云ふた。

『佐藤君、もう、そろ／＼始めませうか？』

『さうですね、大阪の人には治安警察法第十七條がなんのことがサツパリわからないでせうから、巡査にあがつて貰つて巡査だけに聽かせることにしませうか？…それでも、かれこれ四五百人は居りませうよ。』

講演會は始まつた。新見は始めから演壇に立つた。聴衆と云ふのがバラ／＼と大講堂の前方に百四五十人座つてゐた。然しそれらは大江橋の側でピラを見た連中で、新築せられた大講堂を見物に來たものゝ方が多かつた。

中には髪に花の簪を差してゐるものもあつた。

そんな演説會に對しても、當局の方針は恐ろしく嚴重で、約四百名の正服巡査が地下室に待たされてゐた。

新見は歸朝後労働組合相愛會を助けてゐた。然しこの時ほど、新しき責任が彼の上にかゝつてゐることを強く感じたことはなかつた。

演説會は何の故障もなくしてすんだ。新見はこれを一期として一層労働組合運動の急先鋒たるを覺悟した。そして關西の同志と相計つて、關西労働同盟會が生れることになった。日本は狭いものだから、新見の名はすぐ關西に知れた。そして、新見は有名になることを非常に悲んだ。

二十五

須磨の櫻が満開だと云ふ頃師井がヒョククリ夜遅く櫻狩の歸りだと云ふて、貧民窟に立ち寄つた。

『……相變らず念がしさうにしてゐるなア。』  
と云ふことから、久し振りに語つた。

師井は高商を出て、續けて内外貿易に努めてゐるのだが、頻つて自分の職業をコボしてゐる。

『……俺のやうな男には、商買はむかんでなア。』

『ぢや、やめたが善いちやないかー』

『やめてもすぐする仕事がないしなア、凡ては宿命だよ。』

頬のむつくり肥つた、色艶の善い師井は狭い二疊の間の隅ツこにあぐらをかいて居る。

『……俺は益々人生がわからなくなるねえ……俺の懐に金が出来て、相常な家に住んで戀人と結婚して、もう子供が生れさうになつてゐるのだが、まだ俺は人生と云ふものがわからないのであるよ……つまり、人生は之で一生解らずにすむのだねえ。』

新見は黙つて師井の腫を凝視した。

『——新見君、俺の顔をそんなに見ない、俺の心の底まで見透されるやうな氣がしていかんよ、君のやうに凡てに對する執着を捨て、了うと善いのだがなア、僕は君のやうな氣にはとてもなれない。』

『僕は資本主義制度を、~~本~~して居るから安氣なんだよ、君らは、資本主義を肯定してゐるから苦しんでゐるんだ。』

『ぢや、ロシアのやうにやらうと云ふのかね。』

『いや別に、ロシアのやうにと云ふのではないがね、僕の考は、マルクス主義以上に資本主義を居るんだよ。』

熱し易い新見は、腕を振つて、答へた。

『おい、新見君、その君の議論を今夜俺に聞かしてくんねえか？ 俺は近頃光に飢えて居るんだ……』

つまり、君は、現代文明の何處が悪いと云ふんだ？ 君はその凡てを呪ふのか？  
貧民窟は睡静まつて路次には足音もなく正月の寒い夜が段々耽けて行く。

「いゝや、誤解しちや困るぜ、俺は資本主義を呪ふが文明の凡てを呪ふては居やしないから。」

「ちや、どこが悪いと云ふのだ？」

「金だよ。」

「俺は金が欲しいなア！」

「僕は金を呪ふねえ。」

「どうしてだね？」

「金は社會的勢力の表象だらう、君だつて、金が欲しいのではないのだらう。金の持つ社會的勢力が欲しいのだらう。」

「全くさうだ。」

「それなら、實力を作れば善いぢやないか、たゞ、表面的な黄金ばかりに目を眩まさないで——」

「然し、理屈抜きにして、金の外に社會的勢力を握る方法が無いぢやないかね。」

「あるよ！ 組織の力だよ！ 労働組合！ 消費組合！ 信用組合！」

「！」

「そら、空想だ！」

「今に、」

「！」

「だけど、」

「？」

「あれが失敗であるか無いかは別として、世界の無産者が、今日の望を持つてゐることだけは、君も認めるだらう。」

と云ふ希

「ウム、それは認めるよ……然し社會主義の時代になつたところで、遊んでゐても食へないだらう。」

たとひさ、遊んでゐて、食へたところで、毎日遊んでゐるのもつまらんぢやないか？ 僕は要するところ、人生に疲れたんだ！ 俺は生きてゐることも出来ず、死ぬことも出来ず、わけもわからず毎日暮して居るんだ、俺は、たゞ人生と云ふところは、つまらんと考へてゐるんだ。そんな時はどうすれば善いんだね。」

「そんな時には、まア生きて行くんだね……人生の芝居の幕の終りまで見るんだね。」

「僕は煩悶が無いと、人生が退屈で仕方がないんだ。」

こんな會話の後、師井は色々と神戸を中心としての經濟事情を物語つた。そして麻袋のスペキュレ一ションのことも話に出た。

「新見君、いくら金が欲しくつても、俺は麻袋だけはやらないから安心してくれ！ あれは商業取引の癌種だ。」

時計が十二時打った。師井は慌て、櫻を持って飛んで歸つた。

二十六

信吉は馬の口を取つて上筒井まで来た。六丁目の阪の上で、電柱に馬をつないで晝飯を食つた。馬腹に甘い。アルミの箱の隅に残つて居る飯粒まで、一々竹箸で挟んで口の中に入れた。

聯想は聯想を産んで、とりどめも無く自分の行末のことが思はれる。

「俺は、聖く生きたいのだ。俺は新見さんを助けて、少しでも、世の中をよくする爲めに努力するのだ。今迄の罪亡ぼしは出来なくとも、俺は新見さんの爲て居る仕事の三つ一の仕事だけでも助けて死ぬのだ。」

俺は男として、あの若い男を助ける義務がある。俺は新見を助けてやるのだ。俺の労働の凡てを捧げて、彼を助けるのだ。之は俺の義務だ。俺は彼が労働せよと云ふから、労働に出て来た。そして一日の賃銀を、凡て彼と彼の事業に捧げる。——」

アルミニウムの中の辨當箱の中には、もう一粒の飯もなかつた。然し、彼は猶も箸でコソ／＼四隅をつゝき乍ら、考へ込んだ。そして自分の眼から涙の滲み出るのを覺えた。

「——新見は、此間こんなことを云ふた。君の妹さんが、死ぬのはあたりまへです。この世の醜を見たものは、早く死ぬのです。そして後に残つたものは、みな浄められる必要のあるものばかりです——さうだ、さうだ。俺は浄められる必要のある男なのだ。そして妹は俺を浄める爲めに死んでくれたのだ。」

嘘、妹も無念なことであつたらう。海の底で今猶泣いて居よう。さうだ、俺は妹のことを思へば、どうしても生きて居れない男なのだ。俺が妹より先に死ぬ可き筈のものであつたのだ。然し妹は俺を諫める爲めに、遂に俺に先立つた。

すまない！ すまない！ 妹の姿が眼の前に見えるやうだ！ 身體に冷たい水が廻るやうに思はれる。身震ひがする。過去の罪を思ひ出して震ひ上る。

あゝ、絶望だ！ 絶望だ！ 俺は到底自らを救ふことは出来ない！ 神でも、キリストでも、俺を救ふことは出来ない！ 妹の靈が俺を呪ふて居る。俺はもう馬力臺の上にひつ付けられて、この呪の臺の上から立つことは出来なう。



「やア！ この馬は、妹の魂の生れ變りぢや無いか！ あまりに靜かに立ち過ぎる！」  
お日様が着く見える！

ペンペン草が、みな祇園のお茶屋の雛妓に見える。

石垣の石が鬼の面に見える。五角形の鬼の顔があり、七角形の鬼の顔があり、みな過去の罪を一々知つて居るかの如くに嘲笑ふ。

「——大地も、俺の姦淫の數を算へて居る！

あ、俺は、とても助から無い！ 凡てが虚偽だ！

そして、魅つた俺の今の生活だけが、虚偽ぢや無い！ 俺は何にもわから無い！ 俺も近頃漸く、自分に善いところがあるに気が附いて來た。捨てたものぢや無いと云ふことが判つて來た。——新見に云はすと、俺は善人なのだ。たゞその善いところが、時々斷滅するのが悪いのだ——」

坂の下から、眞赤な洋傘を翳して、若い娘が登つてくる。信吉が辨當箱を仕末して、馬力の下に吊つてある袋の中に、入れてゐる間に、その娘は、信吉の横を過ぎつて、馬を繋いである電柱の前の門の中に消えた。その後ろ姿を見ると、光淋模様とでも云ふものか、青地に銀泥と金泥で、大きな花を畫してある。

着物は錦紗の派手な格で、昔は子供でなければきかない様なものを着てゐる。

信吉は、その女の姿を見送つて、貧民窟の女のこと、青年達のことを聯想して見た。

「——世の中は、非常に間違つて居る。

あの女等は、遊んで居て、あんな贅澤な生活が出来るのに貧民窟の青年達は仕事が無くて、餓賣りに出ても、まだ損をして歸つてくる。

そんなことを思ふと、働くのがいやになる。誰が一體この不公平な世の中を審いてくれるのであらうか？

「俺にはわからぬ。世の中は全くの暗闇だ。然し「どうしても、凡ての人が労働する世の中を作らなくてはならない。今に、労働者が尊敬せられて、遊び人が疎んぜられるのだ」と新見さんは口癖のやうに云ふて居る。

さうだらう。そんな時代が來なければ嘘だ。然し一體、何時そんな時代が來るのだらうか？ 神戸の街だけでも、内田と云ひ、勝田と云ひ、成金が澤山出來て、贅澤三昧なことをして居るが、貧乏人は一人も減つて居らないではないか？

新見さんの云ふことも結局は空想かも知れ無い。俺はいつまで経つても馬子で一生を終らなければ

ならないかも知れないし、新見さんも、あれで、あの儘で了るのであらう。そして金持がいつまでも世界を支配するものと見える。

つまらねえ、つまらねえ！ こんなにして居ても一日五兩となるのではなし、馬の飯代と、車代とを差引かれると結局は、二兩と残らないのだ。みんな泥棒の寄り合ひだ。俺一人が、いくら頑張つても世の中は善くならねえ！

—みんなが、善くならなくちや駄目だ！ 然し、俺は神様ぢやあるまいし、皆のものにそんな注文するわけにも行かぬえ。

さうかと云ふて、新見さんが、いくら辻説教を十年も續けたところで、それで、日本全國が善くなることも無いだらうし、結局は放つて置くより仕方があるのだ！

なるやうになるのだ！ 成るやうにならして置けば善いのだ。凡てが運命だ！

然し、俺だけは成金になる希望は捨てた！ 成金になつたところで、祇園のお茶屋で金を捨てるだけぢやつまらぬ。

—俺は一日かちやつて達者で、馬の尻に付き廻つて居ればそれで結構なのだ。俺は二圓儲けたら、一圓だけは新見さんにあげるのだ。そして、一人でも可哀相な人を助けるのだ。

大きな金を握つて、大きな事をせうと思ふから無理をして泥棒でもしたくなるから、俺は、自分が聖く貧しく生きて行きさへすれば善い。俺は、俺だ！ 宇野信吉だ！ 俺は運命に操られつゝも、矢張り自分の道を歩むより外道が無い。』

こんなに考へて、信吉は電柱から手綱をほどいて、坂を下つて行つた。

五月の鯉のぼりが所々に立つて居て、街は何となしに陽氣である。最近の好景氣は道を通つて居る人に凡て美しい着物をさせた。その中に彼は汚れた印絆纏を着、痩せ馬に、ぼる馬車を喰附けて行くものだから、何だか違つた野蠻國から出て来たかと、思はれる程であつた。

街の上には、北野の山が新緑を装ふて、美しく見える。初夏の柔かな光線が、薄曇りの空を通して軽く敷かれた砂利の上にあたる。砂利は美しく輝いて、生々して見える。

馬の口を取つて居る信吉の口からはひとりで歌が出た。

## 二十七

その後宇野信吉は、玉枝の居所を明確に知る爲めに努力してゐたが、遂に、玉枝が、九州直方川筋の春木と云ふ淫賣宿に賣られてゐることをはつきりつきとめた。それで、彼は新見夫人の名で手紙を

書いてみた。

すると、すぐその返事が来た。それは實に簡單なもので、次のやうに讀めた。

『永らく御不沙汰致しまして誠にすみません。姉様とお別れして、かれこれ満四年になります。私はその後筆にも書けぬ程の苦勞をいたしました。そして今は苦海に身を沈め明日のひのわからぬ暮しを致して居ります。姉様などと一緒にイエス團に禮拜に行つた時のことを思ひ出しては泣いて居ります。どうか、私の爲にお祈り下さい。』

こんな手紙が来たので、喜恵子はすぐ榮一に見せたが、信吉は詳しく經過を説明した。もともと仲の善い友達であつた喜恵子は、すぐまた手紙を書いた。長く返事は来なかつたが、一月位して、長い手紙を送つて来た。そして僅か二百圓ばかりの金で困つて居る事情を詳しく報告して来た。

喜恵子は、自分が玉枝に會ひに行くと云ひ出した。然し信吉はそれを止めた。とても喜恵子一人位のみ力は一人の淫賣婦を救ひ出すことは出来ない。『寧ろ、先生が一人それとなしに様子を探りに行つて、都合が善ければ搔さらつて来る方が善いですよ』と忠告した。これが好景氣の眞最中大正七年六月のことであつた。然し新見は工場のことや、學校のこと、著述のこと、労働運動のことで急がしく何の實行の運びも取れなかつた。

その頃、榮一の住んで居る長屋の向隣の鶴田の一軒置いて東の逢坂の一家は、榮一の世話で、榮一の寢てゐる二疊の間の北側の板間に吳産を敷いて親子六人が住むことになつた。それは主人が花木商店の經營してゐる神戸製鋼所の職工をしてゐたが、徹夜して居る時にグレンの上から鐵片が落ちて来て、逢坂の足の甲を挫き六ヶ月も工場の病院に通ふたが癒らないで、収入は減るし、工場は面倒を見てくれないので、とうとう榮一が自分の宅に一家全部を引取ることになつたのであつた。

その子供は十四になる娘を頭にして、女の子ばかり四人あつた。六月に這入つて、ひよつくり榮一夫妻は晩遅く、いつもの習慣に従つて、寝る爲めに長屋に歸つてみると、總領娘が居らない。で、逢坂のおかみさんに尋ねてみた。おかみさんは泣く泣く凡てを白狀して了つた。それによると、富山縣の方へ、淫賣に賣つたと、云ふのであつた。「幾何に賣つたか」ときくと、三年七十五圓で賣つたと答へてゐる。

可哀相にもう取り返しはつかぬかと云へば、もう駄目だと云ふ。

さうかうしてゐる中に、また二週間位たつと、その次の富枝さんと云ふ十一歳の娘兒が見えなくなつた。それでまた聞いてみると之も同じく、富山縣に賣つたのだと云ふ。「いくらで？」と尋ねると、三年五十圓の約束だと云ふ。

この時程、榮一は侮辱を感じたことはなかつた。現在自分と一緒に室を隣つて寝てゐる一家族が僅か百圓そこ／＼の金の爲めに可愛い二人の娘まで賣らなくても善かりさうなものだと考へたが、相談を受けないものだから仕方がない。榮一はこの時深く決心した。そして先づ、九州直方の玉枝を救ひ出してやらうと心の中できめた。

然し決心してからもなか／＼旅に出ることが出来なかつた。喜恵子は妹のやうにして世話するから救ふて来てくれとせがみはするが、辛じて高利貸の金を運動して、工場を経営してゐる苦しい中から、二百圓なり、三百圓なりの金をひねり出すことは容易ではなかつた。延び延びして居る中に六月は経つて了つた。

すると、或晩逢坂の姉娘のさかえさんが歸つて来た。事情を聞きたくしてみると實に露骨なことを云ふ。

「初めは藝者にしこやると云ふもんやさかい三味線でも習はしてくるんやと思ふておつたら、料理屋に雇はれて行きましてん、最初の晩から旦那を取れ／＼云ふもんやさかい、「いやや」と云ふたら、「いやや」云ふんなら、殺して了つてやる云ふもんやさかい、泣くなく男を取つたら、もう一週間に立つ中に腰が立たなくなつて、寝込んで了ふたんや……」

それから、新見はさかえさんが早や梅毒の猛烈なものに感染してゐること、局部に負傷してゐること、自殺の意志あること、富山縣には海岸線に沿ふて漁夫相手の淫賣窟が無数にあることを知つた。

それは、榮一には最も暗い一夜であつた。榮一は、ニューヨークの少女淫賣のことを報告書で讀んで知つてゐた。そして、葦合新川で十五六歳の淫賣婦を見たことがあつた。然し自分と同じ軒に住んでゐる無邪氣な「さかえ」さんが、そんな運命に遭遇すべきものだとは知らなかつた。

榮一はすぐ、無い會計のなかから、さかえさんを救ふことにし、同じ境遇にゐる玉枝を救ふ爲め猶二百圓を裏の癩病患者の高利貸から借りて来る決心をした。

榮一は華嚴の瀧の巖頭から飛び込んだ積りで、さかえさんと、玉枝さんを救ひ出す決心を立てたのであつた。然し、その決心を立てた時に彼はそれが決して人の爲めにしてゐるのではなくして、自分の母とその階級の人々の爲めにしてゐるのだと云ふことを考へた。

榮一は、自分の軒下に起つた一つの悲しい出来事を見て、全く黙視することが出来ないと考へた。彼はアメリカから持つて歸つて来たやうな悠長な感情をかなぐり捨て熱狂兒として立ち上る決心を立てた。

彼は長屋の土べたの上に跪いてそれを祈つた。彼はも早や一學究や、一傳道師ではない。彼はナ

ザレの大工の流れを汲む一熱狂詩人として變轉自在の活劇を演じ、日本の無産者の爲めに無限の虹を吐く可く決心した。

長屋の椽の下の生温い空気が、彼に對して何の感應もなかつた。然し「さかえ」さんの悲劇を見た新見榮一は、も早や其日の新見榮一ではなかつた。彼は中世紀の騎士の如く幻想と、涙と、虹の中に住む決心をきめた。

「北風よ、來れ、南風よ、競へ！、私は敢然として颯風の眞唯中に飛び込んで行くのだ、海嘯も地にも雪崩も一度に來い、私は、低氣壓の眞唯中に坐つて、人生が何であるかを味ふ」と、彼はその夜、雜記帳の隅に書きつけた。

## 二十八

新見の九州下りの名目は炭坑地の視察であつた。それには兵庫縣救済協會の囑託もあつた。

大正九年八月一日、新見は喜び勇んで九州に降つて行つた。

九州で最初に新見の見た炭坑は、門司から程近い折尾の在、中鶴の炭坑であつた。

知事の紹介状を持つてゐるので、折尾の警察署長自らが先導を承つて、道案内をすると云ふ有様

である。それが新見には如何にも異様に感ぜられてならなかつた。やがてはこの調査が、炭坑主に對する一大反逆となつて現れるに係らず、何にも知らない警察署長は、上官の命令ならなんでも聞くと云ふ近眼的遣り口である。然し田舎の署長としては、それで善いのだと、心の中で笑つて居た。考へてみれば、可笑しくもある。ポロ／＼の洋服を着た書生だが、知事からの紹介状一つを持つてゐるからと云ふて、警察署長自身が、御先立ち仕るとは、官僚と云ふものは全體の知れ無いものだと思へられる。

「一體この署長は、自分が阪神地方で比較的よく知られてゐる社會運動者であることを知らないのか知らん」

と自問してみた。矢張りどうも知らぬらしい。榮一に著書のあることも、今日まで彼が危険視されてゐることも少しも知らぬ。知らぬが佛と新見は嘯いてゐた。

然し榮一は外観頗る貧相な男だけに、警察署長が長官扱するには、誠に氣の毒なところがある。長い軌道の枕木を踏んで飛び飛びに歩き乍ら署長は、色々なことを新見に話して聞かせた。坑内に下る女労働者の増加して行くこと、それは労働賃銀が高くなつたので、男をさう無耶味に使へ無いこと、労働者の方でも、生活が苦しいので、少し無理でも女を坑内下りに使用すること、女が無理す

るから流産がどうも坑夫納屋で多いこと、また児供が多く死ぬこと——署長は乳兒死亡率など云ふ科學的のことは少しも知ら無いらしい——などと次から次に話してくれた。

署長は指揮刀の柄を左手でしつかり握り、枕木から枕木へ飛ぶのに佩刀の鞘が股の間に這入ら無いやうに努力して居る。枕木から枕木へ飛んで行く署長の顔を見ると、日に焼けた頬骨の立つたどうしでも軍人上りで無ければ見られ無い顔付をしてゐた。新見は刀を帯びて手袋をはいてゐるその姿が如何にも氣の毒に思へて仕方がなかつた。

時代とは云へ、いつも警察から睨まれてゐる男に、今日は労働調査を頼んで、警察署長自らが案内すると云ふのは、變りかたもあんまり非道い、之もロシア革命の影響だと感ぜざるを得なかつた。

中鶴に來た。炭坑事務所に署長自ら案内してくれた。どう思つたか坑長自ら敬々しく新見に最敬禮をして出迎へた。新見はあまりその態度が馬鹿丁寧なので、心の中で笑つた。でも迎へた積りで居るらしい。中鶴は紫の女王の主人で銅御殿の大旦那、佐藤傳兵衛さんの持つてゐるものだつた。事務所の前の廊下は架橋のやうになつてゐるが、架橋の下は地下室にも通ずる階段のやうに作つてある。新見は最初それと氣がつかなかつたが、午後四時の交代に土まみれになつた男女の坑夫が幾百となくカンテラ下げて、そこから出てくるので、始めてそこが坑口であることに氣が付いた。

出てくる、出てくる、冥途の旅から歸つて來たやうな装束で出てくる。榮一は或者が今地球を一周して來たと云ひたいやうな態をして着衣を汚し、草鞋の先をほさいて出て來るのを見て驚いた。

『あしこが坑口ですか？』

榮一は坑長に尋ねた。

『さうです、お下りになりますか？』

『さうさせて頂けば幸ですがね。』

『今日は恰度、巡回に行きましたものが、もう上つて來ましたので、明日に願へば結構ですが、』

坑長のさう云ふた顔の類には曇りがあつた。坑内はなかく普通のものには見せないと聞いてゐたから、或は見せることを嫌やがるのではないかと、新見は考へた。

彼は坑夫長屋を見せてくれと依頼した。それは喜んで承諾してくれた。宿舍係長の案内で新見は見廻つたが、なんのことはない、大きな貧民窟を見てゐる氣がした。十軒宛左右に並んだ長屋が二三棟も立つて居る。中央には獨立した共同便所がある。長屋生活の不自由に慣れて居る新見には之が傳染病の傳播した時に恐ろしく不都合なものであることを直覺したが、果して長屋を見て廻つて見る中に、赤痢病で隔離せられて居る二棟の長屋を見た。新見は。

『これでは喧嘩が相当ありませうな。』  
と係長に尋ねた。

『ハ、相當にあります。昨夜も大喧嘩がありましたやうな仕末で、どうも坑夫の亂暴なものには困つて  
了ひます。』

長屋の心理を知らない係長は、それを坑夫が悪いのだと考へて居るらしい。新見の眼で見れば、それは全く長屋の作りかたが悪いのである。凡てを過群性の神経衰弱に仕向けるやうに作つてあるものだから、自ら坑夫はさうした環境に敗けて了ふのである。それでも係長は長屋は坑夫を優遇する爲めに新築せられたものであると説明してゐた。なる程木は新しいし、壁も塗りたてである。然し頭の古い人の建てた證據には千三百の人が住む爲めに一個の運動場も無く、一個の兒童遊園地も設備せず、兒童が共同便所の裏に席を敷いて『マ、ごと』をして居るのでは、新しく建てたことが、何の役にも立たないと云ふことを知らないのである。

長屋を見廻つて居る中に、關西の都市で、誓文拂の時などに、よくやるやうに、景品を陳列してあつた。

『之は何ですか？』と聞くと、

『之は坑夫の入坑獎勵の景品であります。一ヶ月廿四日以上入坑したのものには一等の賞品の籤をひく権利があり、廿日以上のもは二等の賞品の籤を引く権利があります。』

『然し十等まである理由は、どう云ふわけですか？』

『十等はまた十等で、ひく人があります。一ヶ月に十日以上、入坑したものは十等賞の籤をひくのです。』

さう云ふて係長は苦笑した。

賞品を出さなければ入坑しないと云ふのを見て、榮一は北九州の労働組織が如何に變體なるかをすぐ悟ることが出来た。新しい長屋の裏の凹地に、藁屋根に荒壁を塗つた納屋のやうなものが五六軒立つてゐた。

『あれは何ですか？』

と新見が尋ねると、

『あれは舊い納屋であります。』

『誰か住んで居るのですか？』

『は………』

答は極く簡單であつた。

係長はそれから、治療所、共同購買部などを見せてくれた。

統計のことに就て色々尋ねたが、少しも云ふてくれなかつた。

『……それは巡査にお聞き下さつたらよくわかると思ひます。』

と係長が云ふ。

それで巡査派出所へ廻つた。

巡査は五十過ぎの元氣の善い男であつた。少々お酒をきこしめて居ると見えて話のビツチが少々高

さ。

『統計？ そんなものを何するですか？ 寫したければいくら寫されても善いが、發表せられると一寸困るな……私も之で會社に雇はれてゐる身ですから……私の仕事は柵を越へて、あの堀を渡つて逃げ出す坑夫を掴へるのが役目だから……坑夫と云ふ奴は仕方がない者ばかりで、高い金を出して募集して来た奴が百人の中半分とはいかんが、三分通りはその月の中に何處からとはなしに脱け出るのぢやからなア、あゝして柵を造らへ、深い堀を掘つて、まるで監獄のやうにしてあるのぢやが、手足を縛つて置くわけにも行か無いものだから、つい逃げて行つて了ふ。』

時によると、大勢で後を追懸けて掴へてくるが、またこちらのすきを見て逃げるもんぢやから仕末に了へんですな、全く。』

巡査の眼から見ると坑夫は檻の中に這入つて居る虎か狼のやうな獸で、彼自身は動物園の番人の積りで居るらしい。

『坑内の風儀はどう云ふ風ですか？』

『坑内のことは、こつちに關係が無いので、わしは知らん……坑内は鑛山局の管轄ぢや……然し、暗がりの中へ、若い男と女が裸體で這入るのぢやからな、少々の間違ひが起ると見なならん……然し少しの楽しみでも無ければ、實際馬鹿らしゆうて、あんな囚人でもないやがるやうなところへ、誰れも下つて行くものなどありやせんよ、若いものには、坑内下りが唯一つの楽しみになるのは、女と一緒に行けるからでもあるぢやらうな。何時落盤の爲めに死ななければならぬか、判らないんぢやから、少々のは大目に見てやらんと、實際坑夫の仕事も辛いもんぢやから……』

巡査は酒の酔の爲めに顔を眞赤にして居る。眼尻に寄つた深い皺を集めたり、散らしたりして會社の施設を一々辯護する。犯罪統計なども出来るだけ見せないやうにする。然し強て見せて貰つて寫し取つた。



粗末な杉の木のテーブルの上で統計を寫して居ると、巡査はお客さんを捨て、置いて何處かに行つて了つた。

派出所の硝子窓からみると、小屋掛けをして果物や、菓子類を小賣してゐる三四軒の店が見える。こんなところと思はれるが氷の旗も翻つて居る。野原を越えて遙か向ふに、幾つかの煙筒が見える。煉瓦でも焼いてゐるところのやうに見える。が、それらは凡て小さい炭坑であつて、煙筒は坑内に送る通風機や、石炭を坑内から運び上げる動力機械又は、發電機の据つて居る所である。

田の中に蛙がガア／＼鳴いて居る。道にはコークスが敷かれてある。堀の水は濁つて動かない。凡てが倦怠の氣分で漲つて居る。

一時間以上も統計表を寫して居る中に巡査が歸つて來た。巡査は事務所へ「統計表を寫させても善いものか、どうか」を聞きに行つて來たらしい。

新見は統計表を通して炭坑の暗黒面を手に取るやうに見ることが出來た。然しそれに對して何事も云はず、その日は中鶴驛前の粗末な宿屋に投宿した。

行くときにはあまり氣の附か無かつた料理屋が、暮方になると、あかあかと電燈をつけて、白粉をコテ／＼つけた酌婦が門先の床几の上に赤い腰巻を現はしてけだるさうに腰を懸けて居ることが特に

眼立つた。それが田圃の真中に三軒五軒とバラ／＼四五ヶ所も立つて居るので妙な氣がした。

勿論、それは坑夫を目的に立つたものであるが、坑夫の淫蕩的氣分がそれにそつてよく判つた。

晩になると、人通りも無く驛前は淋しいにかゝはらず、田の中の料理屋には絃歌の聲が喧しく、靜かな田面の水に反響して、馬鹿にセンチメンタルの氣分を咬る。蚊が多いので、狭い木綿の蚊帳を吊り、ひとり汚い蒲團の中で寝たが、坑夫の生活とその環境を目の前に見て何とも云へぬ不安に襲はれなかく、睡就くことが出來なかつた。炭坑地方の淫蕩な酌婦生活のことを思ふと玉枝のことが氣になる。蛙がガア／＼田圃の中で鳴いてゐる。

## 二十九

翌日新見は朝早くからまた中鶴炭坑の事務所まで出掛けて行つた。そして坑内下りの着衣とステツキを借して貰ひ言葉の叮嚀な主任技師に案内せられて斜坑を下つて行つた。

サアサア／＼と音をたて、鋼鐵のロープが滑車の上を這つて行く。それに結び附けられた百斤積の小さい貨車がゴトンゴトンと異様な響を立て、上に昇つて行く。坑道には電燈が六尺おきについて居る。主任技師の持つたカンテラが斜に下つて行く二人の足元を微に照らす。ロープと滑車と貨車の音

の外は別に何もものも聞こえない。道が狭いので枕木の上を歩くと、折々技師が

「車が登つて來ます、危いですよ」

と注意してくれる。そして技師の話が始まる。

「先日、此のロープが切れて、車が走りましてな、一人やられたのでした。實に此處を通るのは危険なのですが、人道は狭くて暑いですから、此處を通りませう、よく注意して下さい。」

十五六分も下つたと思ふ頃、明るい四辻に來た。そこには硝子障子の這入つた坑内事務所がある。

何だかうれいしい気がした。そこで新見は住所姓名を再び張簿に記入して貰つて、坑内奥深くまで行く許可を正式に得た。

主任技師はダイナマイト入りの箱の蓋を開けて類つてその數を讀んでゐる。

その時新見はダイナマイトの聯想から非常に興奮することを覺えた。

「この坑内は水が多いですから、よく洋服の裾を巻くり上げてゐて下さい。」

さう主任技師は注意してくれた。此事務所主任技師と別れて、青年の見習の技手が彼を案内してくれることになつた。主任は面倒臭いと云つたやうな態度で、見習の技手に彼を引繼いだ。それは寧ろ新見の歓迎するところであつた。

切羽から奥へ奥へと二人は這入つて行つた。斜坑の左右に幾十となく碁盤形に小さい脇道が作られ、一平面の下に更に他の平面の切羽とその碁盤形の坑道が作られ、猶そのもう一つ底に更に第三の平面の世界が作られて居るのであつた。

彼は第一の平面の右の第五の切羽を奥深く行き、また直角に第三の縦の道を下る中に、坑内の水が大きな谿流のやうになつて一ヶ所に集つて居るのを見た。そこは四辻であつて、比較的明るい電燈がついてゐた。

その右に曲つて山手の角に若い男女が四五人重なるやうに腰に一寸布片を巻いて居る外

、カンテラの火で、一人の男が小説を讀んでゐるの

を呑氣さうに聞いてゐた。

新見は地下の生活は案外呑氣なものだと思つた。

然し第一の平面を捨て、第二の平面に移ると空氣は更に悪くなつたやうに感じた。此處の青年男女は一生懸命に働いてゐた。男は先山と云ふて、鶴嘴を以つて石炭を掘り起し女はそれを小さい箱に運び入れる。それを後山と呼んで居る。後山に働いてゐる女労働者の多くは、うら若い色艶の善い娘達であつた。闇の中から、石炭を箱に一杯積み重ねてレールの方に運び出すために、カンテラのボンヤ

リ光つて居るところに出でくると、娘等の裸體の曲線が、何とも云へぬほど美しく見える。

坑内も第三の平面に下つて杵も何にも組んで無い危険な場所に降つて行くと、通風が悪いので、息苦しく感ぜられる。青年技手の説明によると、炭酸瓦斯が百分の十九パーセントだと云ふから息苦しい善である。空気の悪い都會で百分の五パーセントで衛生に悪いと云はれてゐるのだから、坑夫の壽命の短いのも無理は無いと考へられる。

それでも、坑夫の中には案外香氣なものも居て、そんな危険な瓦斯の發生するところで煙草なんか吸ふて平氣なものもある。

さうかと思へば、坑口から一哩近くも地下に下つて、人氣の全く絶えた切羽の奥の、電燈も何にも付い居ないところで、暗いカンテラ一つを便りに若い男女がたゞ二人きり、仕事も別にしないで、坑道の冷たい巖の上に腰を降して、ひそく話込んで居るのも見た。

そんな光景を見ると、新見は何だかその人達に濟まないやうに思へてならなかつた。然し坑内の人には、そんなことは慣れて居ると見えて、別に恥かしいと云ふ素振りもせず、腰も上げもせず、たゞ黙つて二人を見送るのであつた。

最も危険な作業地と云ふ所にも、新見は案内せられた。そこは立つたまま這入つては行けぬところ

で、這ひ乍ら進んで行くと、多くの男女は這ひ乍ら仕事を續けて居る。男坑夫は横向きになつて寝たまゝ鶴嘴を使い、後に従ふ若き女は這ひ乍ら箱を運搬してゐた。

そんな嚴肅な作業場を見せられると、新見は勞働の尊嚴と云ふことを深く考へさせられて涙の沁むのを覺えた。

横向きに寝た儘、鶴嘴を使つてゐる坑夫の頭上に一つ小さい落盤でも落ちかゝれば、事終りであると思ふと、新見は身の毛の彌立つのを覺えた。

歸りには暗い人道を登つた。通風坑を逆に行き、苦しい逆風に難まされた後、狭い人道に這入ると幾百千階の石段を登らねばならないのに、全く驚いて了つた。登つても、登つても、石段は終らなかつた。自分がそんなに深く下つて居るとは意識しなかつたが、人道を上るとその距離がよくわかつた。生憎途中でカンテラの油が盡きて、火は消えて了つた。闇よりも暗い坑道を、上から垂れる露に濡れつゝ進んだ。進んでも進んでも階段があるので、登つて居るのか、降つて居るのか見當が附かなくなつた。空気の流通が悪いので嘔吐が催されて来た。逆風に喉を哽らしても、通風坑を通る方が遙かに氣持が善かつたと思ふ。階段が或處に來ると螺旋形になつて居るらしい。二三度もくるくる廻ひをする。八幡の藪知らずに這入つたよりも恐ろしい。たゞ便りになるのは青年技手が坑道を熟知し

て居ると云ふことだけであつた。カンテラの灯が消えて後、技手も少しは話をしてゐたが、灯が消え  
ると、二人の會話も面白くなつた。會話がなくなつた後は入坑の際に借してくれた小さい藁口の  
付いた檜の木のスツキが、昆虫の觸角のやうな作用をして、闇の中を進む力強い味方となる。

『もう、八町登れば坑口に出られます。』

と云はれてからも十五分以上も闇の中を登つた。闇の中に色々な眩像が見える。女の大きな乳よ  
り上の姿が活動寫眞に寫すやうに見えたり、先刻、闇の中で物語つてゐた若き男女の姿がその儘見え  
る。さうかと思ふと、また美人の顔が眼前に見える。それが後ろに回る。美人が嘲弄してゐるやうに  
高い聲で笑ふ。その顔が直に盤若の相に變る。あまり恐ろしいその變化に新見は恐怖を感じる。動物  
が闇を恐れる恐怖の本能から、かうした眩惑が来るのだと思ふが、何となしにいやな感じがする。ま  
た前に進む、青年がわざと、自分をこんな坑道へ連れ込んで、カンテラを消し、自分を闇の中で切殺  
すのでは無いかとも案ぜられる。刃のひらめく光景が眼の前に見える。然しそこは闇で刀のひらめき  
などの見える善が無い。遂に彼は闇の中で殺された。屍は何人も知らない坑の中に投げ込まれた。  
自分は今黄泉の旅に登つて居る。妻がその死を嘆いて居る。喜恵子の顔が大きく見える。やがて闇  
の中から玉枝の血みどろになつて變れた顔が現れる。玉枝も切られた！ お岩の顔がそこに出てく

る。玉枝がお岩の姿に早變りをする。

夢と幻が一緒になる。眩想は眩想を産み、新見は呼吸の苦しくなると共に、歩いて居るのか倒れ  
て居るのか、死んで居るのか、生きて居るのかその境目が判然しなくなつた。たゞ遠いところに自分  
の足音のして居る音と、雨垂のやうな露が自分の周囲に垂れて居るのを聞くのみであつた。

然しその眩想は實に心持の善いものであつた。眩惑の中には性的興奮の交つたものもあつた。また  
宗教的のものもあつた。眩想の轉化があまり面白いので、未だ續けば善いと思つてゐる時に、技手は  
叫んだ――

『とう／＼坑口に來ました。』

さう云ふて技手は、坑口の扉を開いて、明るい太陽の光る世界に立つてゐる。

新見も駈けるやうにして坑道の外に出た。太陽の光線があまりに強過ぎるので、眼の調節が困難に  
感ぜられる。光のある世界が不思議に感ぜられる。また色彩と云ふものが實に美しく感ぜられる。  
その反對にコークス山を見たり煙筒や亞鉛張の工場の屋根を見ると、光線のある世界は醜い世界だ、も  
う少し長く坑内に居れば善かつた、否、永遠に世を捨て、坑内に逃げ込まうかとも考へられた。

事務所に來て、オーヴァを取り、簡単な職員の這入る風呂場に案内せられて、湯に漬つて居ると、

坑内の光景が幻の如く現れてくる。隣の女湯には若い女の聲が花やかに聞こえ、壊れかゝつた、板戸の間から、白い脂ぎつた大理石のやうな皮膚が部分的に見える。

## 三十

直方に着いたのは暮方であつた。驛前の旅館筑前屋に宿を取り、地圖を求めて新見は直に川筋と云ふところを探がしに出かけた。

『直方の川筋と申しますと、何處で御座りますか？』

と尋ねると、尋ねられた人は妙な顔をして居る。それで榮一は自分の尋ねて居るところが奇しい街であること云ふことがすぐ解つた。

遠賀川の土手を登つて、向岸を見ると幾百となく電燈が堤に沿ふて灯つて居る。それが「川筋」と稱せられるところであつた。遠賀川に架けられた長い橋を渡つて右に曲がると、そこは料理屋街ともつかず、遊廓ともつかぬ實に妙な一廓であつた。そこには別に飲食店らしくもないが、看板には飲食店と掲げた格子戸の這入つた妙な家が幾十軒となく、恐らくは百幾十軒であらう——並んで居た。それが孰れも小さな家ばかりで、直方の本通の家に較べると實に見劣りのするものばかりであつた。

榮一にはすぐ、之が遊廓代用の淫賣窟だと云ふことに氣が附いた。直方の街に遊廓が無いかと云へば、遊廓は別にある。何故警察がこんな淫賣窟を黙許するかと云ふ問題が起るが、そこが法律と實際の距離のあるところである。

遠賀川の流域には小さいものを入れて二百近くの炭坑がある。そこに勞働する男坑夫だけでも十二三萬人はある。その性慾を充す爲めに遊廓だけでは足らないと當局は見居るらしい。面白いことは坑夫も公娼より私娼を悦ぶ傾向があり、娼婦も公に登録するより私娼で居りたいと希望するものらしい。そしてこの恐ろしい、逆も、日本の他の地方では見られ無い田圃の真中に、私娼ばかりの集窟が出来たのであつた。

家の多くは、新しく建てられた極く粗末なもので、壁なども永久的では無く、多くは赤土その儘であつた。納屋の生活を見て來て知つてゐる新見には、別にかうした簡單な家の構造も不思議では無かつた。

玉枝の居る家は、すぐ判明つた。表に『瓢軒』と記した電燈がついてゐた。平屋造の三軒長屋の北の端で、間口の狭い貧民窟式の家であつた。入口には、隅に『瓢軒』と小さく染め出した淺黄の暖簾つてゐた。

が懸格子を透かして内側を覗くと、淋しい程人氣は無くたどがらんとしてゐた。

「誰れも居ないのか知ら？」

と新見は、自分に云ふてみたが、兎に角、這入つてみた。飲食店と云ふ看板はかゝつて居るが、別に何も賣つて居るのでは無い。表六疊の間の正面は押込になつてゐる。臺所が四疊半で奥が六疊であるらしい。通り庭は裏まで抜け通つてゐる。奥の庭には木もまばらにしか植つてゐない。

「全く植民地式だなア」

と新見は心の中で云ふた。

「御免なさい、御免なさい！」

と五六遍も叫んだが、誰れも出て来ない。七八遍も繰返して居ると、奥の方から頭の右側に大きな傷跡のある破戸漢のやうな猙獰な男が飛び出して来た。新見の姿を見るなり妙な眼付で、榮一の顔をちらちら見てゐる。

「みんな留守です、少し待つて居つて下さい。」と云ふ。

新見はその男に尋ねてみた。

「今橋玉枝と云ふ娘は此處に御厄介になつて居りますか知ら——神戸から来て居る——」

「あなたは、どなたですか？……居りますでせう、……神戸から来て居る娘であれば少し待つてゐて下さい。」

新見は表に出て待つてゐた。

街には電燈が美しくついて居る。然し道は赤土道その儘で、広いところもあれば、狭い所もある。街路と云ふ形にはなつて居らない。如何にも新開地らしい。想像するところ、戦争の餘波を受けて炭坑が急がしくなり、坑夫が多く、築豊方面に入り込むやうになつてから急に造つた街らしく見える。まだ背の口である爲めか、通行する人も極く僅かである。懈怠るい下手な三味線の音が裏通りから聞こえてくる。五分、十分と待つてゐたが、誰れも歸つて来さうでない。それでまた遠賀川の土手まで歩いて行つた。

土手から見ると、街は不思議な妖怪のやうに横はる。「天路歷程」の夢物語の中に出てくる街のやうだ。それに較べて考へると、闇の中に横はる遠賀川は、水面が白く光つて葦の中に横はる死蛇のやうに見える。

闇の中に二十分位うろくした後また土手からおりて「瓢軒」に行つてみた。今度は「瓢軒」に人の氣がする。表の間には誰れも居らなかつたが、臺所の庭には、よく料理屋のおかみさんの型にみる、

脂肪で丸く肥つた、額の狭い、髪を引詰めに結んだ、淺黒い顔色をした四十恰好の年増女が腰を掛けてゐた。

「今橋玉枝と云ふ娘は御宅に御厄介になつて居りますか？」

と新見が尋ねると、愛憎の悪い顔面筋の動かし振りをして、

「玉枝？ 玉枝？……そんな娘知りませんでせ……」

「或は名が違つて居るかも知りませんが、神戸から来たもので御座ります。」

さう云ふと、その女は大きな聲を出して、怒鳴つた。

「お菊さん……一寸と用事や……」

奥から出て来た女は慥かに玉枝であつた。新見の顔を見るなり、またすつと引込んで了つた。それを見て、引詰めめの女は、怪しいと思つたのか、

「あなたはんは、何か御用でもおありになるのですかいな？」

「はい、一寸と、あの娘に會つて話したいことが御座りますのですが……」

引詰めめの女は奥に這入つて行つた。玉枝は襖の陰に隠れて居るらしい。玉枝と引詰めめの女の二人の會話がよく聞こえる。

「おまへあの人が知つてるのかい？」

「……」

「それぢやこんな所に隠れないで出て行けば善いに。」

「うち恥かしい」

二人の會話が了つたと思ふと、玉枝は表座敷まで、つかくと出て来た。そして、前をはだけた儘自墮落に坐つて、新見に黙つてお辭儀をした。

「お久しゆう御座ります。御機嫌よく居らつしやいますか……暫くでしたね。」

と新見は明瞭に挨拶の言葉を述べたが、玉枝はたゞ黙つてお辭儀をするのみであつた。玉枝が黙つてゐるものだから、新見も黙つてゐた。

玉枝は非常によく發育した。そして背が非常に高くなつた。瘦せてゐた頃の玉枝を見てゐた眼には別人の如く見える。よく肥り、色艶もよく、屢々娼婦型にみるやうな瘦せた神經質のところは少しも無い。顔も美しくなつて、頬が下に垂れてゐる。腰なども肥つて今にもはち切れさうに見える。髪だけは下手なハイカラ髷を結ふてゐるので顔に較べて誠に不似合である。これなら寧ろ日本の髪を結はせると善いと思ふた。着物は派手な千羽鶴の模様をついた浴衣を着て、帯は赤地に白の太い線が這入

つた博多帯をくるくると結ばずに巻いてゐた。如何にも今、湯から上つて来たと言ふ姿である。

新見は玉枝の姿を今眼の前に見て、賣春婦の生活をして、あまり外部的に現れて来ないのを不思議に思ふのであつた。

數分間、黙つてゐる中に、引詰の女は氣をきかして、奥に行つた。そこで、玉枝は初めて口を開いた。

『何時、こちらへお越しでしたか？』

さう云ふて、榮一の顔を見詰めた。玉枝の表情は昔と少しも變らない。顔面筋の凡てをピリ／＼と動かして、首を左右に曲げる癖は今も變らない。

『午後四時頃に着きました。』

榮一も玉枝の顔を見た。お白粉を頸から肩まで濃く塗つて居るのが特別に眼につく。

『何かの御用があまりになつて？』

『一寸と視察を兼ねて、あなたの事も心配になつたものですからやつて来ました。』

『お宿はどこですか？』

『直方驛のすぐ前の「筑前屋」と云ふ旅館です……あなたにお話をしたいことがあるのですが、一寸

どこかでお話が出来ませうか？……』

『御宿に伺ふといきませんか？ 私は着物を着換へてすぐお宿に、お伺ひ致しますから、一足先に御歸りになつてゐて下さいませんか……後からすぐ伺ひますから……』

「恥かしい」と云つた玉枝にも似ず、また昔は自分の考へたことも碌々言葉によろ云ひ現さなかつた玉枝が、發音をはつきりするので新見は不思議に思ふ位であつた。新見は直にそこを去つて、驛前の筑前屋まで車で歸つた。

旅舎で、風呂に這入つて、食事を済ませた後一時待つたが玉枝は來なかつた。もう來るか、もう來るか、二階から表を覗いてみたが影だに見えない。色々な想像が湧く。先に出て來た男と玉枝の間に關係があるのではあるまいか、淫賣をさせられて店を了つてから來るのぢやあるまいか、それとも「おかみ」が出さないと云ふためぢやあるまいか、あの仲間でよくあるやうに、男がついて無ければ出られぬのぢやあるまいか。そのうちに、九時が鳴り、十時が鳴つたので、新見はその日の日誌をつけて、翌日は三菱系統の新入炭坑を見やう、新入と中鶴とはどんなに違つてゐるだらうかなど想像して、床の中に這入つた。床に這入つて、一時すると、玉枝が突然襖をあげて這入つて來た。新見



が吃驚して、立ち上ると、玉枝は床の後に坐つた儘お辭儀をした。

「遅くなりましてすみません、出してくれ無いと云ふところを無理に出て来たものですから遅くなりました。」

玉枝は單衣の派手な縞のお召を着て、藝者のやうな風をしてゐる。

「もう遅くなつたので、來られないのかと思つて、失敬して寢て了つて居たのです……よく出て來られましたね。」

新見は、床を一方に巻き上げ坐蒲團をすゝめた。

『何年振りでしたかね。』

男との附合に慣れてゐると見えて、玉枝は遠慮なく、新見の勤めるがまゝに、坐蒲團の上に坐り、女中の運んで來た煙草盆の火を取り寄せて巻煙草を吸ひ初めた。

『妾はもう恥しゆうて、先生にお顔を合はすことが出来ませんのですわ……然し、花枝さんも、よし枝さんもみんな「おやま」に賣られたんですつてね……』

さう云ふ玉枝は自分が何か娼妓より一段上に居ると云つた誇を持つてゐるらしかつた。

『妾も、何度死うと思つたか知れませんが、まだ死ね無いで、こんなにして無駄な日を送つて居りま

す。それでも昔、先生に聞かして戴いたお説教が今でもありありと耳の底に残つてゐて、こんなに墮落して居りましても、折々思ひ出されて、胸が刺されるやうに思ひますんですよ……信仰も、落して了つたわけでも無いんですけれども、いくら神様にお祈りしても、神様が聞いて下さらないものですから、お祈りも自然するのが面倒臭くなつて今では聖書を讀むことも、お祈りすることも全くやめて了ひました。だつて、昔のことを思ひ出すと涙が出て來て止らないんですもの。』

玉枝は早や眼に涙を浮べて、瞬きをすると涙が雫になつて落ちるものだから、出来るだけ瞬きを遅らせてゐる。少し黙つてゐる間に、左の袖口で涙を拭いて居る。

『うちのお爺さんがじくなつたことは御存知ですか？』

玉枝はそれを世界の戦争より大事件の如く考へて居るらしい。

『いゝえ、それぢや、うちのお婆さんが癪瘋で悪いことも御存知ないでせうね。姉さんが——あなた私の姉さんを御存知でせう——』

『知つてゐますよ』

『姉さんが離縁になつて、歸つて來たものですから、私がとう／＼みんなの犠牲になつて、こんな所に身を沈めるやうになつたのです……竹田さんにも最初相談したのですが、相談する方が無理ですし

ね……私はみな運命だと思つて諦めて居ります……』

新見も、話を聞かされて、自然悲しくなり俯向いて了つた。

「妾も、あなたがアメリカへお出でになつて居らなかつたから、お婆さんだけでも助けて戴かうと思つたのですが、あなたは居らつしやらないでせう。私はお婆さんの云ふが儘に最初は仲居になる積りで僅か七十五圓の前借で家を出たのです。」

話をしてゐる中に、新見は玉枝の性格が著しく變つてゐることに氣が附いた。内氣で控へ目であつた彼女が、世間の風波に揉まれた結果、少しも社會を怖けなくなつたと云ふことであつた。

「あなたは最初室津へ行つたんですか？」

「室津は、明石の呑屋から廻つて行つたのです……妾は社會が、かう残酷なものだとは知りませんでした。初めは仲居と云へば、たゞお客さんにお酒のお酌する位が勤めだと思つたのです。それが、明石へ行つたその晩から、妾は無理矢理に……」

彼女は周圍を見廻して、人氣があるかと心配し、そこに誰れも居らないのを知つて、また話をつづけた。

「……妾に淫賣をさそうとするのでせう。妾は一旦逃げて歸つて來たのですけれども、母がね、もう

どんなにならうと、お金が無ければ家族三人の者が飢え死にするより仕方がないから、おまへがどんなにならうと心配せぬから、どうか家を出て行つてくれと云はれるものですから、とう／＼私も決心して、室津へ二年二百五十圓で行く氣になつたのです……それでも、お爺さんのお葬式の時の借金が無ければ、わたしと姉とが働けば食ふだけの事は出來たのですけれども、お爺さんが死んだ時にお醫者さんや、何にやかやと拂ふたお金が百七十圓も借金になつて、毎日一圓五十錢から高利の金貸屋へ持つて行かねばならなくて、とう／＼私が犠牲になつたのです。そんな時には、神様も何にも役に立ちませんわ、妾は、今は神も佛も無い、世の中は悪魔ばかりが居ると思つて居ります。」

玉枝はまた兩眼を袖口で拭いた。

「姉さんはお達者ですか、妾もその後御無沙汰していつも失禮ばかりいたして居ります。どうぞお歸りになつたら宜敷御傳へ下さいませ……お子供さんはまだお出來にならないのですか……」

『うゑ』

新見の否定的の答に、玉枝は心持ち微笑を浮べ、

「そら、お寂しう御座いますね、ひとりでもおありになるとお楽しみですのでね、こちらの御滞留はどれ位ですか？」

『明日立ちたいと思つて居るのです。』

『すぐ神戸へお歸りですか？』

『いえ、まだ四五日、此地方の労働者の状態を視察して行きたいと思つてゐます』

『では、明日はどちらへ？』

『明日はね、新入炭坑を見て、後藤寺まで行きたいと思つてゐます。』

『では、明晩は後藤寺でお泊りですか？』

『その積りで居ります。』

『あなたは何時アメリカからお歸りでしたか？』

『去年の五月の初めに歸つて来ました。みんな散り散りバラバラになつてゐるので淋しくてなりませんよ。』

玉枝は新見の顔をジロ／＼見詰めて居たが、

『新見さんもお年が寄つたと見えて、白髪がチラ／＼して来ましたね』

『然しこれは元からですよ。』

『妾が、教會に寄せて戴いてゐた時は少しも見えませんでした。……』

『いや、あつたのですが、あなたが氣が附かなかつたのですよ。』

『然し、なんとなしにあなたも老けて見えるやうになりましたね。』

旅舎の離座敷でお客が藝者を呼んで散財を初めたので、急に空氣が變つて來た。すこし小さい聲で話すると聞こえない。

『玉枝さん、私は、あなたを助げたいと思つて來たのだが、一體、どれ位前借があるの？』

『前借つて、前借は二百五十圓ですけれどもそれから殖えるばかりで、今の處で借金が四百圓位になつて居ると思ひます。よく勘定してみなければわかりませんけれども、』

『どうして、そんなに借金が殖えて行くのです？』

『殖えるやうに、むかうでするんですもの。』

『では、娼妓と少しも變らないのですね。』

『川筋は特別にさうですわ……「おやま」とちつとも變りはしませんわ……』

『一晩にどれ位儲けるのです……あなたは』

『いくらか知りませんわ、馬鹿らしくつて、勘定なんかしたことありませんもの。』  
『だつて、少しは見當はつくでせう。』

『六七圓でせうね。』

『たつた、それ位ひ？』

『さうだらうと思ふのです、玉代が安いのですもの。』

『それはみんな、むかうに取られて了ふのですか？』

『一文も、妾のものになりはしません……約束から云へば、三分が妾のものになる筈なんですけれども、食事だとか、小遣ひ錢とか、髪結賃とか、薬代とかみんな倍か三倍位にして取られるものですから、何の役にもたゝ無いのです……此世界へ落ちたら、もうのたれ死するより外に道はありませんわ。』

『ぢや、四百圓位あれば、あなたを自由の身にする事が出来ますか？』

『妾はもう自由の身になりたくありませんわ……こんな腐つた體を誰れも引取つてくれる人なんかありやしませんもの……私は出来るだけ早く死なうと思つて居るのです。然し今死ぬとお母さんが泣きますから、お母さんが死んだ後にさうせうと思つて居るのです。妾はいつも煩悶ばかりして居るのですよ……今になつて考へると妾は耶穌教なんか聞かなかつたが善かつたと思ひますわ、あれを聞いて居たばかりに私はどんなに苦しむかわかりませんが、妾は毎日地獄の底で火あぶりに會つて居る

やうなものです……あなたお會ひになつたでせう、「瓢軒で」あの頭の禿げた人に……あの人はこのあたりで評判の悪漢なんです、有名な賭博打ちです。あの人は、妾が此處へ来た三日目の晩から、あゝやつて、瓢軒の「離れ」に這入つた切り、瓢軒を我家のやうにして、妾に付き纏ふて離れ無いのです。それに妾はあの男が大嫌ひで、逃げ廻るやうにして居るのですけれども、蛇に見込まれたやうに、片時だつて、離れないのです。たゞ賭博に行く時だけ妾は息をつくのです。あの人はね、いつでもドスを懐に呑んで居て、妾を「殺す、殺す」と云ふのです。私はあの男に殺されるか、身投げするか、どつちかになると思つて居ります。』

玉枝の云ふことが眞剣なので、心の底で祈り乍ら新見は靜かに聞いてゐた。玉枝は猶續けた。

『あなたが、たとひ私を身受けして下さつても今は時が悪いですよ。今、私が瓢軒を出ると云へば、私は必度あの男に殺されて了ひます……あの男の爲めに、私は全く自由を奪はれて了つて居るのですから……』

裏座敷のぞめきは今、闌である。濕つた玉枝は猶續けた。

『此間、私は八卦を見て貰ひましたら、妾は巳の年の男とかゝり合ひが出来て今年中に殺されるか死ぬかすると云ひました。そして、あの男の年を調べたら巳の年でせう。それで私はもう諦めて居るの